

石川県鹿島郡鹿島町

# 徳前 C 遺跡

主要地方道氷見・田鶴浜線道路改良  
工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

石川県立埋蔵文化財センター



石川県鹿島郡鹿島町

# 徳前 C 遺跡

主要地方道氷見・田鶴浜線道路改良  
工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

石川県立埋蔵文化財センター



## 例 言

1. 本書は、主要地方道氷見・田鶴浜線道路改良工事に伴う徳前<sup>とくぜん</sup>C遺跡(『石川県遺跡地図』1992 No.34092)の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査地は、鹿島郡鹿島町徳前ふ之部34番地にあたる。
3. 調査は、県道路建設課(七尾土木事務所)の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。費用は同課が負担した。
4. 現地調査は、平成2年8月7日～11月10日に1,000㎡を対象に実施し、北野博司、小阪大が担当した。
5. 本書の執筆は、北野と小阪が日次の通り分担した。このほか、藤則雄氏(金沢大学総合大学院自然科学研究科)と鈴木三男氏(金沢大学教養部)・能城修一氏(農林水産省森林総合研究所)には、それぞれ花粉分析、樹種同定を依頼し、玉稿をいただいた。青島清雄氏(国立科学博物館客員研究員)にはサルノコシカケの同定を依頼し、鑑定結果をいただいた。
6. 本書の編集は北野が行った。
7. 報告書作成にあたっては、藤田美和子、渡辺恵美、川端敦子の協力を得た。
8. 本書で用いる方位はすべて座標北で、水平基準は海拔高である。
9. 出土品、記録資料は、現在、石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

# 目 次

第1章 位置と環境 .....	(小阪 大) .....	1
第1節 地理的環境 .....		1
第2節 歴史的環境 .....		3
第2章 調査の経緯と経過 .....		7
第1節 過去の調査 .....	(小阪 大) .....	7
第2節 今回の調査の経緯と経過 .....	(北野博司) .....	10
第3章 調査の成果 .....	(北野博司) .....	11
第1節 調査の概要 .....		11
第2節 遺 構 .....		14
第3節 遺 物 .....		24
第4章 関連調査 .....		55
第1節 鹿島町徳前C遺跡の花粉学的研究 .....	(藤 則雄) .....	57
第2節 石川県徳前C遺跡出土木製品の樹種 .....	(鈴木三男・能城修一) .....	65
第5章 考 察 .....	(北野博司) .....	85
住居周辺排水溝からの土器等の一括出土について		
第6章 ま と め .....	(北野博司) .....	90
写真図版		
遺 構 .....		図版1
遺 物 .....		図版11

# 第1章 位置と環境

## 第1節 地理的環境

徳前C遺跡は能登半島の基部にあたる鹿島郡鹿島町徳前地内に位置している。鹿島町は鹿島郡最南端に位置し、北は七尾市、東は富山県氷見市、南は羽咋市、西は鳥屋町・鹿西町の両町にそれぞれ隣接している。町域は東西約12km、南北約10kmである。徳前C遺跡は鹿島町徳前地内の通称七半（シチハン）から隣接する鳥屋町黒氏地内にまたがって所在している。

鹿島町の地形は、扇状地を主とする邑知地溝帯の低地とこれに東接する低山よりなる山地域との二つに区分される。鹿島町は23集落より成り立っているが、そのうち約7割の14集落が西側低地部分に立地している。

低地とは、邑知地溝帯の北東部を占める石塚川・二宮川・長曾川・熊野川・小竹川・久江川・長谷川・松本川・地獄谷川などの河川によって形成された小扇状地と完新世における沖積層とからなる地域である。邑知地溝帯は、新第三紀～第四紀更新世にかけて形成されたもので、能登半



第1図 遺跡の位置

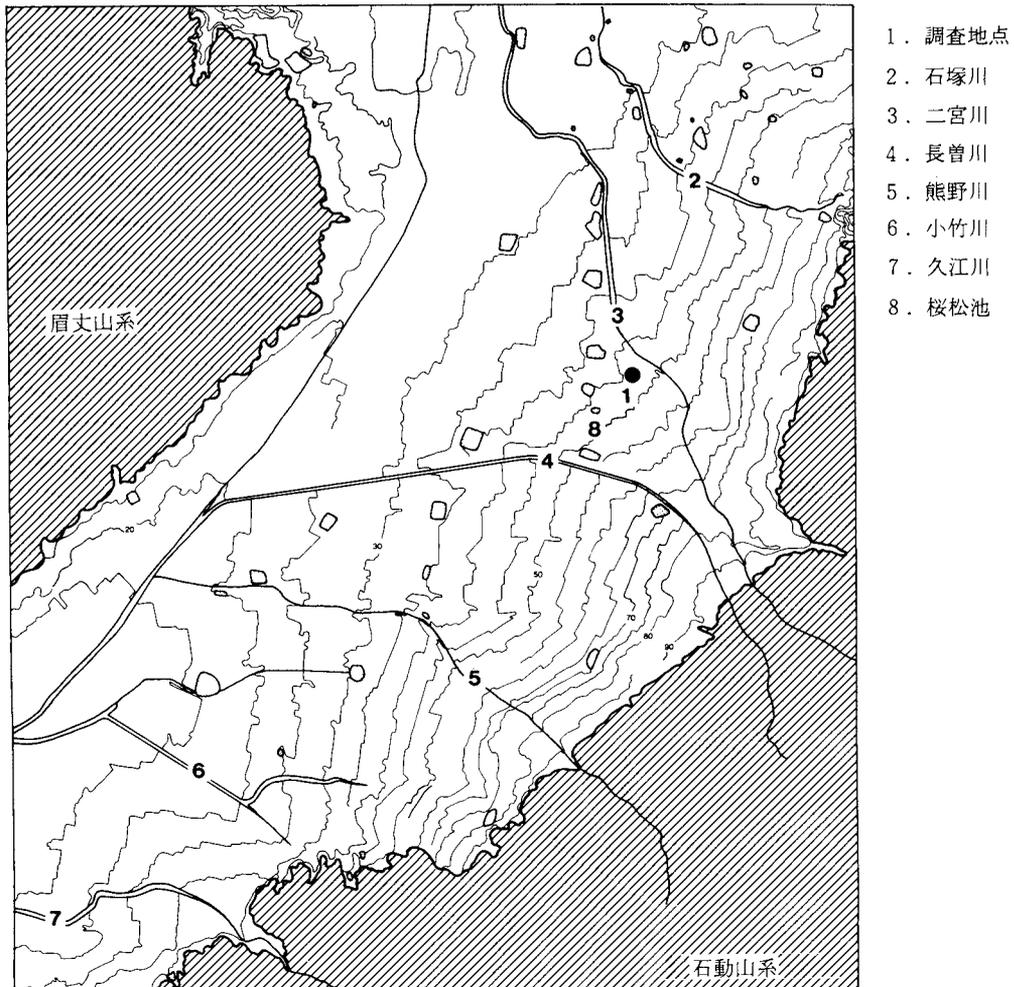


第2図 遺跡の地理環境 『鹿島町史』資料編1966 原図

島基部の南西側羽咋市から北東側七尾市までの約20kmを幅約2～3kmの低地で能登半島を南北に斜断している。これによって能登半島の山塊も南北に大きく二分されている。呂知地溝帯の南には呂知瀉があり地溝帯の中央部はかなりの低湿地である。

山地域とは、呂知地溝帯に東接する宝達山系（宝達山637m）から派生する石動山（565m）や碁石ヶ峰（461m）等の峰々で七尾市の崎山半島まで伸びている。このうち、鹿島町の石動山・碁石ヶ峰等は標高は低いが、山が新第三紀の礫岩層からなっており、急峻な地形を呈している。これらの山々の急峻な谷間を流れてきた川は急激に呂知地溝帯に流れ込むため、多くの小扇状地を形成している。そして、地溝帯の山地に接する山麓域では、起伏の激しい扇状地が、大・小入り混じって発達している。これらの扇状地の発達により呂知地溝帯は石動山・碁石ヶ峰等の山地側から鳥屋町・鹿西町側にかけてゆるく傾斜している。ちなみに、呂知地溝帯の北西側にかけては標高188mを測る雷ヶ峰を最高峰とする標高150m以下の眉丈山系が連なっているが、眉丈山系側の傾斜はゆるく地溝帯に注ぐ小谷川も少ない。

ここに報告する徳前C遺跡は、その源を石動山に発する二宮川・長曾川の両河川によって形成



第3図 遺跡周辺の地形（5mコンター） S = 1/50,000

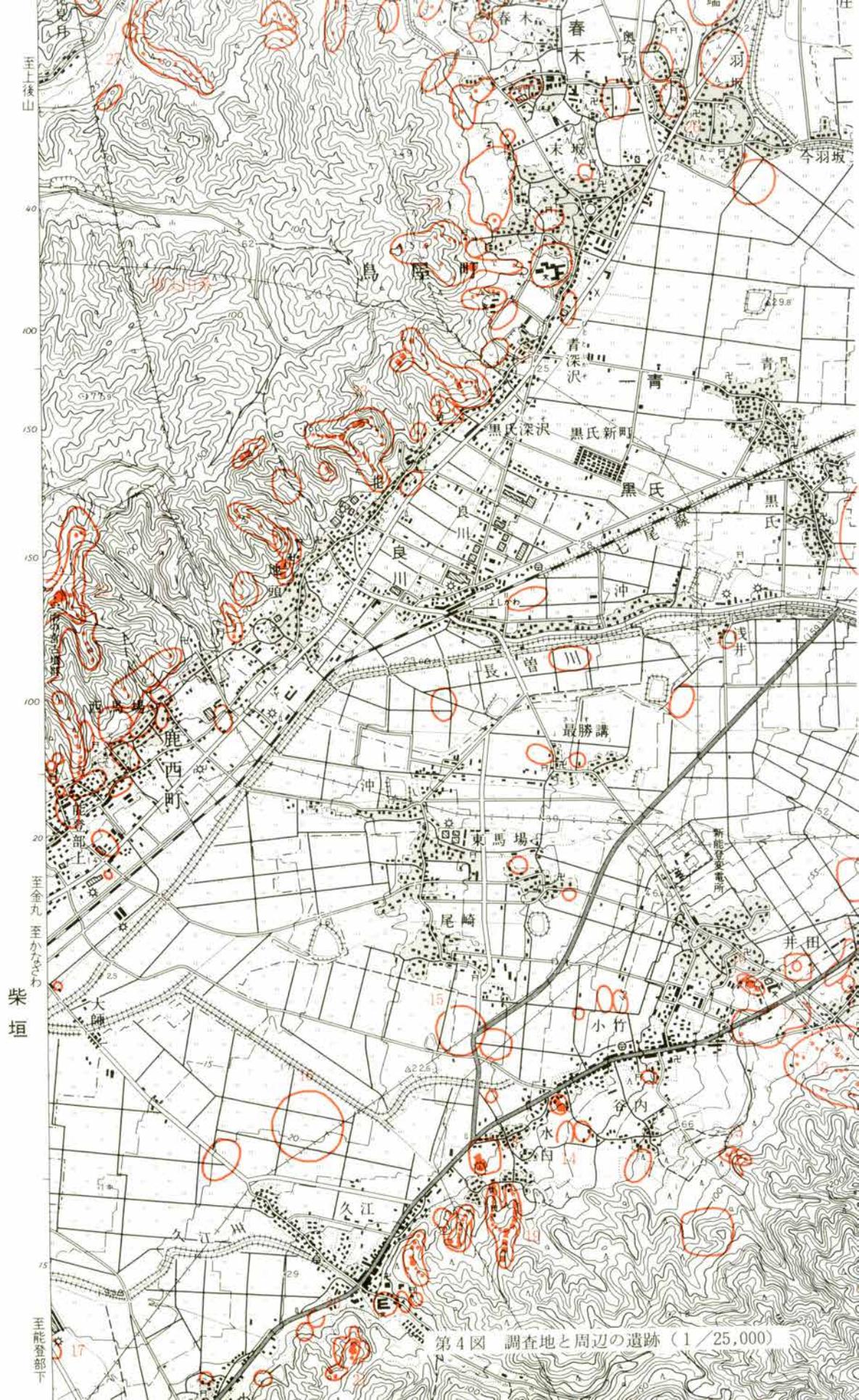
された複合扇状地のほぼ中央部に立地する。二宮川・長曾川の両河川は、邑知地溝帯最大の河川として地溝帯を貫流している。徳前C遺跡の北側に位置する二宮川はその流れを北にとり鳥屋町の町境を流れて七尾湾に注いでいる。また、徳前C遺跡の南に位置する長曾川は流路を南にとり邑知潟に注いでいる。徳前C遺跡は二宮川・長曾川の両河川にはさまれているため両河川による影響を強く受けている。このことは、遺構面に至るまでの堆積層の厚さや調査の結果、砂礫層と砂層が交互に堆積した旧河川が確認されたことから扇状地特有の地形上に遺跡が立地していることがわかる。また、現在でも二宮川・長曾川の両河川が扇状地特有の暴れ川であるという証拠として山間部を抜けると天井川となっている。現在、徳前の集落は徳前C遺跡の南東方向、二宮川・長曾川の両河川の上流部に立地しているが、I～N次調査の結果と今回の調査から総括して考えると人々は河川の流路の変化と伴に僅かに高い微高地を選び集落を移動させていったと考えられる。

## 第2節 歴史的環境

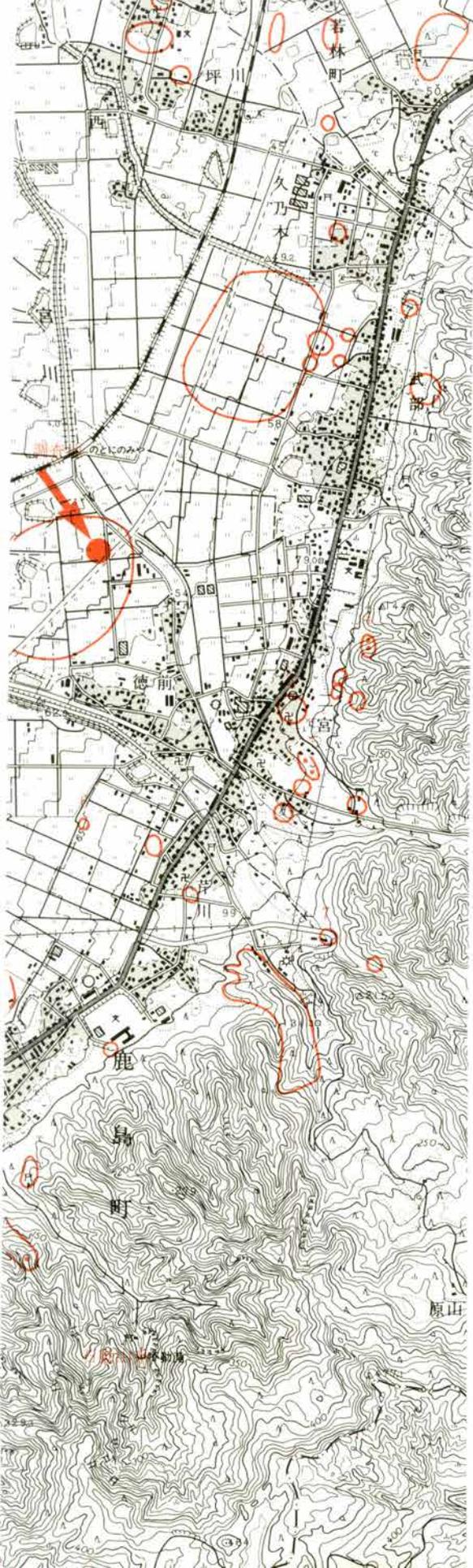
さて、上述の地形的環境を考慮しながら歴史的環境について述べて行こう。遺跡は眉丈山系・石動山系の山麓部や尾根筋に多く立地する。これは、地溝帯部が湿地が多いことと扇状地上は度々起こる洪水のために人が住みにくいという原因が考えられる。しかしながら、地溝帯の扇状地部分にも徳前C遺跡をはじめとして水白モンショ遺跡・久江ツカノコシ遺跡・小田中おぼたけ遺跡等集落遺跡があり、扇状地上の僅かに高い旧微高地に遺跡は存在している。では、時代ごとに遺跡の立地を見ていくことにしよう。

周辺で最古の遺跡は、鳥屋町若狭見遺跡から楕円押型紋土器（縄紋時代早期）が採集されている。また、同町新庄地内から縄紋時代早期末頃の尖底土器も出土している。縄紋時代前期では土坑や炉跡等の遺構を検出した田鶴浜町の吉田野寺遺跡、佐波式土器を検出している鳥屋町花見月遺跡、七尾市水上ロクンダン遺跡がある。徳前C遺跡でも第N次調査で縄紋時代前期後葉の福浦上層式から中期前葉の新崎式までの土器が出土していた。特に主体となる土器は、木目状燃糸紋・格子目状紋・半載竹管紋・円筒形という風に新保式（前期末～中期初頭）と新崎式の間を埋める土器であり、米沢義光・西野秀和氏によって徳前C式土器と設定された。ちなみに、これらの土器の包含層は地表下1.5～2mの湧水の激しい層であり扇状地上でも縄紋遺跡が立地することを実証した。鹿島町井田堂坂遺跡（鹿島町教委調査）では、真脇遺跡や金沢市新保本チカモリ遺跡で検出された「巨大環状木柱列」と同じ構造をもつ晩期中葉の中屋式に伴う円形にめぐる柱穴を検出している。以上、邑知地溝帯内でも縄紋遺跡は存在し今後注意する必要がある。

弥生時代に入ると、前期・中期の遺跡は邑知地溝帯内及びその周辺では少なく、地溝帯東部では中期の小松式土器を伴う七尾市細口町の細口源田山遺跡（方形周溝墓を検出）、眉丈山系の丘頂に立地し小松式土器を伴う竪穴式住居を8棟検出した高地性集落跡の鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡、前期と中期の土器が多量に出土している邑知潟から日本海に注ぐ羽咋川の川沿いに立地する吉崎・次場遺跡等がある。



第4図 調査地と周辺の遺跡 (1/25,000)



1. 徳前C遺跡 (縄文～奈良)
2. 武部ショウブダ遺跡 (奈良・平安)
3. 二宮上野遺跡 (弥生・中世)
4. 徳前古墳群 (古墳)
5. 二宮古墳群 (古墳)
6. 芹川母田遺跡 (古墳)
7. 芹川八幡遺跡 (古墳)
8. 井田テラガイ遺跡 (弥生)
9. 井田佐味太郎遺跡 (弥生～古墳)
10. 井田岡野山古墳群 (古墳)
11. 井田堂坂遺跡 (縄文、古墳、奈良、中世)
12. 井田古墳群 (古墳)
13. 小竹谷内山古墳群 (古墳)
14. 小竹平遺跡 (弥生～奈良)
15. 水白モンショ遺跡 (弥生～中世)
16. 久江ツカノコン遺跡 (縄文～中世)
17. 藤井サンジョガリ遺跡 (弥生)
18. 水白鍋山古墳 (古墳)
19. 水白円山古墳群 (古墳)
20. 小田中おばたけ遺跡 (弥生)
21. 久江オハヤシ山古墳群 (古墳)
22. 雨の宮古墳群 (古墳)
23. 良川北A古墳群 (古墳)
24. 末坂古墳群 (古墳)
25. 一青A遺跡 (弥生、古墳)
26. 羽坂B遺跡 (弥生)
27. 花見月遺跡 (縄文)

邑知地溝帯中央部へ多くの遺跡が進出するのは集落規模の拡大、農耕生活の定着と共に弥生時代後期～古墳時代前期にかけてである。水白モンシヨ遺跡・久江ツカノコシ遺跡・小田中おぼたけ遺跡等、集落跡が地溝帯中央部まで分布している。今回の徳前C遺跡の調査でも弥生時代後期の集落跡が主体として検出された。

このように、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて水稻耕作技術の発展、それに伴う人口増加から、人々は微高地を選びながら邑知地溝帯中央部へと進出して行ったと考えられる。

古墳時代に入ると、邑知地溝帯の両側山地域の山麓部及び山地の尾根に多くの古墳が築かれている。その数は分布調査によると地溝帯周辺の七尾市、羽咋市、鳥屋町、鹿西町、田鶴浜町、鹿島町で800基を越えると言われている。鹿島町小田中には宮内庁の陵墓に指定されている小田中新王塚古墳・亀塚古墳がある。新王塚古墳からは、三角縁神獸鏡二面と管玉・鍬形石断片各一点が出土し、現在、白久志山御祖神社の御神体として当古墳の出土品と考えられる三角縁波紋帯三神三獸鏡一面がある。また、鹿島町久江・水白古墳群の水白鍋山古墳では、波紋帯方格規矩鏡が出土している。これらの古墳の形・出土品は畿内の影響を受けており地溝帯周辺に強大な能登の国が存在したと考えられている。

奈良・平安時代では、徳前C遺跡では奈良時代前期の掘立柱建物8棟、井戸1基等が検出され拠点的な集落の一部と想定されている。徳前C遺跡の北東に位置する武部シヨウブダ遺跡でも平安時代の数棟の掘立柱建物が発見されている。武部シヨウブダ遺跡も徳前C遺跡同様地溝帯中央部に立地する遺跡として貴重な存在である。

以上、邑知地溝帯内部及びその周辺の遺跡の立地について述べたが、地溝帯中央部では今後の調査によりさらに遺跡の確認例が増えてくると予想される。また、当地域では稲作地帯であり、集落遺跡の周辺では水田遺跡の存在にも注意する必要がある。

#### 〈参考文献〉

- 人文社；郷土資料辞典 石川県 昭和60年発行  
橋本澄夫；日本の古代遺跡 43 石川 保育社 平成2年発行  
石川県教育委員会；鹿島町徳前C遺跡調査報告書（Ⅰ） 昭和53年発行  
石川県立埋蔵文化財センター；鹿島町徳前C遺跡調査報告書（Ⅱ・Ⅲ） 昭和61年発行  
石川県立埋蔵文化財センター；鹿島町徳前C遺跡調査報告書（Ⅳ） 昭和58年発行  
石川県立埋蔵文化財センター；水白モンシヨ遺跡報告書 平成元年発行  
石川県立埋蔵文化財センター；鹿島町井田堂坂遺跡報告書 昭和61年発行  
鹿島町教育委員会；小竹ガラボ山古墳・小竹平古墳報告書 昭和60年発行  
鹿島町役場；鹿島町史 資料編 後（上巻） 昭和57年発行

## 第2章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯と第1次～第4次調査の概要

徳前C遺跡の発見は、昭和30年前半に実施された耕地整理の際に、土器片が採集されたことによる。また、昭和29年には調査区に隣接する鳥屋町黒氏地内に属する桜松池の改修工事の際に、耕土下1.3mの砂層上部から梯子、舟形木製品、盆形土製品各1点が弥生時代後期～古墳時代前期の土器とともに出土している。徳前C遺跡は、これまでに国道159号線（鹿島バイパス）の建設工事に伴い4次にわたる発掘調査が行われた。以下、4次調査までの主な成果をまとめた。

#### 第1次調査（昭和52年）

対象域約1,800㎡について試掘調査を実施し、出土した土器から弥生時代～古墳時代前期と奈良時代・平安時代の複合遺跡である事が判明した。内約750㎡を全面発掘調査した。その結果、上層では奈良時代の8棟の掘立柱建物（3時期にわたり建てかえが行われた。）と柵列、3条の方形溝、1基の井戸、2基の土坑を検出した。下層は湧水が激しく遺構は検出できなかった。

#### 第2次調査（昭和53年）

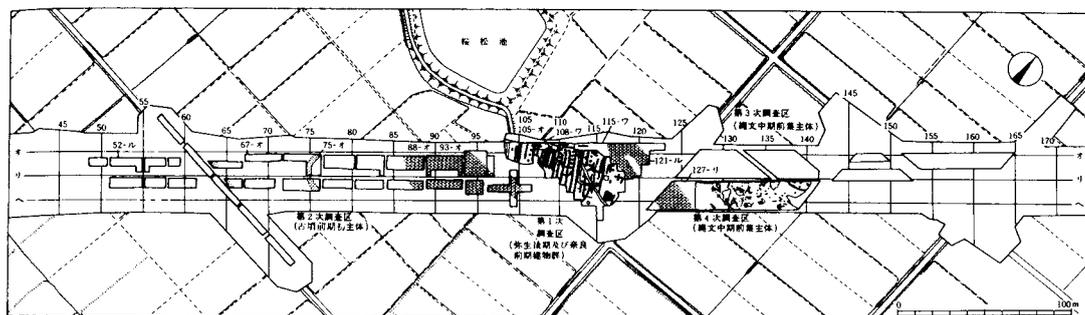
約2,000㎡を発掘調査した。第1次調査の拡張区からは、奈良時代前期に属する掘立柱建物の柱穴を補足し、新たに南北平行溝数条を検出した。建物群跡の東西方向は奈良時代以降の河川（旧二宮川と推定されている。）により攪乱<sup>かくらん</sup>を受け、上層・下層の包含層は押し流されていた。調査区南西側では中世の遺物が出土し、室町時代の遺構を一部確認した。

#### 第3次調査（昭和54年）

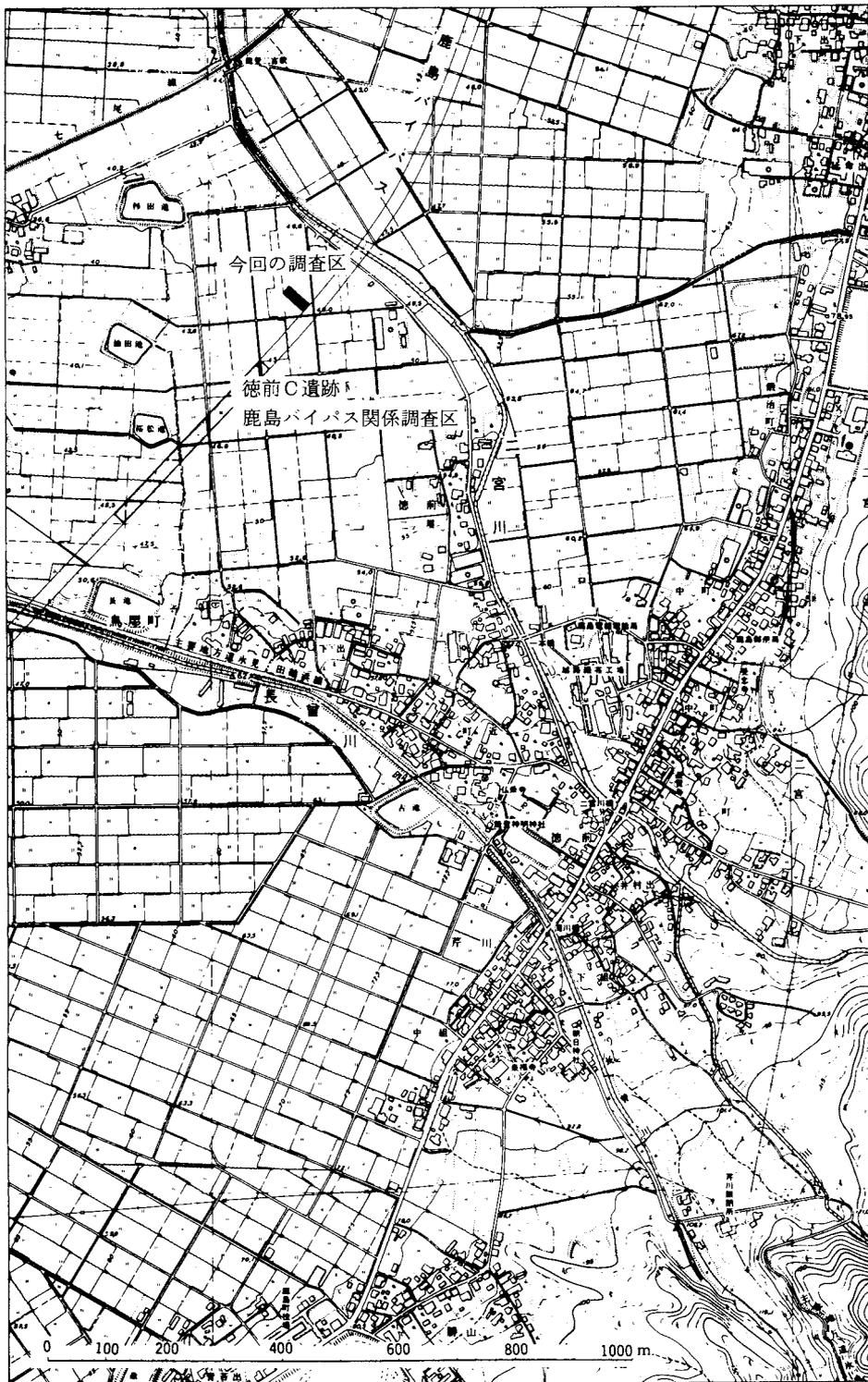
約700㎡を発掘調査した。上層（奈良時代前期の包含層、遺構は検出されず）、中層（弥生時代の包含層）、下層（縄紋時代中期前葉主体の包含層）が確認された。

#### 第4次調査（昭和55年）

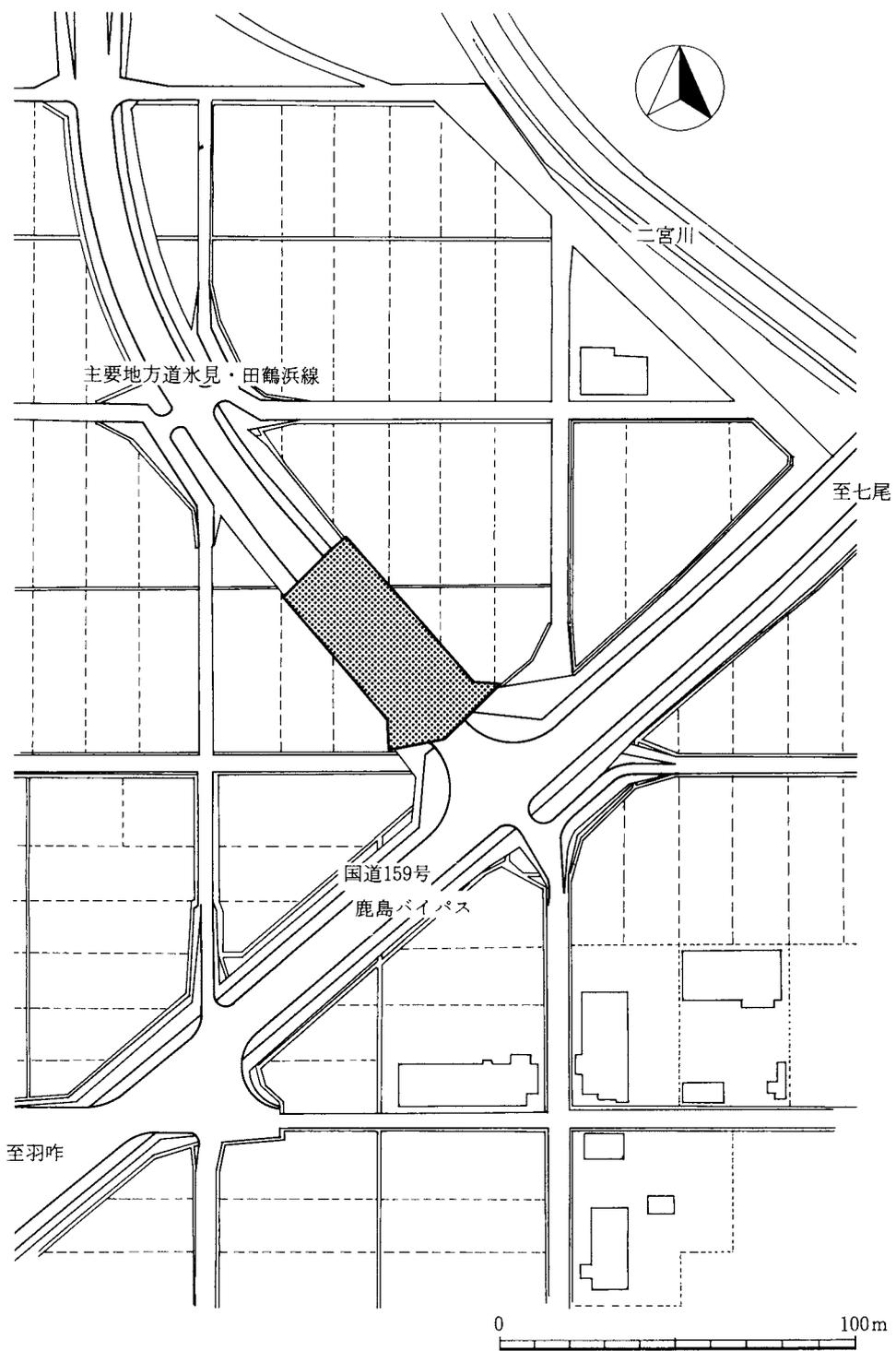
約600㎡を発掘調査した。縄紋時代および弥生時代後期～古墳時代の遺構が確認された。調査区北東側（七尾側）では、弥生時代後期の土器を含む住居址と見られる遺構を検出した。調査区中央部では縄紋時代中期前葉（徳前C式）を主体とする土器が多量に出土した。



第5図 鹿島バイパス関係調査区の概要 『鹿島町徳前C遺跡調査報告（Ⅱ・Ⅲ）』より



第6図 調査区の位置



第7図 調査区の位置

## 第2節 今回の調査の経緯と経過

**遺跡の発見と協議** 徳前C遺跡の発見は昭和30年前後と比較的古く、その後、遺跡の中心部に国道159号鹿島バイパスが計画されたことにより、昭和52年度以降、4次にわたって発掘調査が行われてきた。その成果は前節のとおりであるが、今回は遺跡の北辺に、主要地方道水見・田鶴浜線の道路改良事業が計画されたことが遺跡の発見の直接の原因となった。

昭和61年10月、県土木部道路建設課より路線内の埋蔵文化財の有無についての調査依頼があり、同年10月28・29日、本センターが試掘調査を実施した。その結果、今回発掘調査対象とした範囲に埋蔵文化財（中世の遺物包含層）の存在が想定され、その旨を回答している。その後、両者で遺跡の取り扱いをめぐる協議がなされ、平成2年度に発掘調査を実施することで合意した。

**発掘調査** 平成2年7月27日～8月1日に事前準備を行い、8月7日の重機による表土除去作業から現地調査に入った。8月20日より作業員が入り遺構調査を開始したが、湧水に悩まされ、作業は難渋した。現地調査は、11月10日の現地説明会をもって終了、実働70日、作業員延べ388.5人を費やした。調査面積は1,000㎡である。

調査担当：北野博司、小阪 大 調査補助：田畑 弘 研修：林 栄輝（センター長期研修生、現鹿島町教育委員会）

作業員：市井順一（鹿島町徳前）、高橋恵子（同）、柿木良作（鹿島町武部）、西村三郎（鹿島町二宮）、中村正喜知（同）、芝山幸一（同）、辻口弘良（鹿島町最勝講）、辻口秋子（同）、木野下みどり（鳥屋町黒氏）、森正芳江（同）、向さつ（同）、宮島アヤ子（同）

**資料整理** 写真・遺構実測図等の記録資料整理は、平成3年1月～3月に実施した。出土品整理（記名・分類・接合、実測、トレース）は、平成3年度に(株)石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。

**報告書** 本報告書の執筆編集作業は、平成5年1月～3月に実施した。

# 第3章 発掘調査の成果

## 第1節 調査の概要

### 1. 調査の方法

調査対象区は約25m×60mの長方形で北西－南東方向に長い。グリッドは基点を調査区北側に任意に定め、方向は調査区長辺に沿って10m間隔で設定した。グリッド名は北隅の杭で呼称した(第9図)。包含層出土遺物はグリッド単位に取り上げたが、必要に応じて各区を細分した。

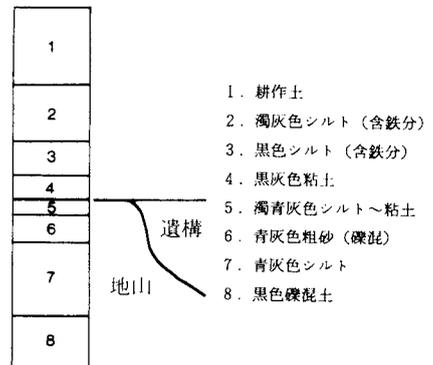
第9図C-2杭付近は、U字溝の入る現況水路で調査は不能であった。調査では排土置場が確保できなかったため、4区付近を境に調査区を2分割し、交互に排土置場として作業を行った。掘削は基本層序の3層までを重機により行い、4層(遺物包含層)を人力によった。遺構検出はすべて5層の上面で行った。

### 2. 地形と層序

調査前の現況は休耕田であったが、夏でも湧水があり、水生植物が繁茂していた。調査前の標高は南東端部が約44.5m、北西端部が約44.0mと緩やかに北西に向けて傾斜していた。調査後の遺構検出面の標高は、前者が44.0m、後者が43.0mとやや傾斜が急となっている。

標準層序は第8図のとおりである。1層は耕作土、2層は鉄分を含む濁灰色シルト、3層が鉄分を含む黒色シルト、4層が黒灰色～黒褐色粘土で弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層となっている。調査区北西部はこの間の層厚が約1.0m、南東部では約0.5mを測る。5～7層は青灰色の粘土～シルト～礫の互層であるが、層順・層厚は地点によって差異がある。遺構検出面は北西半がほぼ粘土～シルトで、南東半はシルト～礫層となっていた。遺構の埋土は奈良時代のものが黒色味が強い色調であったが、弥生時代のもとの色調で明瞭に識別できるほどのものではなかった。C-4区南端のたちわり部では5～7層間に茶灰色ピート薄層を挟んでいた。8層は黒色粘土でピート質、礫混じり。9層は礫層で、C-2区大溝部分では、遺構検出面下約0.6mでその上面に達した。しかし、C-4区南端たちわり部では、検出面から約1.6m掘削したが礫層には到達しなかった。この部分では約1.0mで茶褐色ピート層(8層に対応か)、約1.2mで灰色粘土層となっていた。5層以下の層については地点により複雑な堆積を示すとみられるが、土器等の出土は確認できなかった。8層からは自然木が出土しており、その一部は樹種同定を行った。

調査時は夏から秋にかけてであったが、遺構検出面からは常に湧水があり、周辺水田からの漏水とあわせて、



第8図 標準層位

水中ポンプで24時間排水を行ったが、それが乾くことはなかった。

### 3. 遺構の概要

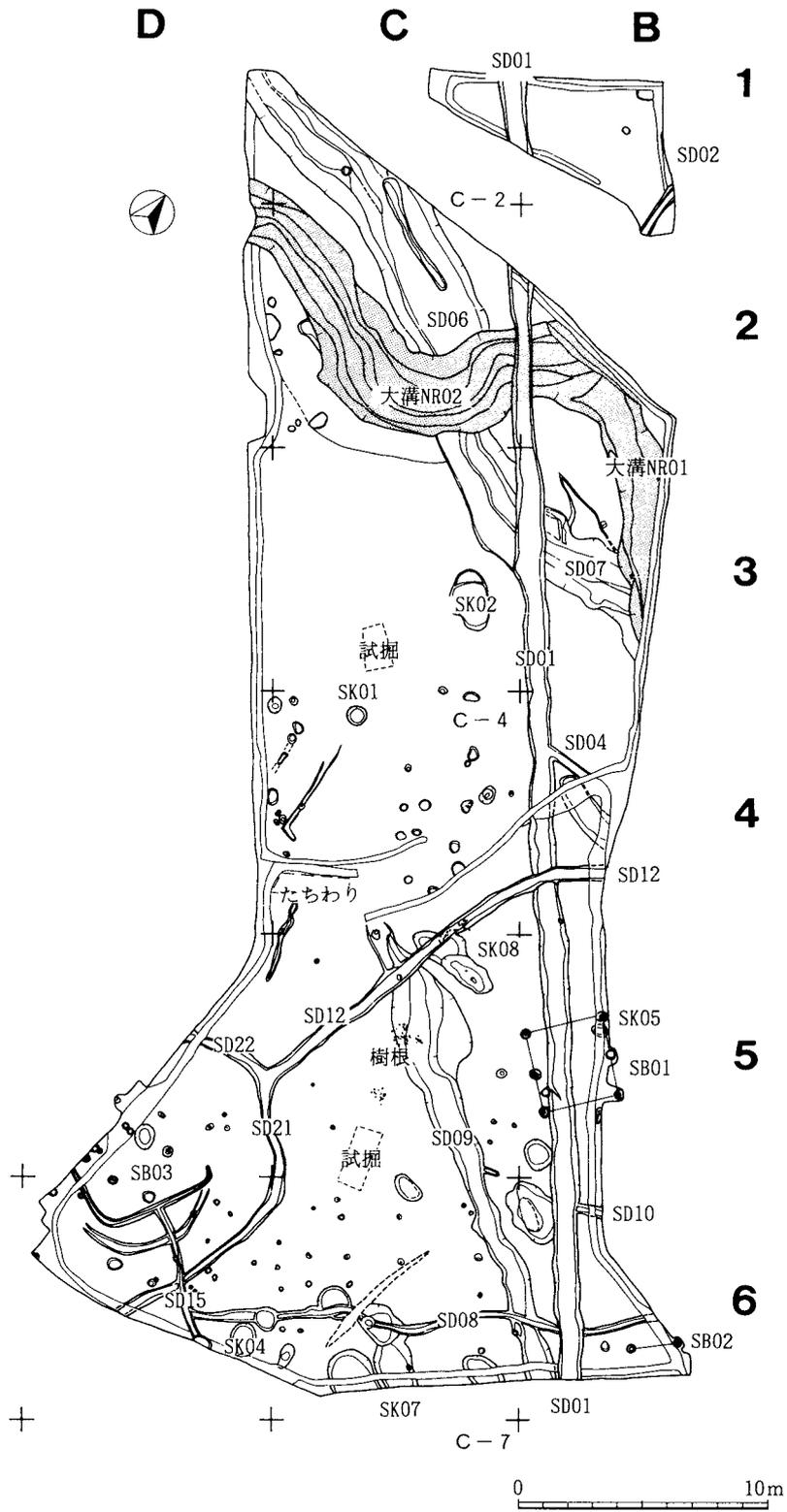
検出した遺構は弥生時代後期のものが中心で、建物跡3棟と溝、土坑などがある。その他、古墳時代前期と、奈良時代かとみられる溝、土坑が少量ある。

縄文土器は晩期後半～終末のものがコンテナ約1箱分出土した。該期の遺構は1基の土坑がその可能性を持つ他は認められなかった。晩期の包含層は本来は5層上面にあったものと思われる。8層から土器は出土しなかったが、縄文時代のものとするれば中期頃であろうか。

弥生時代後期では、北西部に東西に蛇行して走る大溝（自然流路か）NR01・02があり、南東部の微高地に建物跡SB01～03が立地する。大溝は、B－2区で北西流するNR01と北東部から流れてきたNR02が合流し、D－2区方向へ西流する。一方、南東部のSB03を囲んでいる溝SD21・22は建物の北側で一本に合流しSD12となって北流し、調査区外でNR01に注ぐとみられる。

古墳時代前期の遺構は、C－4区SK01の他、ほとんどが調査区南端のC・D－6区に位置する土坑群と溝SD08である。土坑群は浅い楕円形のもので環状に連結しており、内部に建物が存在する可能性もある。

奈良時代は、D－6杭付近から須恵器大甕・小甕・長頸瓶が一括出土したが、建物跡は検出されなかった。溝SD01は等高線に直交して直線的にのびるもので、その東側にはほぼ等間隔に小溝SD02・04・10が派生している。農業用排水路の可能性があらうか。

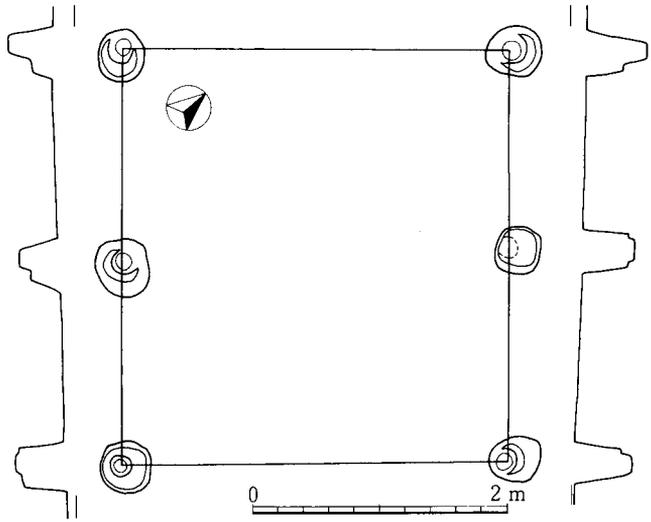


第9図 調査区全体図

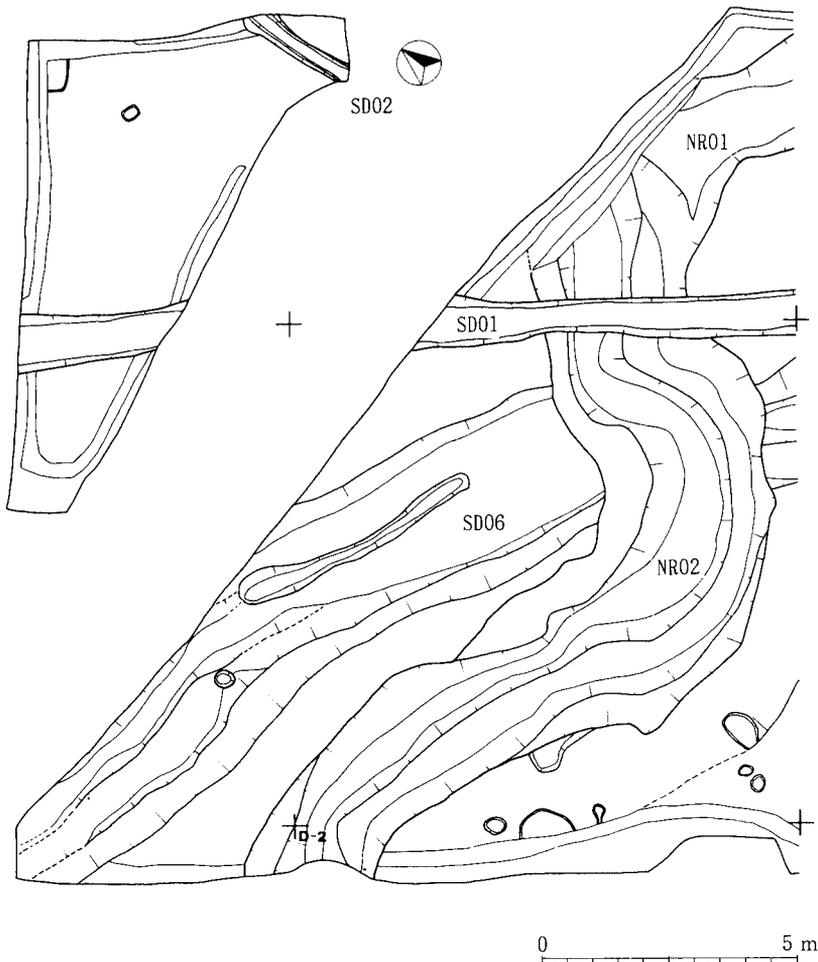
## 第2節 遺構

### 1. 建物跡

SB01 B-5区に位置する2間×1間の掘立柱建物跡。方位はN51° W。桁行は3.3m、梁間は3.05m、底面積10.07㎡。柱穴は検出面の径約40cmの円形で、深さは一段目までが20~30cm、柱痕部の底までは35~50cmを測る。柱根の遺存はなかったが、柱痕部からみて約15cm程とみられる。北東側の柱列中央柱



第10図 SB01実測図 (L=43.7m)



第11図 遺構図(1)

穴埋土（柱抜き取り後）から、完形ではないが図上復元可能な甕形土器1個体（16）が出土した。弥生時代後期後半に属する。

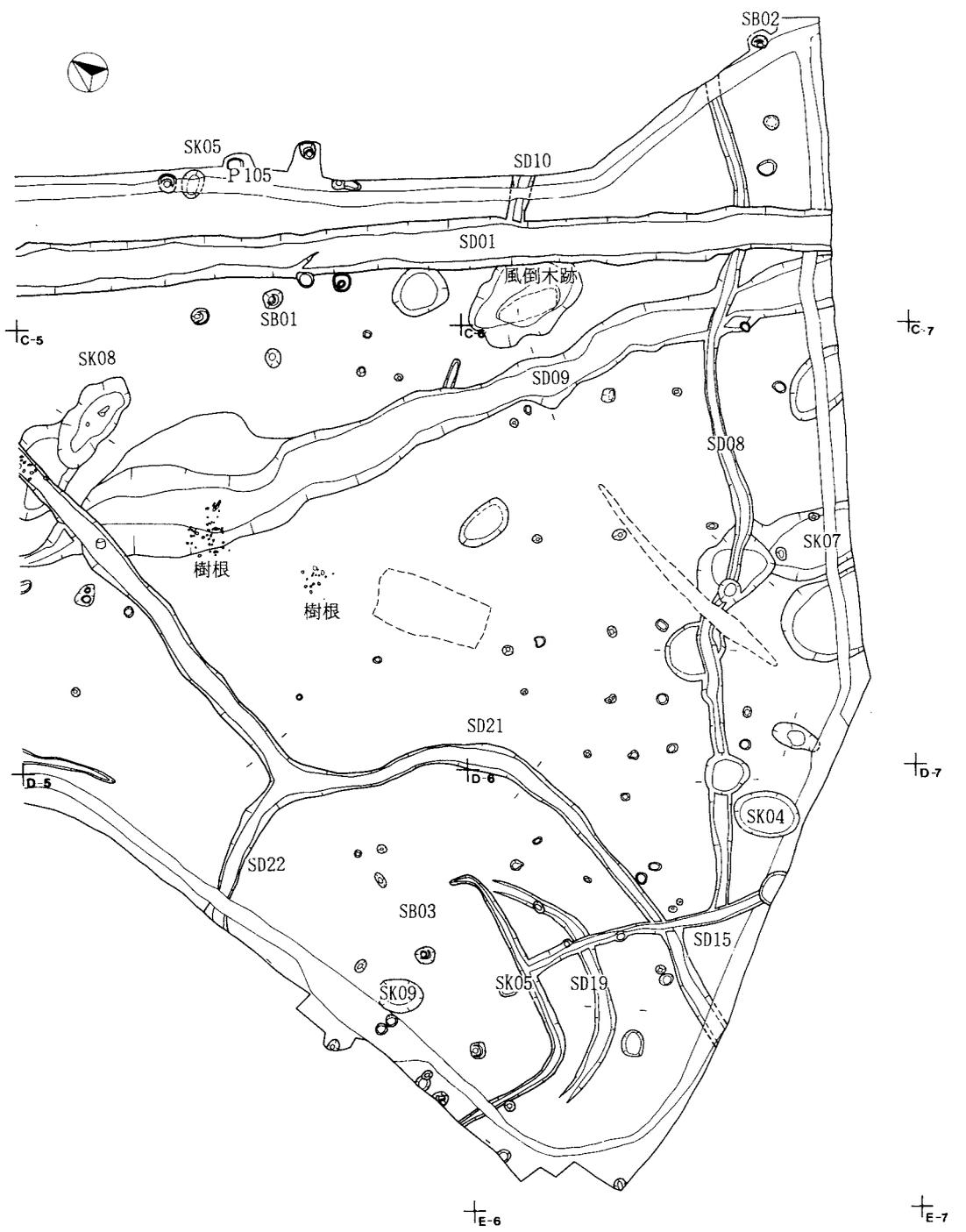
SB02 B-6区に存在する。柱穴2個を検出したのみであるが、その特徴がSB01のそれに類似することから、掘立柱建物跡と推定した。柱穴は径約40cmの略円形で、深さ約25~30cm。柱間は1.75mを測る。遺物は弥生土器細片が出土したのみで時期は特定できないが、SB01柱穴との共通性からほぼ同時期と推定している。

SB03 D-5・6区に所在する竪穴建物跡。隅円長方形の2本主柱で主軸方向はN23° E。竪穴の掘り込みは浅く、低地側の西と北の壁は流失している。規模は約5.2m×4.0m。検出面からの深さは東壁沿いで約10cm。壁溝は床面から深さ5~8cm。主柱穴は径約40cmの円形で、深さは北側が67cm、南側が54cmを測るが、底面は当初からの掘り込みではなく、柱が沈んだものとみられる。柱根は心材で径約15cm、切断面以外には明瞭な加工痕は認め難い。樹種はカエデ属。

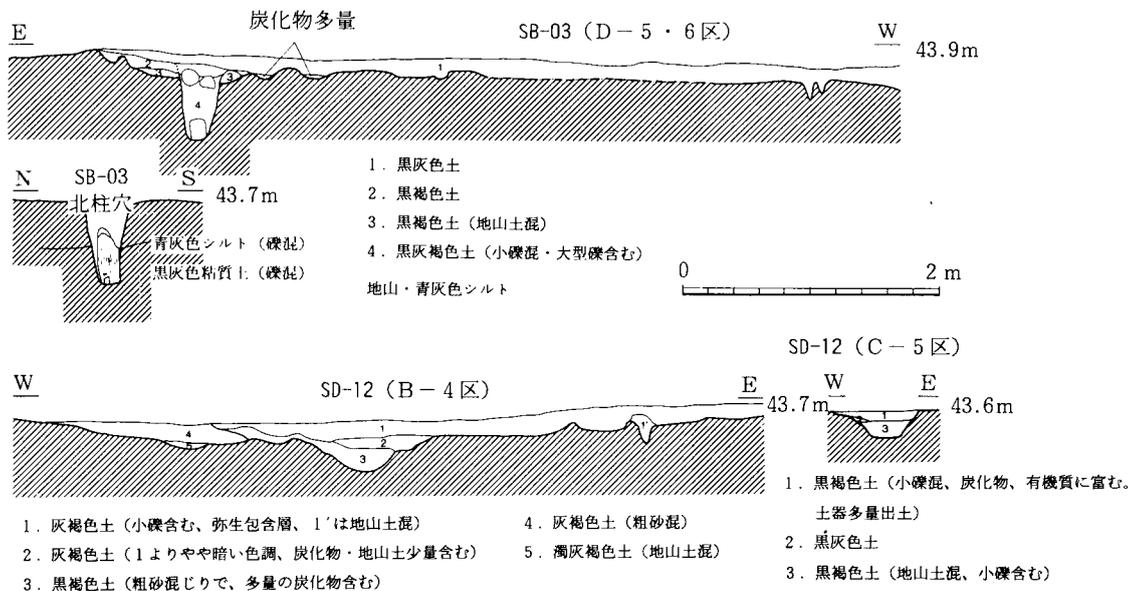
東壁沿いほぼ中央には壁溝からやや離れて、径約50cm、深さ10cmの不整円形土坑（SK05）があり、屋内貯蔵穴の可能性はある。その他、不整楕円形で1.0m×0.7m、深さ45cmの土坑（SK09）、



第12図 遺構図(2)



第13図 遺構図(3)



第14図 SB-03、SD-12土層断面図

調査区壁沿いに、底に石を置き上面にも礫2個を置く深さ60cmのピット(第14図)がある。前者は堅穴に付属する可能性があるが、後者は堅穴廃棄後に掘り込まれたものである。床面東側は、包含層直下であったことや湧水が激しく、排水溝が存在するなど、精査作業は困難であったが、支柱穴は検出されなかったので2本支柱と判断した。炉跡とみられるような焼土面は検出できなかった。

出土品は、SK05の器台6がある。僅かな堅穴埋土中からは弥生土器の細片が少量出土したにすぎない。SB03の時期については、周囲の溝SD21・22を一体的なものとして捉え、その出土遺物から、弥生時代後期後半のものとして判断した。

なお、東壁の外には弧状の溝が存在しており、別の堅穴住居跡が重複していた可能性がある。また、東壁から東側にのびる溝SD15は、SB03に付随するわけではなく、SD21とは切り合っており、古墳時代前期の土器等が出土している。

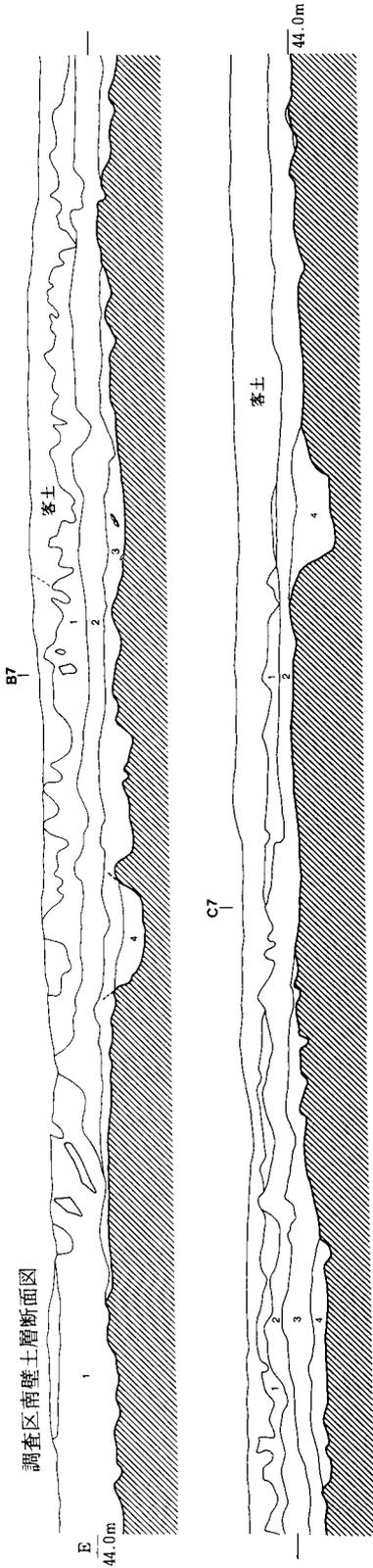
## 2. 溝

SD01 C-6区からSB・C-1区にかけてほぼ一直線に走る溝で底面の標高は両端が44.66m-42.82mで1.84mの比高を持つ。幅は1.0m前後で、検出面からの深さ20~25cmを測る。埋土は大略2層で、上層が黒色~黒褐色粘質土(ピート質)、下層が細礫~砂混土である。下流よりではその下にさらに黒色土の堆積する部分もある。

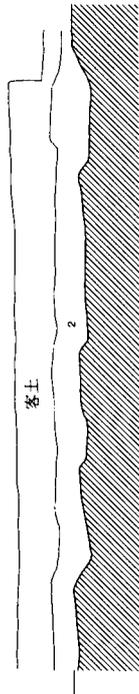
溝の東側にはほぼ18m間隔でSD02、04、10の3本の小溝が派生している。一方、西側に派生する溝はない。3本の小溝に共通するのは、幅に対して比較的深さが深い点である。

出土遺物は少ないが、8~10、144・145などの土器と20個のクルミがある。土器は弥生時代、

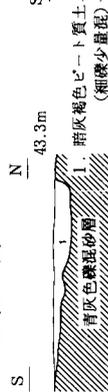
調査区南壁土層断面図



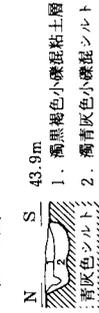
1. 灰黒褐色土
2. 黒褐色土 (小礫混)
3. 濁灰黒褐色土 (地山土少量混)
4. 灰黒褐色小礫混土



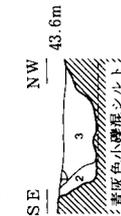
S002 (C-3区)



S004 (C-6区)



S008 (C-5区)



1. 濁灰白色粘土ブロック
2. 濁青灰色シルト (3層混)
3. 黒褐色粘土

S001 (C-1区)

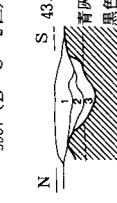


S010 (B-6区)



1. 濁黒褐色土 (地山土・炭化物含)
1. 灰褐色土
2. 濁明灰褐色土 (地山・小礫混)
3. 濁明灰褐色土 (地山・粗砂混)
4. 暗灰褐色土 (軟生包含層)
5. 濁灰褐色土 (地山混)

S001 (B・C-2区)



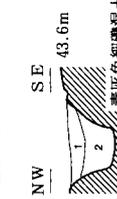
1. 黒色ピート
2. 黒色細礫混砂層
3. 濁黒色粘質土 (青灰色粘土の地山)
4. 黒褐色粘質土 (木片多い)

S001 (B-4区)



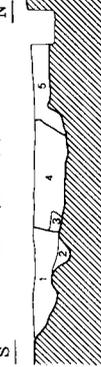
1. 黒褐色粘質土
2. 黒色ピート
3. 黒灰色粘質土 (粗砂多量含む)
4. 黒褐色粘質土

S002 (B-1区)



1. 黒灰褐色シルト質粘土 (細礫混)
2. 黒褐色シルト質粘土 (ピート質・細礫混)

S001 (C-6区)



1. 濁黒褐色粘質土 (ピート質・炭化物多量)
2. 濁黒灰褐色粘質土 (地山土混)
3. 黒褐色粘質土 (地山土混)
4. 黒褐色粘質土 (ピート質) ……S001
5. 濁黒褐色強粘質土 (炭化物多量) ……S010

第15図 調査区南壁、遺構土層断面図

古墳時代、奈良時代のものが少量ずつあるが、各遺構との切り合い関係が最も新しいことなどを考えあわせると奈良時代の可能性が高いのではなからうか。

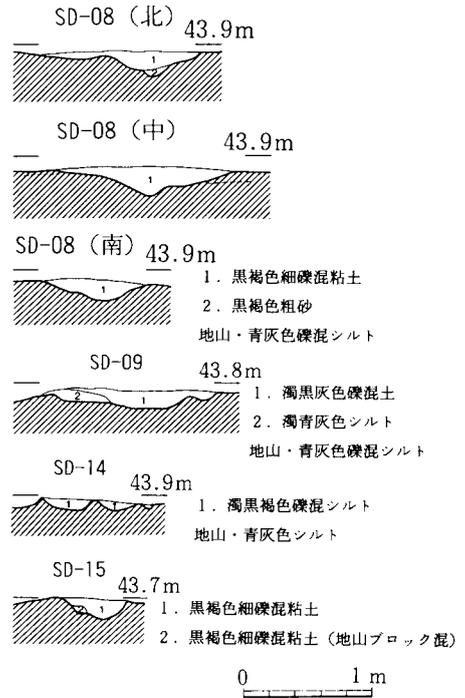
SD06・07 B-3区からC-1区にかけて流れる溝で、幅約2.5m～3.0m、深さ約30cm。土層観察では、溝NR01・02以前に埋没していた。溝内の下層には砂礫層が堆積しており、溝の形状等からみて、流路が固定せず何度も氾濫を繰り返したものとみられる。2層目の砂層中からは、長約1.0cmの種子が多数出土した。出土土器は少量であったが、B-3区のSD07の砂層中からは条痕を有する体部片が一定量出土しており、縄文時代晩期～弥生時代前期頃の可能性をもつ。しかし、SD06の西端部からは弥生時代後期の土器片も僅かに出土しており、混入ないしは別遺構の重複の可能性もある。

SD08 6区を東西に走る細溝で幅30～50cm、深さ10～20cm。埋土は黒褐色で、下層に砂層の存在する部分もある。C-6区内から古墳時代前期の土器(11～15)が出土した。

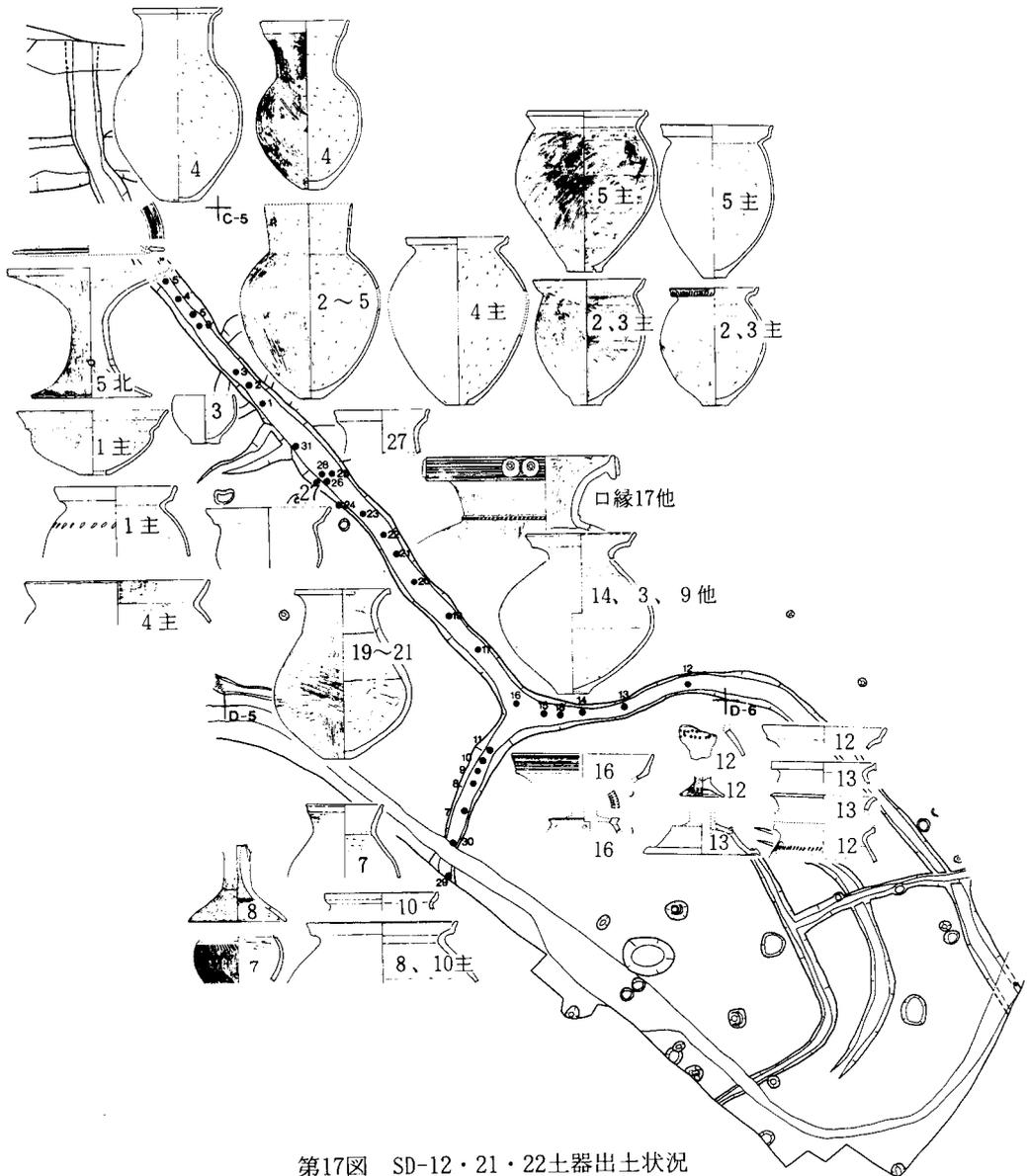
SD09 B-6区からC-5区にかけて流れる溝で幅約2.0～2.5m、深さ10～20cm。SB01に沿うように存在し、SD12付近で自然消滅する。出土土器から弥生時代後期後半のものともみられる。

SD12・21・22 竪穴建物跡SB03をとりまき、大溝NR01へとつながる排水溝と考えたものである。幅は約50～60cm、深さ約20cm。埋土は上層が炭化物・有機物を多く含む黒褐色土で、弥生時代後期後半の土器が多量出土した。下層は地山質土混じりで砂礫を含む濁黒褐色土でまとまった土器は出土しなかった。下層は、下流よりを中心に厚く砂礫を含んでおり、溝が機能していた時期に近い堆積を示すものと考えられ、上層はその機能を終えた段階の堆積ともみられる。溝の断面形は箱形～逆台形に近く、壁の立ち上がりは図以上に急な印象であった。

土器の出土地点は第17図のとおりである。SD12に遺存のよい個体が集中しているが、SD21は土器を含む埋土上層が既に削平されているため本来の有無については不明とせざるをえない。SD12の出土土器はNo.1～5に最も集中する。器種は、各1個体の器台、中型鉢、小型鉢の他、壺(長胴長頸壺)3、甕5以上がある。この他、No.19～21に壺1個体がある。これらの土器はいずれも遺存率の高いものであるが、完形で出土地点に置かれたものではなく、欠損部を持ち、破片が離れて存在したものがほとんどである。あらかじめ壊れた状態でこの溝へ入ったものと推定できる。特に大型広口壺25の破片は、大溝はじめ各区包含層から分散して出土した。しかし、いずれにしてもこれらの土器群は溝への自然流入とはみられず、溝の廃棄に伴い人為的に投棄されたものと考えられる。なお、No.31の横には大型の礫、No.28との間には白色の粘土ブロックがあった。この他、図示した遺物以外にSD12から自然石を利用した砥石が1点出土している。



第16図 溝土層断面図

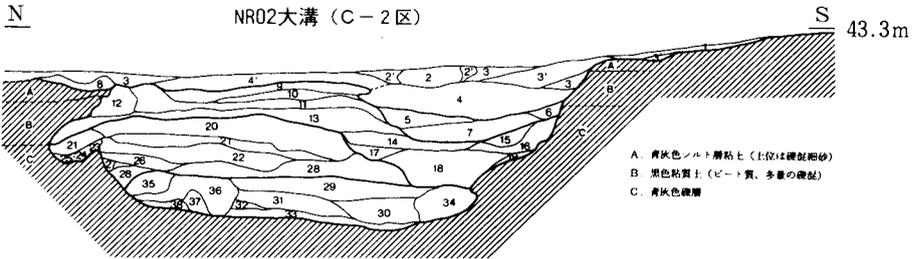


第17図 SD-12・21・22土器出土状況

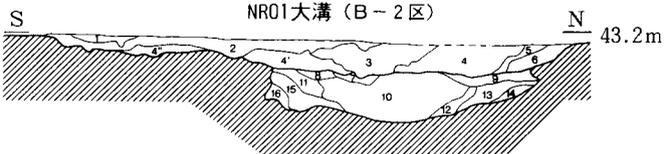
### 3. 大溝

調査区北半に蛇行して流れる自然流路状の溝である。NR02が本流でB-2区からD-2区方向へ流れ、東から流れてきたNR01がこれに合流する。当初、一本の溝とみて調査を進めたが、合流点部分の確認で2本であることが判明した。

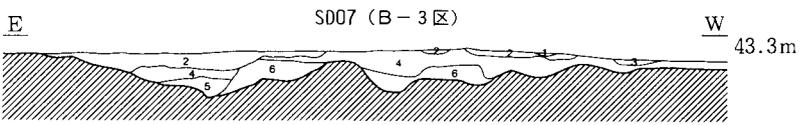
NR01 溝の埋土は大きく上下2層に分けられる(第18図、第19図)。下層段階は幅約2m、深さ約0.6mを測る。両岸は地山を抉るように流れており、粒径の異なる砂層が堆積する。中央部は全体的に粒径の粗い砂礫層(10層)が一気に堆積している。土器・木器が多く出土し、砂利層とし



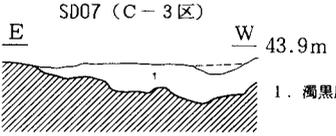
- |                                |                                     |
|--------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 黄灰色粗砂～細礫                    | 19. 暗青灰色細砂層 (ビート質、木片含む)             |
| 2. 黄灰色砂 (中粒)                   | 20. 黄赤灰褐色シルトと黄灰色細砂の互層 (ビート質・木片多量含む) |
| 2'. 黄灰色細砂                      | 21. 暗黄灰色粗砂層                         |
| 3. 黒灰色粘質土 (細礫混)                | 22. 灰色シルト～細砂層と黄色中粒～粗砂層の薄互層          |
| 3'. 黒色粘質土 (5mm～1cmの礫混)         | 23. 黄褐色粘質土                          |
| 4. 暗黄灰色砂利層 (1～2cm多い)           | 24. 黒色粘質土                           |
| 4'. 暗黄灰色砂利層～細砂                 | 25. くすんだ灰色粘質土                       |
| 5. くすんだ青灰色細砂～黄灰色粗砂層の互層         | 26. 黄灰色砂層 (中粒)                      |
| 6. 黒色土 (ビート質、細礫混の地山質土)         | 27. 黒色土 (地山質土)                      |
| 7. 暗黄灰色粗砂～砂利層                  | 28. 暗黄灰色砂利層 (細礫～5cm)                |
| 8. 黒灰色細砂層～細礫混土                 | 29. 暗黄灰色粗砂層                         |
| 9. 灰褐色細砂層～シルト                  | 30. 暗青灰色粗砂層～細礫                      |
| 10. 灰褐色細砂層～シルト (黄灰色中粒砂～粗砂層層含む) | 31. くすんだ青灰色粗砂層                      |
| 11. 黄赤灰褐色細砂～シルト                | 32. 青黄灰色細礫層 (黒色土混)                  |
| 12. 黒色礫混地山質土                   | 33. 青黄灰色礫層 (黒色土ブロック混)               |
| 13. 黄赤灰褐色細砂～シルト (粗砂～少量の細礫層層含む) | 34. 黒色ビート質土層 (地山質土ブロック)             |
| 14. 明黄灰色粗砂層                    | 35. 黒色礫混土 (地山土)                     |
| 15. 暗青灰色細砂層 (ビート質、木片含む)        | 36. 黒色礫混土 (地山土)                     |
| 16. 黒色土 (細礫混の地山質土、ビート質)        | 37. 黒色礫混土 (地山土)                     |
| 17. 暗青灰色細砂層 (木片多く含む、20層の砂落土)   | 38. 青黄灰色粗砂～細礫                       |
| 18. 暗黄褐色砂利層 (1～5cm、粗砂層層狭む)     |                                     |



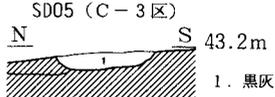
- |  |                                       |
|--|---------------------------------------|
| 1. 黒色シルト質土                               | 8. 暗黄灰色細砂層                            |
| 2. 暗暗黄褐色砂層 (細粒～粗粒混じる、暗灰褐色ビート質土混)         | 9. 灰褐色細砂層 (7と類似)                      |
| 3. 暗黄灰色細砂層 (比較的粘質、一部に粗砂層層狭む)             | 10. 暗黄灰色砂礫層 (粗砂～細礫、土器片多く含む、植物質繊維多量含む) |
| 4. 暗灰褐色ビート質土 (粘性強く、炭粒含む)                 | 11. 灰褐色細砂層 (粒径は8、15より細かい、炭化木片多く含む)    |
| 4'. 暗灰褐色ビート質土 (粘性強く、炭粒含む、粗砂少量含む、大型土器片多い) | 12. 暗黄灰色粗砂層                           |
| 4''. 細砂混暗灰褐色ビート質土                        | 13. 暗暗黄灰色砂礫層 (粗砂～細礫、植物質繊維多く含む)        |
| 5. 暗灰褐色ビート質土と青灰色地山の混合                    | 14. 灰褐色粗砂                             |
| 6. 青灰色シルトの地山土に暗灰褐色土が少量混じる→地山の崩落土         | 15. 黄灰色粗砂 (中粒～粗砂)                     |
| 7. 灰褐色細砂層                                | 16. 暗黄褐色粗砂層、15層に炭化した植物遺体を多く混じる        |



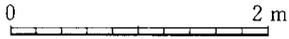
1. 棕色ビート土
2. 暗黄灰色粘質土 (灰黄褐色土も含む)
3. 灰黄褐色粗砂
4. 暗黄灰色粘質土 (灰黄褐色土も含む)
5. 黒灰色砂利層
6. 暗青灰色シルト (粘質、地山のカタラン)



1. 濁黒灰色粗砂



1. 黒灰色粘質土



第18図 大溝NR01・02、SD07、SD05土層断面図

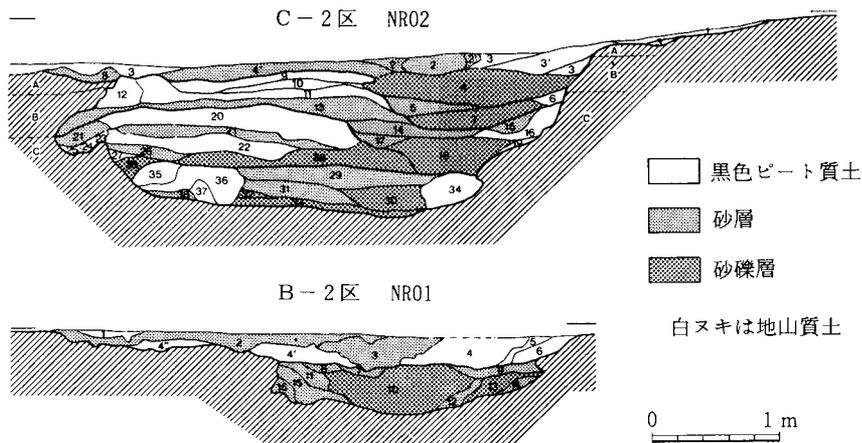
て取り上げた。土層観察地点手前の底面から、鍬が出土した。なお、合流点より左岸には2本の杭が打ちこまれ、上流部からは大形の礫が出土するなど、簡単な護岸が施された形跡がある。自然流路か人工的な溝かは判断しづらい。

一方、上層は下層が埋積後、徐々に南遷し流路幅を左岸側に広げている。ピート質の4層からは大形の土器片が出土した。1層はNR01廃絶後のへこみに堆積した周辺の遺物包含層に連なるものと考えられるが、B-3区ではこの層から比較的多くの土器・木製品が出土した。出土土器の中にはSD12やNR02と接合関係を有するものも少なくない。

NR02 C-2区で大きく蛇行しており、元来は自然流路であったものとみられる。幅は約3m前後で深さは約1.5mを測る。埋土(第18図、第19図)は、粒径の粗い砂礫層(砂利層)、砂層、細砂～シルト、地山質土の4大別できる。このうち、細砂～シルト層は有機質に富み、土器・木製品が多く出土し、ピート層として取り上げた。

土層観察地点の底面近くは、左右兩岸を溝幅とするように平均的に砂礫の堆積が認められ、兩岸の崩落とみられる地山質土が下場付近にある。その後、22層、20層の堆積あたりから流路が南遷し、北側には粒径の細かい砂層が顕著となる。この時点で溝幅は左岸よりに縮小し、浅い右岸側が、土器や木器の堆積しやすい環境になったものと思われる。梯子や柱材、壺82などの遺存の良い土器が出土した。左岸よりの溝には、主に砂礫層が堆積し、砂利層として遺物を取り上げたが、断面図に見るように実際は砂層と互層をなし、右岸側にはピート質のシルト層を堆積しながら順次浅くなっていった様子が窺える。この点で、遺物の取り上げは各層を区別しておらず、最終的には正確な層位を特定できない結果となってしまった。なお、土器の出土が多いのは、13層から18層にかけてのラインより上位においてであり、4・7層の砂利層、11・13のシルト～砂層中には特に多かった。

随所にみられた地山壁の崩落や21・23～25層付近の抉れ、砂利層に含まれる大型円礫は、当時の流れの速さを物語っており、頻繁に洪水のあったことを想像させる。NR01との合流点付近から下流よりの湾曲部左岸には、護岸用とみられる杭が数ヶ所あり、この部分は溝幅が広く最も水流



第19図 大溝(NR01、02)の土層堆積模式図

の影響を受けやすかったことを示している。NR01との関係では、NR01の3層とNR02の2層が、NR01の10層とNR02の4層が対応すると観察された。

出土遺物には、土器、木製品をはじめ、多くの自然遺物があった。各種の自然木（第4章参照）、サルノコシカケ5点、ヒョウタン1点、クルミ・トチの種子（写真図版25・26参照）、小型種子多数（同定未了）などがある。土器はSD12やNR01と同じく弥生時代後期後半のもので、層位ごとに時期差を認めうるほどの時間幅はない。

#### 4. 土坑他

SK01 C-4区。径80cmの略円形土坑で、深さ約45cmを測る。埋土はほぼ単一層で、中位付近から土器、木製品が出土した。時期は古墳時代前期である。同時期の遺構からはやや離れて位置している。

SK02 C-3区。2.5m×1.6mの不整楕円形土坑で、深さは最深部で15cm。SD07に平行してのびるような浅い溝状遺構の残欠か。時期不明。

SK05 D-6区。SB03の屋内貯蔵穴の可能性のある土坑である。径50cm、深さ約10cm。土器は弥生時代後期後半の器台形土器6が出土した。

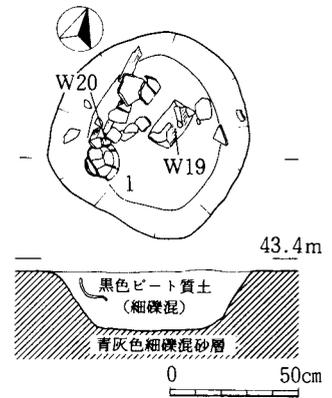
SK07他 C-6区からD-6区にかけて、長径1～3m、深さ10cm程の浅い楕円形土坑が群在する。SK04と07は小片ながら一定量の土器が出土し、両者で接合するものがある。時期は古墳時代前期。これらの土坑群は環状をなしており、平地式住居跡の外周溝の可能性をもっている。包含層中でもこの周辺が該期の土器が最も多く出土した地点であった。

SK08 C-5区。2.4m×1.0mの長楕円形土坑。深さは30cmで、埋土は黒褐色粘質土を主体とする。縄文時代晩期の土器細片30数点と極僅かの弥生土器片が出土したが時期は特定できない。底面から樹幹が突き出しているが、本遺構と直接関連するものではなかろう。西側に連結する土坑と切り合いがあるかは不明であった。この土坑はSD12よりも古い。

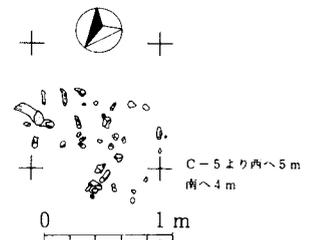
風倒木跡 B・C-6区境界付近に位置する。地山質土を中央に持ち、いわゆるドーナツ状に検出された遺構で、風倒木痕と考えた。出土遺物がなく時期は不明であるが、切り合い関係からはSD01より古い。

樹根 C-5区付近で、径約3～10cmの樹根が群集する地点が3ヶ所あった。SD09やSD12内では埋土中に樹根が林立しており、その成長はこれよりも新しい時期と判断される。樹種は前者がハンノキ節、後者がチドリノキであった。

ピット群 C-6区を中心に径約20cm、深さ約10cmの小ピットが多数認められた。列状に並ぶ部分もあるが柱間が不揃いで建物



第20図 SK-01実測図



第21図 SD-09 樹根

跡と認定するには至らなかった。遺構掘り込み面は検出面より上位にあったことから、本来はもう少し深いピットであったらしい。建物跡であったとすれば、付近から一括出土した須恵器大甕等の8世紀代か、総柱風のピット配置から中世期の可能性が考えられる。

**細溝群** C-4区西辺に幅10～15cm、深さ5cm程の平行する細溝群が検出された。畝状遺構の可能性はあるが時期は不明である。

### 第3節 遺物

今回の調査で出土した遺物はほぼ4時期にまとまりを持つ。第1は、縄文時代晩期、第2は、本遺跡の中心的な遺構群、SB01、SB03、SD12、SR01・02の弥生時代後期後半、第3は、SK01、SK04、SK07、SD08の古墳時代前期、第4は、須恵器大甕等が一括出土した奈良時代である。以下では各時期の土器等のより細かな編年的位置付けやその特徴について検討していきたい。

#### 1. 縄文時代晩期

土器片は包含層や弥生時代の遺構に混じって出土したものがほとんどで、総破片数は312点を数えた。遺構中でまとまっていたのは、B・C-3区SD07の20点、B-5区SK08の36点であった。これらを含めてその分布状況をみると、B・C-4・5区で209点と全体の $\frac{2}{3}$ を占めている。土器片の遺存状態や全体の土器量を考えても、この地に集落跡があったとは考えにくく、前記区周辺に若干の遺構があった程度と推定される。

図示した土器はないが、ほとんどが外面に条痕を有するもので、若干ある有文のものも含めて晩期後半～終末に位置付けられる（久田正弘氏御教示）。

明確な石器は出土していないが、輝石安山岩の剥片2点が出土している。

#### 2. 弥生時代後期

当該期の土器は、量的には最も多く、遺構においても本遺跡の主体となる時期である。ここでは後期の中でも編年的にどのあたりに位置づけうるのかについて若干考えてみたい。本来は遺構毎に時期を問題にすべきであるが、そこまで当該期の編年的検討が進んでいないことから、個々の土器ないしは遺跡全体の時間幅を考えるにとどめたい。

まず器台形土器を取り上げる。本遺跡では、6（SK05＝SB03）、22（SD12）、66（大溝）、129～131（包含層）などがある。

6は口径22.0cm、脚部は筒状の柱状部から緩やかに開く形態と見られ、類品は七尾市奥原遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1982）99など断片的には見られるが、器形を窺い知れる良品に恵まれない。本遺跡22や中相川遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1992）66のような器形になると見られる。130は口縁端部から垂下した面に円形浮文を持つもので、器形的には、地域がやや離れるが、福井県鯖江市西山1号墓（鯖江市教委1987）の一群に類例が求められよう。

本遺跡のこれら3点は、能登では、いずれもまだ類品に乏しく型式認定作業が進んでいないが、

細部を除き、全体の法量および受け部と脚部の器形のみで考えると、当該器形は、後期でも前半代に位置づけられる羽咋市柴垣須田遺跡（羽咋市教委1986）住居跡の土器群には認められず、終末期の押水町冬野遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1991）や同竹生野遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1988）の大型土坑群でも確認できないことから、ほぼ後期後半代と考えて大過なからう。能登では後期後半の器台形土器の中心器形とは言えないが、類例は近江から越前・加賀はもとより、上市町江上A遺跡など越中まで広範囲に及んでいる。

包含層出土ながら131は、山陰に系譜をもつ中型器台とみられ、口縁・脚端が肉厚で伸びないものは後期後半でも古相を示す土器群に共伴する。類品は、押水町冬野遺跡2号住居跡44や金沢市桜田・示野中遺跡（金沢市教委1991）292・293などに認められる。

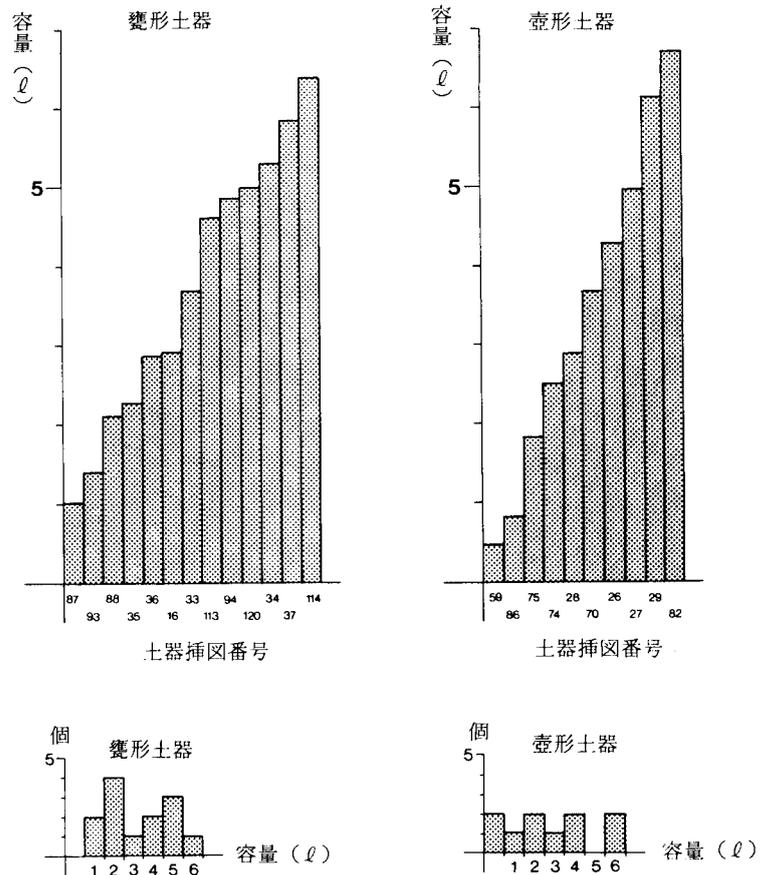
能登中南部では、後期後半代の中で器台形土器の主体が、中型山陰系と近江（畿内）系から、前者から派生成立したとみられる在来化した大型の上下有段系に移るようである。

高杯形土器は、壺形土器や甕形土器に比べて非常に少なく、器形を窺い知れるものはほとんどない。62（大溝）は短い口縁部を持つもので、後期後半でも古相を示す。押水町宿向山遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1987）1号住に類品がある。

鉢形土器21（SD12）は、大型有段鉢形の口縁部が長い形態の仲間に属するが、深身で口縁部が外反して伸びない特徴をもつ。器壁は薄い。

小型壺形土器59（大溝）は例の少ない形であるが、福井県鯖江市西山1・3号墓や押水町上田出西山遺跡（押水町教委1980）に類品がある。

壺形土器は長胴直口壺を主体とし、法量の大きな球胴広口壺がある。26（SD12）・82（大溝）は肉厚であるが、長胴直口壺は比較的器肉が薄く、SD12のものはヘラケズリを多用する。72は肩部に絵画をもつ。翼を広げた鳥のようにも見えるが定かでない。28は頸部・胴部に記号文をもつ。46は肩部に円形刺突列点、77は頸基部に全周しない半月形の刺突列点を施す。この他瘤付土器（71・79）が2点ある。加賀市敷地町後方遺跡（加



第22図 甕・壺形土器の容量

賀市教委1982)に類例がある。環状把手のなごりか。装飾を施すこれらは器形からみて同一器種と考えられる。この器種の型式の把握作業は遅れており、個々を取り上げても時期を限定しうるには至らない。

大型壺形土器は25の1個体のみでSD12や大溝などで散在的に出土した。口縁部に2個一対の円形ないしはS字状の貼付け浮文を持ち、頸部ないしは肩部に装飾突帯をもつ大型壺は、この時期比較的例が多い。松任市倉部出戸遺跡(松任市教委1992)で見られるように、集落縁辺の大溝(河川)際から出土する例が多く、また、当該期の墳墓で良好な祭祀土器群のセットが原位置を保って出土した高松町中沼C遺跡(高松町教委1987)でのあり方とともに、この器種の使われ方、廃棄のされ方に注目しておきたい。

甕形土器も多様な形態を持つが、容量は第22図のごとく中型、小型に緩やかに分化している。94・113・120のような長胴で頸部の締りの強い器形、35・38など受け口状の口縁を持ち刻みを施す手法は後期後半でも古相的要素とみられる。

以上主な器種の特徴を概観した。後期後半でも古相に位置づけられる要素が多かったが、個々の型式認定、その編年の対比はいずれも今後の課題である。

能登地域では、押水町宿・竹生野遺跡群で後期後半の古相が宿向山遺跡の遺構群、新相が宿東山遺跡の遺構群と捉えられる。これと対比すれば高杯・器台形土器のあり方など、本遺跡の主体は前者に近いと言えよう。

弥生時代の木製品は、すべて大溝NR01・02から出土したものである。なお樹種は鈴木三男氏・能城修一氏の同定による(第4章第2節)。樹種同定したサンプルは、出土品を加工度によって5ランク(製品、板・棒等、丸太・杭、割・切断痕のある材、自然木)に分け、前2者を優先し、後3者は類似形態の材を避けて抽出した。

農具には狭楾1・2がある。1はいわゆるナスビ形で、柄との結合部は断面蒲鉾形を呈する。樹種はコナラ節。北陸では今のところ例の少ない形態であるが、類品は富山県上市町江上A遺跡(上市町教委1984)にある。2は楾先のみで、樹種はクスギ節であった。5は丁寧に削り込まれた断面円形の棒で、本来は農具の柄であったとみられる。樹種はケヤキであった。

容器類には、8の槽、9の桶がある。3も容器類の取っ手かも知れない。樹種はいずれもスギである。

建築材類には、柱、梯子、杭がある。17は竪穴建物跡SB03の支柱で、カエデ属の心材であった。10は径約15cmの心材で、方形の抜き穴と表裏に幅の違う縦溝が入り、抜き穴の上には縦溝に直交する横溝がある。この他抜き穴の上部から側面へ貫通する小穴があるが、これは加工されたものか分からない。この材は上下が切断されているが、本来は高床建物の支柱(桁持ち柱の中間柱)と考えられる。抜き穴は大引きを通すためのもので、横溝は根太ないしは床板の固定用、縦溝は壁板の差し込み用と想定できる。ただし縦溝の幅が違う理由は分からない。樹種はヤナギ属であった。高床建物の柱材とすれば、その構造を知る上で貴重な出土例となろう。本遺跡SB01のような建物に使用されたと考えられる。18は建築材の一部とみられ、樹種はケヤキであった。16は

梯子である。幅約30cmを測る大型品で、削り出された段部の両側には幅約1.5cmの平坦面が作り出される。樹種はヤマザクラ。

11～14は用途不明の細板、細角棒で、樹種はいずれもスギであった。13・14は長さの揃った同工の製品である。

SD19、SD12付近で検出された樹根は弥生時代後期以降のものであるが、それぞれハンノキ節、チドリノキであった。

この他の弥生時代の木製品については図化していないが、割材など加工痕のあるもの、自然木等、樹種同定を行っているので第4章を参照してほしい。

弥生時代の自然遺物として大溝等から、ヒョウタン、クルミ・トチノキ種子、サルノコシカケ等が出土した（写真図版25～26参照）。

クルミは、大溝以外のものも含め出土品85点すべての計測値を第1表にまとめた（川端敦子作成）。内訳は完形26点、食痕あり20点（1箇所4点、2箇所16点）、半分36点、破片3点であった。多くは周辺に自生したものが自然流入したと見られるが、食痕のあるものが多く、形態のかなり異なるもの（36・46等）が含まれている点は注意される。大溝からはオニグルミの部材2点が出土しており、花粉分析においてもクルミが検出されている。トチノキの種子は核皮も出土している。

サルノコシカケは大溝（B-2区NR02粗砂層、同砂利層各1、C-2区NR02粗砂層2、同砂利層1）から土器等に混じって5点が出土した。採取されたというよりは自然にあったものが流れ込んだのであろうか。サルノコシカケは樹木に寄生してそれを腐朽させる害菌であるが、そのような広葉樹の老木が大溝周辺に多く存在したのであろう。周辺植生の参考となろう。青島清雄氏によりすべて「ヒダナシタケ目マンネンタケ科コフキサルノコシカケ」と同定された。

ヒョウタンはB-2区NR02砂利層から出土した。

この他、大溝、SD12、SD09等から土壌の水洗選別によって多くの小型種子類を検出しているが同定は未了である。樹種同定、花粉分析とともに総合的な環境復元を行う上で不可欠なその同定ができなかったのが悔やまれる。

### 3. 古墳時代前期

該期の遺物で遺構からある程度のまとまりを持って出土しているのは、SK01とSD08のものである。

まず、SD08出土の甕形土器に注目したい。12は口縁端部につまみ出すような水平な面取りが施される。体部外面はタタキ後ハケメで上半はケズリが入る。内面はハケメ後ケズリ。このような成形・調整技法の甕形土器は、能登では良好な出土例に恵まれないが、北加賀では松任市倉部遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1990）SK17・22など比較的多く、近江等に系譜を持つものと考えられている。15は端部に外傾する小さな面をもつくの字口縁甕である。体部は内外ともハケメ調整で、内面は下位に成形一時休止線を明瞭に残す。外面はそのさらに下位に粘土紐を貼り付け

第1表 クルミ(核)計測表 (単位はcm、g)

※形状 A…完形、A'…食痕1箇所、A''…食痕2箇所  
 B…半分、C…破片  
 ( )は残存値

No	長さ	幅	厚さ	重量	長/幅	形	出土地点
1	2.98	2.69	2.59	4.77	1.11	A	B-2,SD01
2	2.73	2.76	(1.27)	(1.88)	0.99	B	B-2,SD01
3	3.20	(2.39)	2.40	(3.79)	-	A'	B-3,SD01
4	2.95	2.78	(1.30)	(2.31)	1.06	B	B-3,SD01
5	3.09	2.85	2.59	5.00	1.08	A	B-4,SD01
6	3.03	2.86	2.85	5.50	1.06	A	B-4,SD01
7	3.12	2.70	2.69	5.48	1.56	A	B-4,SD01
8	2.60	2.22	1.98	2.45	1.17	A	B-4,SD01
9	2.88	(1.66)	2.18	(1.40)	-	A'	B-4,SD01
10	2.89	(0.88)	(1.00)	(0.61)	-	B	B-4,SD01
11	3.55	3.03	2.72	5.75	1.17	A	B-5,SD01
12	3.02	3.05	2.86	5.84	0.99	A	B-5,SD01
13	3.15	(2.00)	2.60	(3.49)	-	A''	B-5,SD01
14	2.69	2.38	(1.03)	(1.08)	1.13	B	B-5,SD01
15	2.66	(2.23)	(1.20)	(1.17)	-	B	B-5,SD01
16	(1.84)	(1.70)	(0.61)	(0.53)	-	C	B-5,SD01
17	3.19	2.75	2.40	5.10	1.16	A	B-6,SD01
18	3.28	2.55	1.34	1.79	1.29	B	B-6,SD01
19	2.72	2.40	(1.36)	(1.23)	1.13	B	B-6,SD01
20	2.50	2.65	(1.30)	(1.84)	0.94	B	B-6,SD01
21	2.87	2.58	(1.27)	(2.01)	1.11	B	B-2,NR
22	2.45	2.31	(1.14)	(1.41)	1.06	B	B-2,NR
23	2.89	2.57	2.47	5.10	1.12	A	B-2,NR
24	2.59	2.43	2.45	(2.16)	1.06	A''	B-2,NR
25	2.81	2.87	(1.30)	(1.58)	0.98	B	B-2,NR
26	2.95	1.91	(0.87)	(0.77)	1.54	B	B-2,NR
27	2.50	2.04	2.14	2.43	1.23	A''	B-2,NR
28	2.48	(1.83)	2.02	(1.87)	-	A''	B-3,NR
29	2.35	2.44	1.21	(1.25)	0.96	B	B-3,NR
30	2.44	2.15	(1.02)	(0.96)	1.13	B	B-3,NR
31	3.40	2.61	2.44	4.40	1.30	A'	C-2,NR
32	2.50	(2.16)	2.42	(3.25)	-	A''	C-2,NR
33	2.97	2.53	(1.24)	(1.98)	1.17	B	C-2,NR
34	2.45	2.62	(1.06)	(0.91)	0.94	B	C-2,NR
35	3.08	2.78	2.58	6.19	1.11	A	C-2,NR
36	3.84	3.01	2.93	6.67	1.26	A	C-2,NR
37	2.34	(2.29)	1.98	(1.74)	-	A''	C-2,NR
38	2.60	2.09	2.24	(2.19)	1.24	A'	C-2,NR
39	3.03	2.03	(1.95)	(0.99)	1.49	A''	C-2,NR
40	2.61	2.27	2.20	3.13	1.15	A	C-2,NR
41	2.40	2.30	(1.10)	(1.01)	1.04	B	C-2,NR
42	2.31	2.18	(1.02)	(1.46)	1.06	B	C-2,NR
43	2.26	(2.14)	2.17	(0.91)	-	A'	C-2,NR

No	長さ	幅	厚さ	重量	長/幅	形	出土地点
44	2.41	2.90	(1.29)	(1.46)	0.83	B	C-2,NR
45	3.52	2.47	2.50	(4.46)	1.43	A'	C-2,NR
46	3.98	2.97	2.89	5.88	1.34	A	C-2,NR
47	2.76	2.50	(1.25)	(0.82)	1.10	B	B-3,SD07
48	(1.96)	2.40	(1.43)	(1.00)	-	C	B-3,SD07
49	2.23	2.59	(1.22)	(1.55)	0.86	B	B-2,包
50	2.28	2.08	2.05	2.63	1.10	A	B-4,包
51	2.79	2.82	(1.28)	(2.23)	0.99	B	B-4,包
52	2.82	2.62	(1.29)	(1.89)	1.08	B	B-4,包
53	2.41	2.46	(1.05)	(1.19)	0.98	B	B-4,包
54	2.62	2.33	2.29	(3.22)	1.12	A''	B-5,包
55	2.80	2.83	(1.35)	(2.01)	0.99	B	B-5,包
56	2.38	2.19	(0.94)	(0.90)	1.09	B	B-5,包
57	2.60	2.47	2.30	(1.77)	1.05	A''	B-5,包
58	3.08	3.12	2.78	7.84	0.99	A	C-1-2,包
59	2.74	2.69	(1.19)	(1.58)	1.02	B	C-1-2,包
60	2.52	2.12	1.81	2.52	1.19	A	C-3,包
61	3.38	2.74	2.59	5.05	1.23	A	C-3,包
62	2.70	2.54	2.61	3.59	1.06	A''	C-3,包
63	3.16	2.25	2.38	2.68	1.40	A''	C-3,包
64	3.34	2.78	(1.26)	(1.93)	1.20	B	C-3,包
65	2.81	2.48	(1.20)	(1.52)	1.13	B	C-3,包
66	2.50	2.40	(1.29)	(1.13)	1.06	B	C-3,包
67	2.70	2.36	2.19	2.78	1.14	A	C-4,包
68	2.69	2.13	1.94	2.77	1.26	A	C-4,包
69	2.58	(2.20)	1.93	(2.32)	-	A''	C-4,包
70	2.56	2.17	1.87	(1.21)	1.18	A	C-6,包
71	2.23	2.06	1.76	(1.21)	1.08	A	C-6,包
72	2.65	2.84	(1.32)	(2.23)	0.93	B	D-2,包
73	2.52	2.50	2.23	4.05	1.01	A	D-6,包
74	2.50	2.20	1.80	2.99	1.14	A	C-2,P34
75	2.09	2.13	1.94	2.22	0.98	A	B-5,SD01
76	2.39	2.76	(1.29)	(1.33)	0.87	B	B-5,SD01
77	2.58	(2.04)	2.23	(1.76)	-	A''	B-5,SD01
78	2.79	2.24	1.99	2.48	1.25	A	B-4,SD01
79	2.54	(1.78)	(0.71)	(0.48)	-	C	B-5,SD01
80	2.24	2.46	(1.05)	(0.99)	0.91	B	B-3,包
81	2.71	2.15	(0.98)	(0.86)	1.26	B	B-3,包
82	2.49	2.22	2.51	(2.80)	1.12	A''	B-4,包
83	2.38	2.26	2.15	3.06	1.05	A	C-2,包
84	3.07	2.59	(1.30)	(1.39)	1.19	B	C-2,包
85	2.77	2.26	(1.04)	(0.96)	1.23	B	C-5,包

て補強し、周辺をケズっている。13・14は同形の甕形土器の底部とみられる。いずれも平底を残すが、14は外のケズリ、内のハケメとも丸底化を意識したものと考えられる。これらは、能登地溝帯中部の古墳時代前期初頭の代表的な土器群である、徳前C遺跡第2群土器（石川県立埋蔵文化財センター1986）の甕形土器の主要型式F<sub>2</sub>類の技法を引き継ぐものとみられるが、球胴化したものであることからより後出的であろう。水白モンショ遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1989）に類品はあるが、年代的位置付けは困難である。11の内湾口縁の精製壺型土器は、宿東山遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1987）O類、徳前C遺跡O類に分類されたものであろう。

12の編年的位置付けは能登では今のところ難しいが、その他は金沢市高島遺跡（金沢市教育委員会1975）の主要な土器群にほぼ併行するものと考えておきたい。

SK01出土品は、1・2・9がある。1の鉢形土器は底部に小さな平底を持ち、体部内外面ともミガキを施す精製品である。須恵器出現期にみられる平底碗形の鉢か徳前C遺跡（前掲書）112の台付鉢の鉢部のようなものかは判別しづらい。2の甕形土器は口縁端部を丸くおさめるが、体部の調整等はSD08の15に準じる。ここでは、徳前C遺跡第2群土器以降で、SD08土器群と併行する時期までの幅の中で捉えておきたい。

この他、包含層出土品133～139においても概ね同時期の範ちゅうで考えられよう。

土器以外の遺物ではSK01から木製品が若干出土している。19は切断痕のある柱状の心材で、樹種はコナラ節であった。20はえぐりのある板材で、樹種はスギであった。土器ともに穴へ廃棄されたような状態で出土した。

#### 4. 奈良時代の土器

該期の土器は、C-6杭付近から一括出土した149～151の須恵器貯蔵具類を除けば、いずれも包含層からの断片的出土であり、須恵器50数点、土師器若干があるにすぎない。時期は8世紀前半を主体とし、後半～9世紀前半に下るものも存在する。

149～151は包含層中から細片となって出土した。細かな出土状態は不明であるが、長頸瓶、小甕、大甕といった貯蔵具類のみが集中してあったことはやや特殊な状況といわざるをえない。いずれも欠損部を持つため、この地点に正置遺棄されたとはしがたいが、149の底部中央および、150の底部側面が打ち欠かれた可能性があることなどから、その廃棄には特別の意味があったのかもしれない。丸底の小甕・大甕とも底部周辺には磨耗痕があり一定の使用を経たものである。

150は内外とも体部上半までタタキ成形した後、上半を内外ともカキメ調整、下半を叩き出して丸底成形した後、外面下半をカキメ調整している。口頸部は短かく外傾して開き、端部は口頸部の長くない通有の中・大甕のその手法に近い。容量は約7.5ℓ。この器種は8世紀を通して普遍的に認められるが、胴部の張りが強く球形胴に近いものは前半代を主体とするようである。後半代には長胴、底すぼまりぎみの形態のものが主となる。

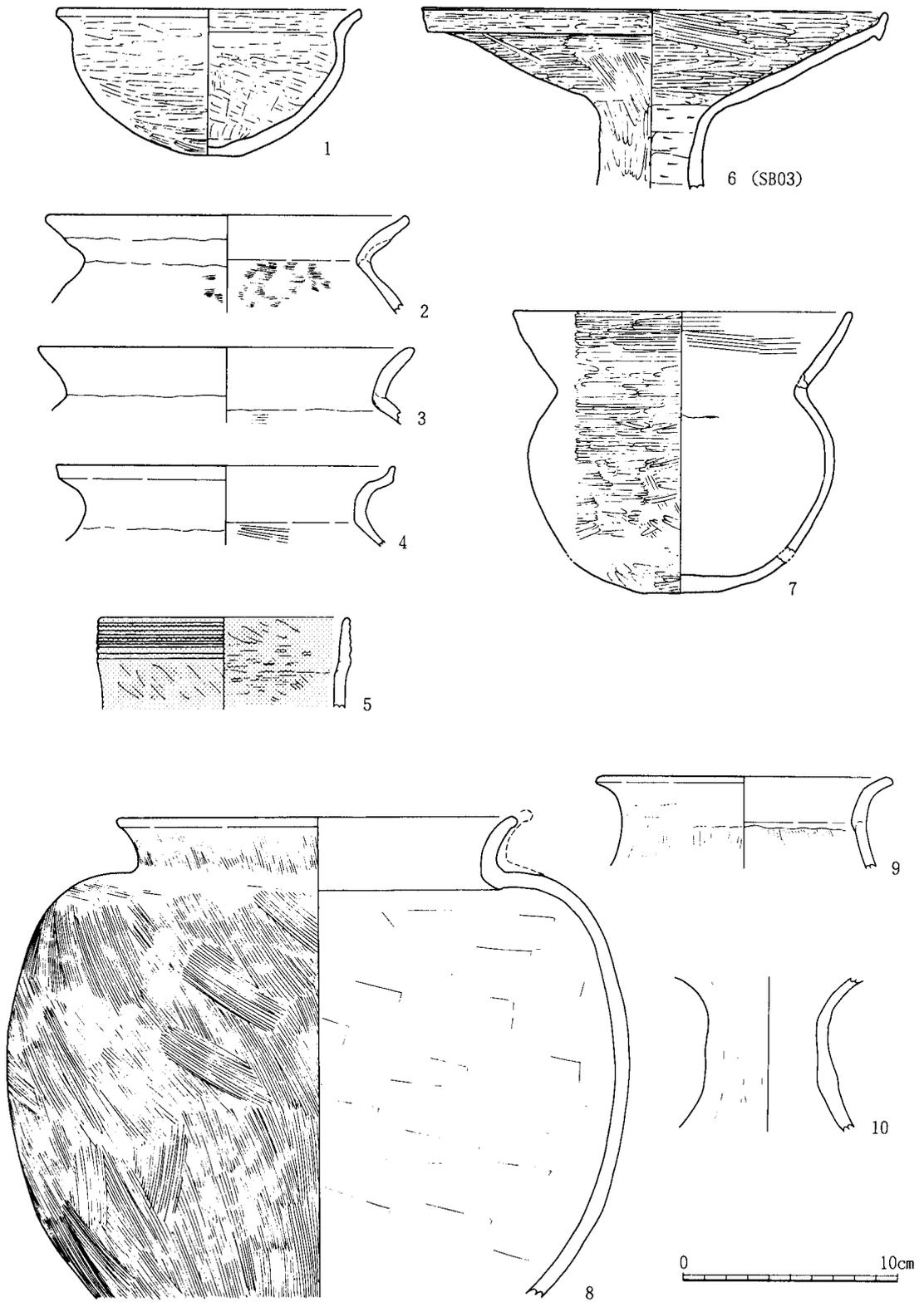
151は約120ℓ入りの大型甕である。口頸部に波状文はないが、頸がよくしまり、直立ぎみの長い口頸部をもち、7世紀代の器形の面影を残す。8世紀前半でも古い段階のものであろう。

149の長頸瓶も時期的には矛盾はなく、140の杯蓋とともに8世紀前半でも古い時期の土器群と

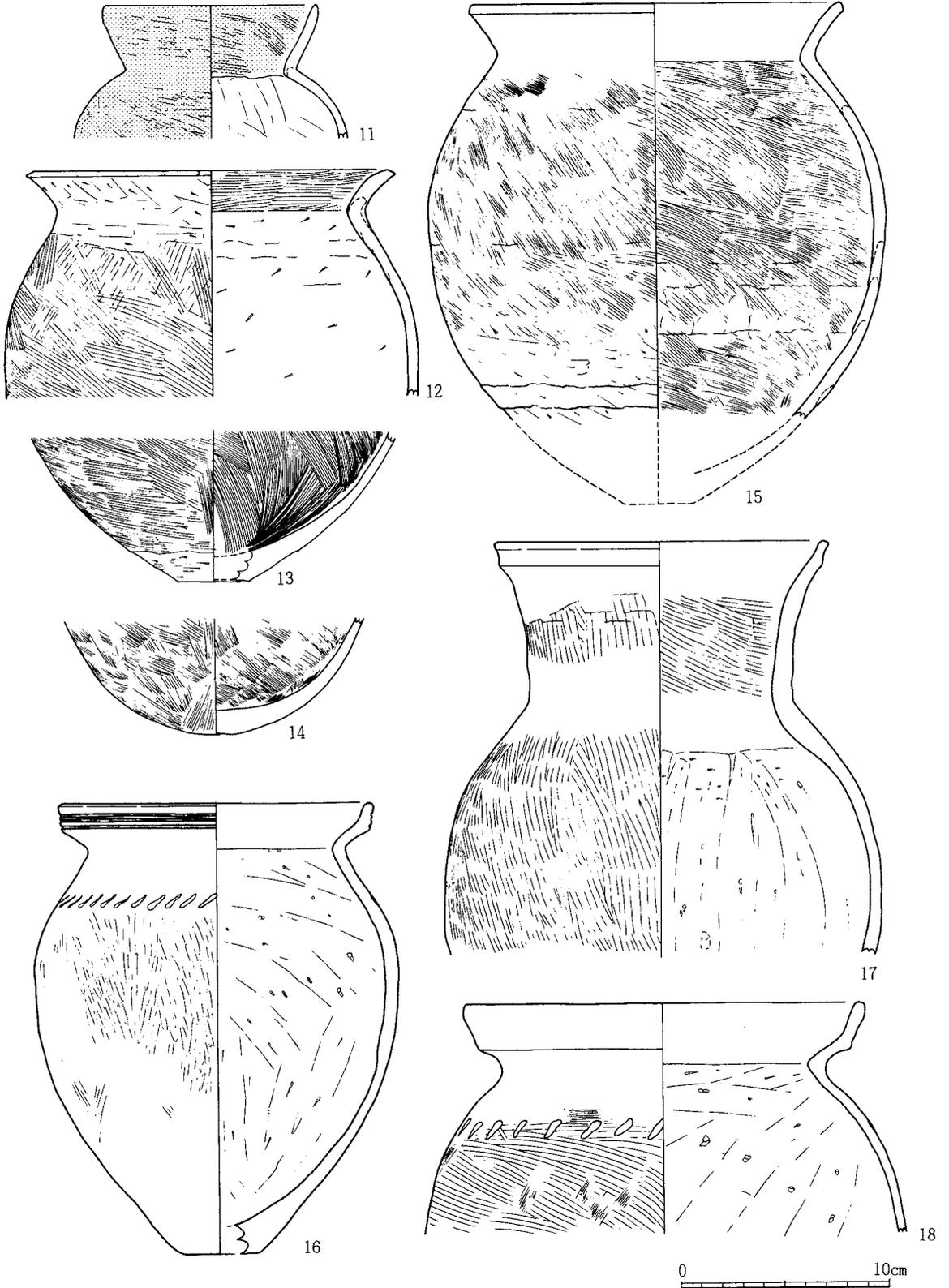
考えられる。須恵器の供給地は、いずれも白色長石の顕著な胎土で鳥屋窯跡群産とみられる。

〈参考文献〉

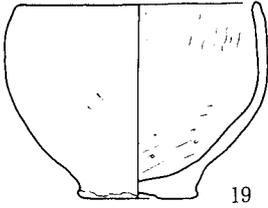
- 石川県立埋蔵文化財センター1982『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』  
石川県立埋蔵文化財センター1987『宿向山遺跡』  
石川県立埋蔵文化財センター1987『宿東山遺跡』  
石川県立埋蔵文化財センター1988『竹生野遺跡』  
石川県立埋蔵文化財センター1990『倉部遺跡』  
石川県立埋蔵文化財センター1991『押水町冬野遺跡群』  
石川県立埋蔵文化財センター1992『相川遺跡群』  
押水町教育委員会1980『上田出西山遺跡発掘調査報告書』  
加賀市教育委員会1982『敷地町後方遺跡発掘調査報告』  
金沢市教育委員会1975『金沢市高島遺跡』  
金沢市教育委員会1991『桜田・示野中遺跡』  
上市町教育委員会1984『北陸自動車道遺跡調査報告』上市町木製品・総括編  
鯖江市教育委員会1987『西山古墳群』  
高松町教育委員会1987『高松町中沼C遺跡』  
羽咋市教育委員会1986『柴垣須田遺跡』  
松任市教育委員会1992『松任市倉部出戸遺跡』



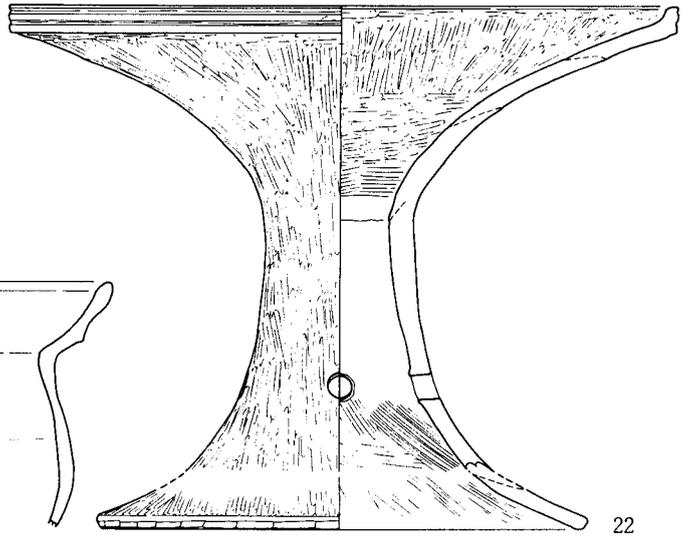
第23図 出土遺物実測図 土坑・溝



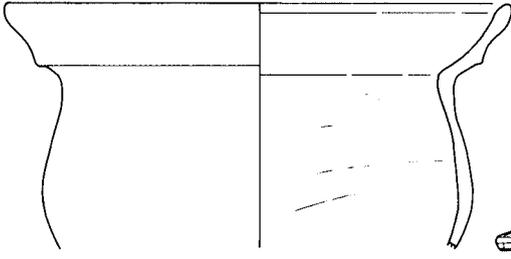
第24図 出土遺物実測図 SD08、SD12他



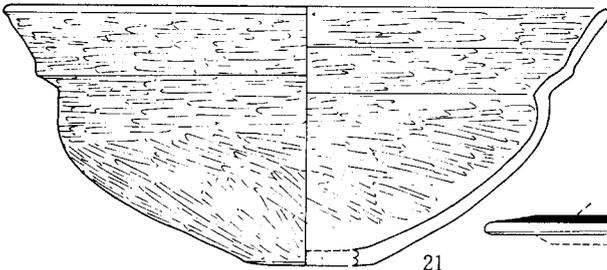
19



22



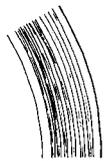
20



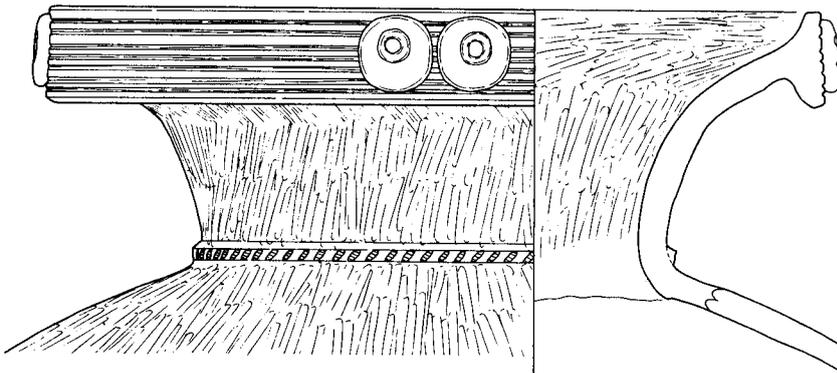
21



23



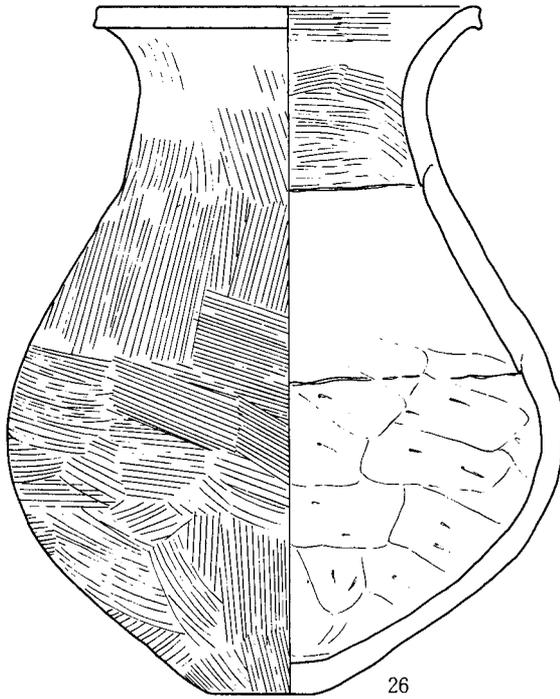
24



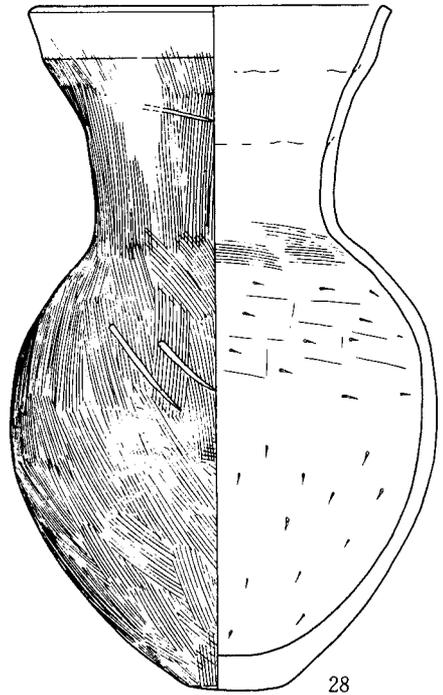
25



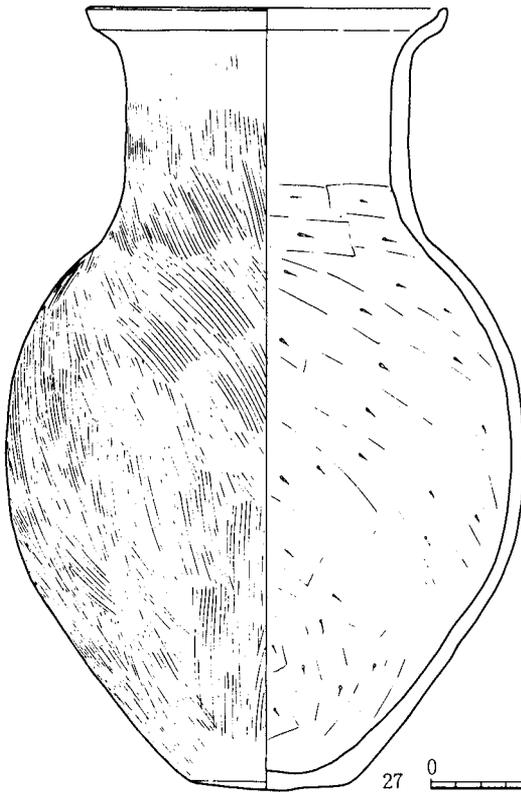
第25図 出土遺物実測図 SD12他



26



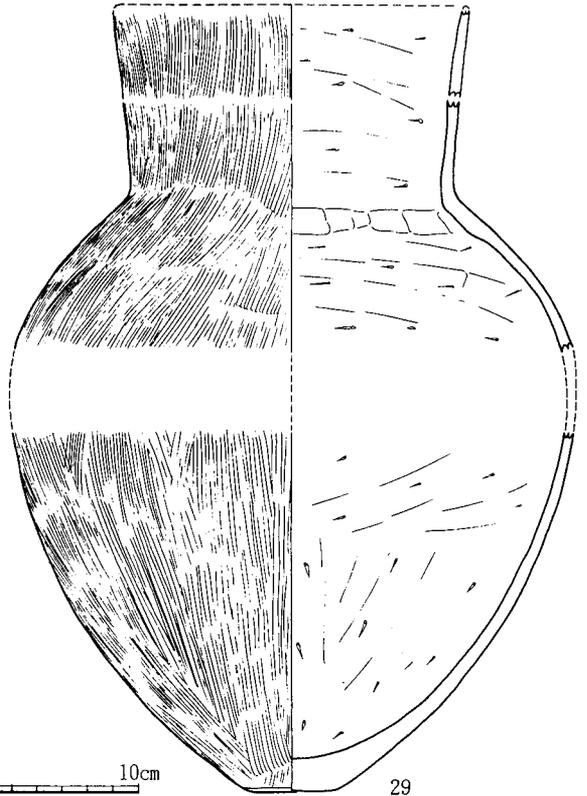
28



27

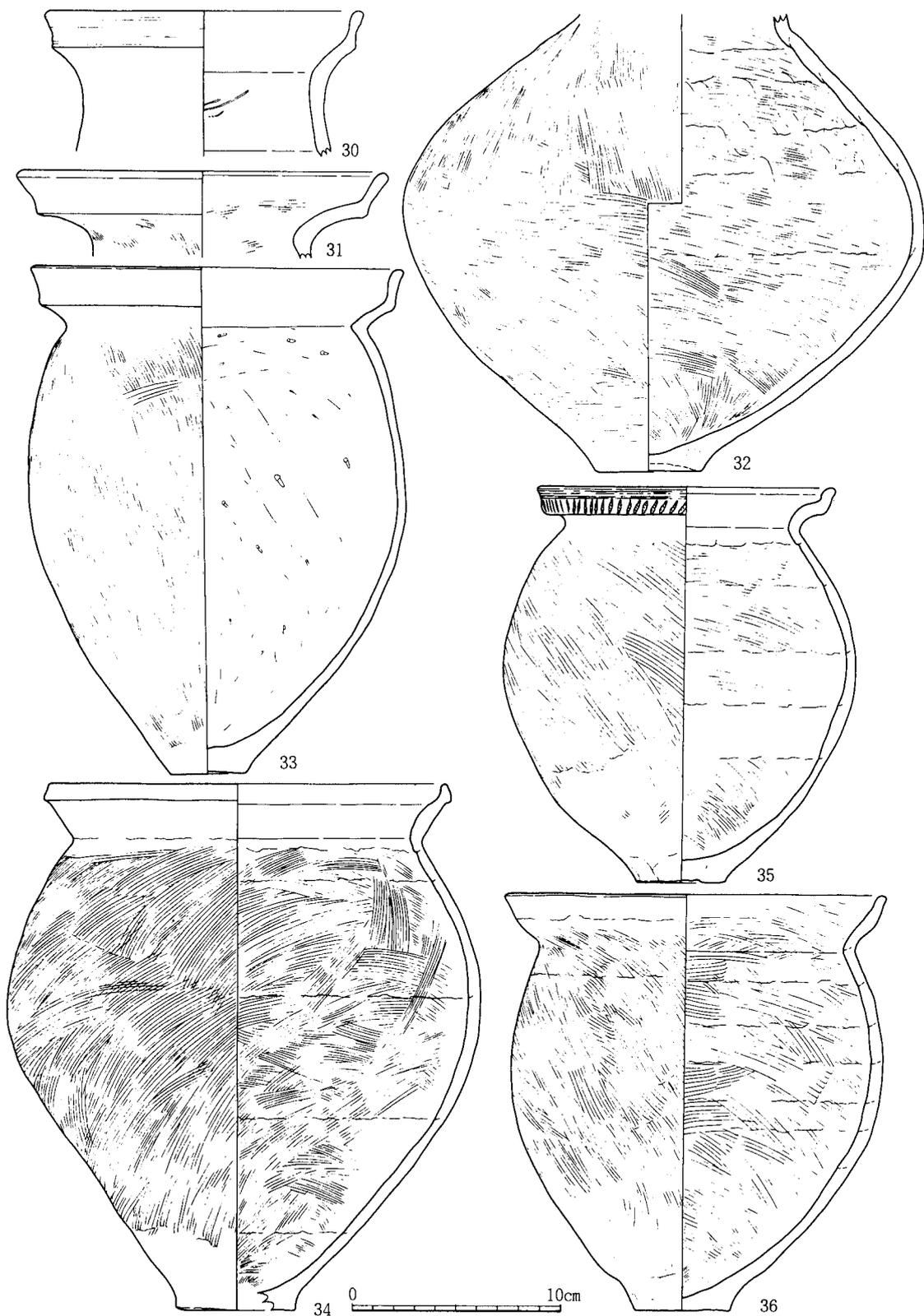


10cm

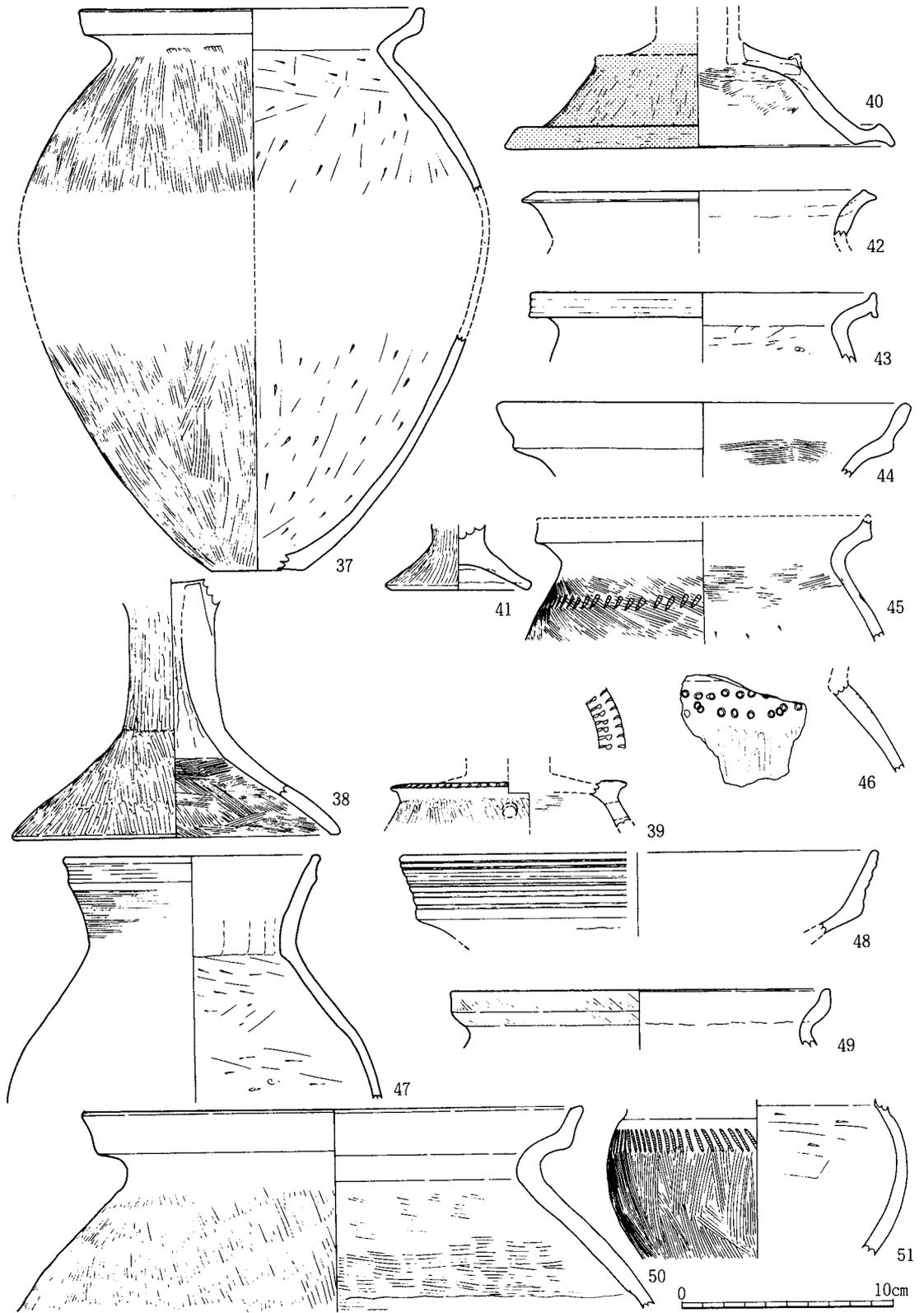


29

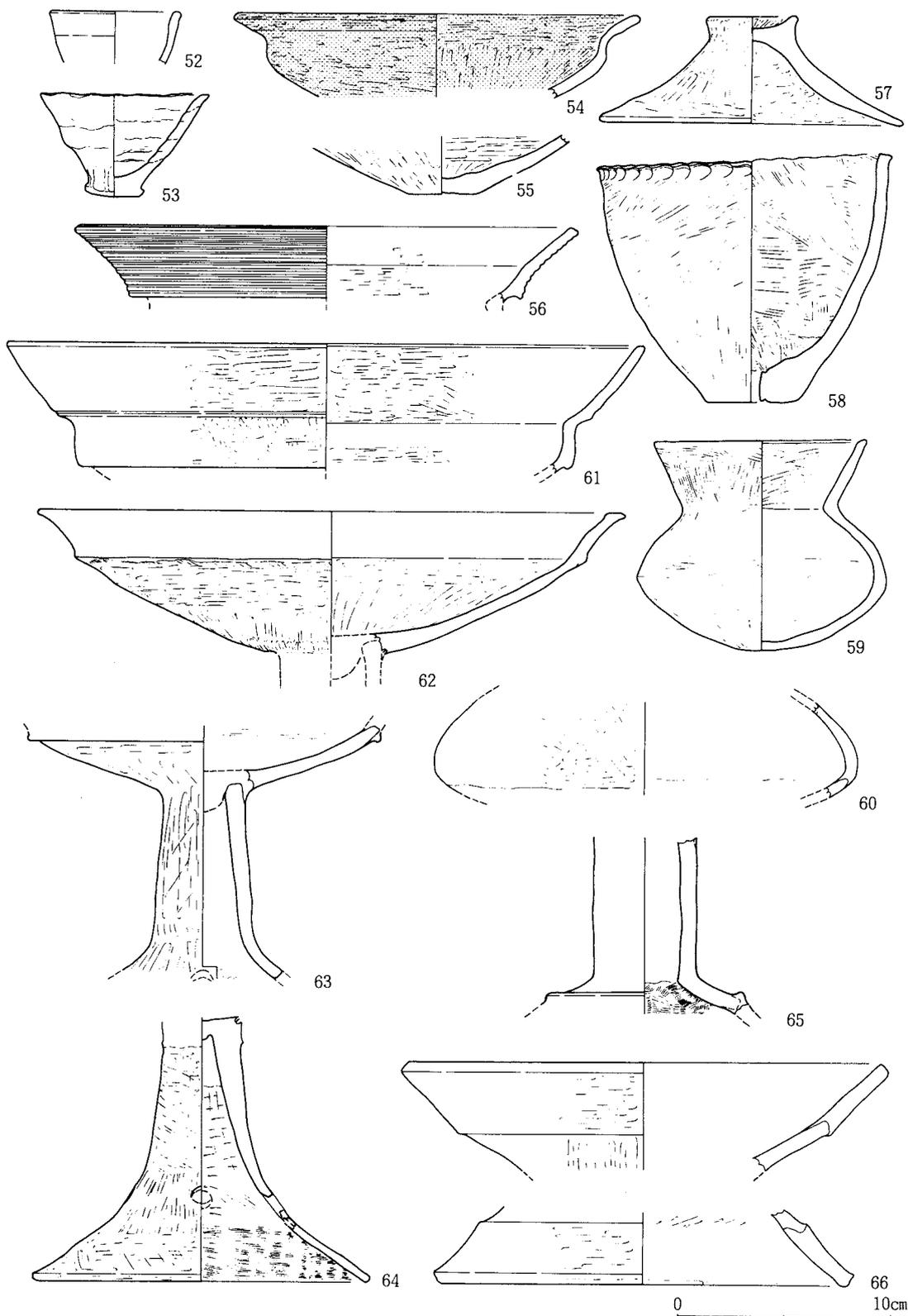
第26図 出土遺物実測図 SD12他



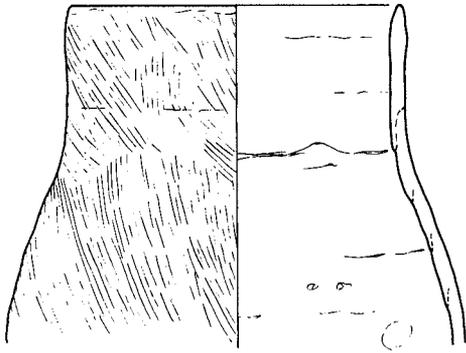
第27図 出土遺物実測図 SD12他



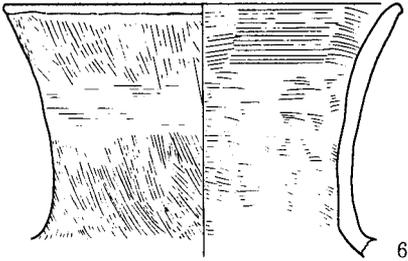
第28図 出土遺物実測図 SD12他



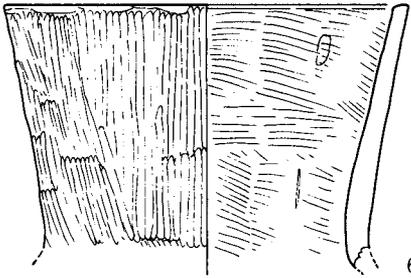
第29図 出土遺物実測図 SD12他



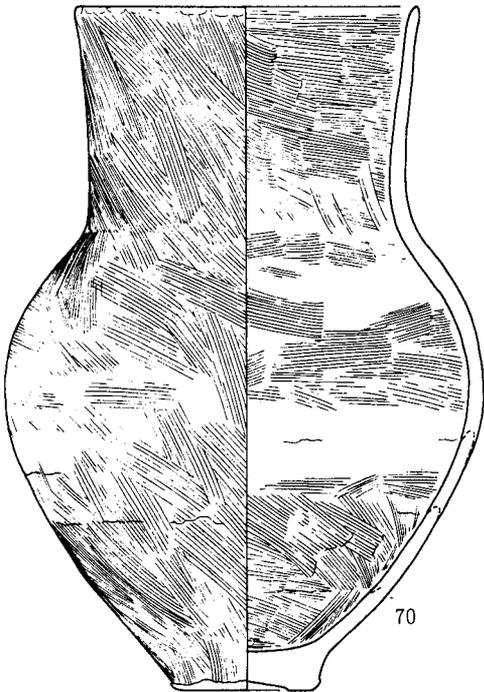
67



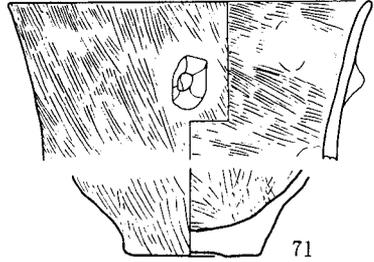
68



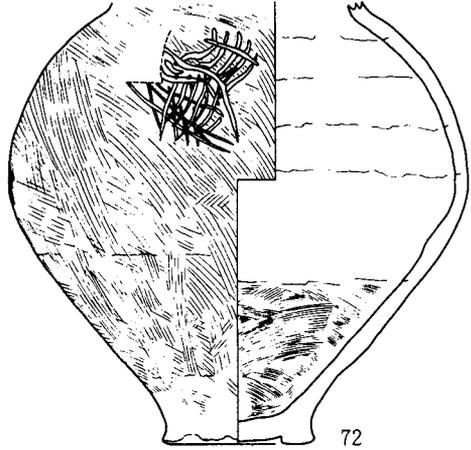
69



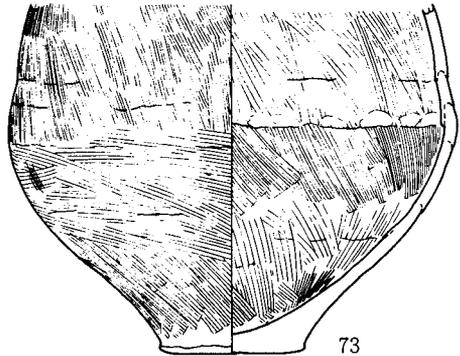
70



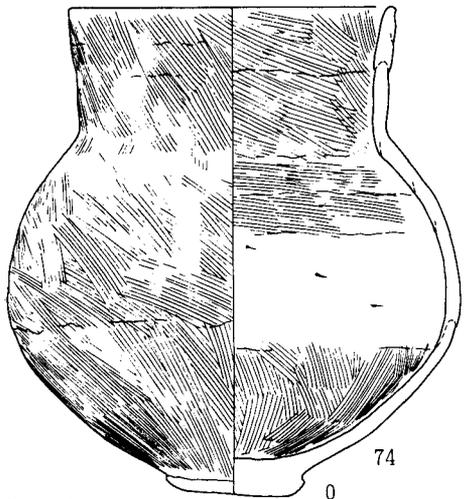
71



72



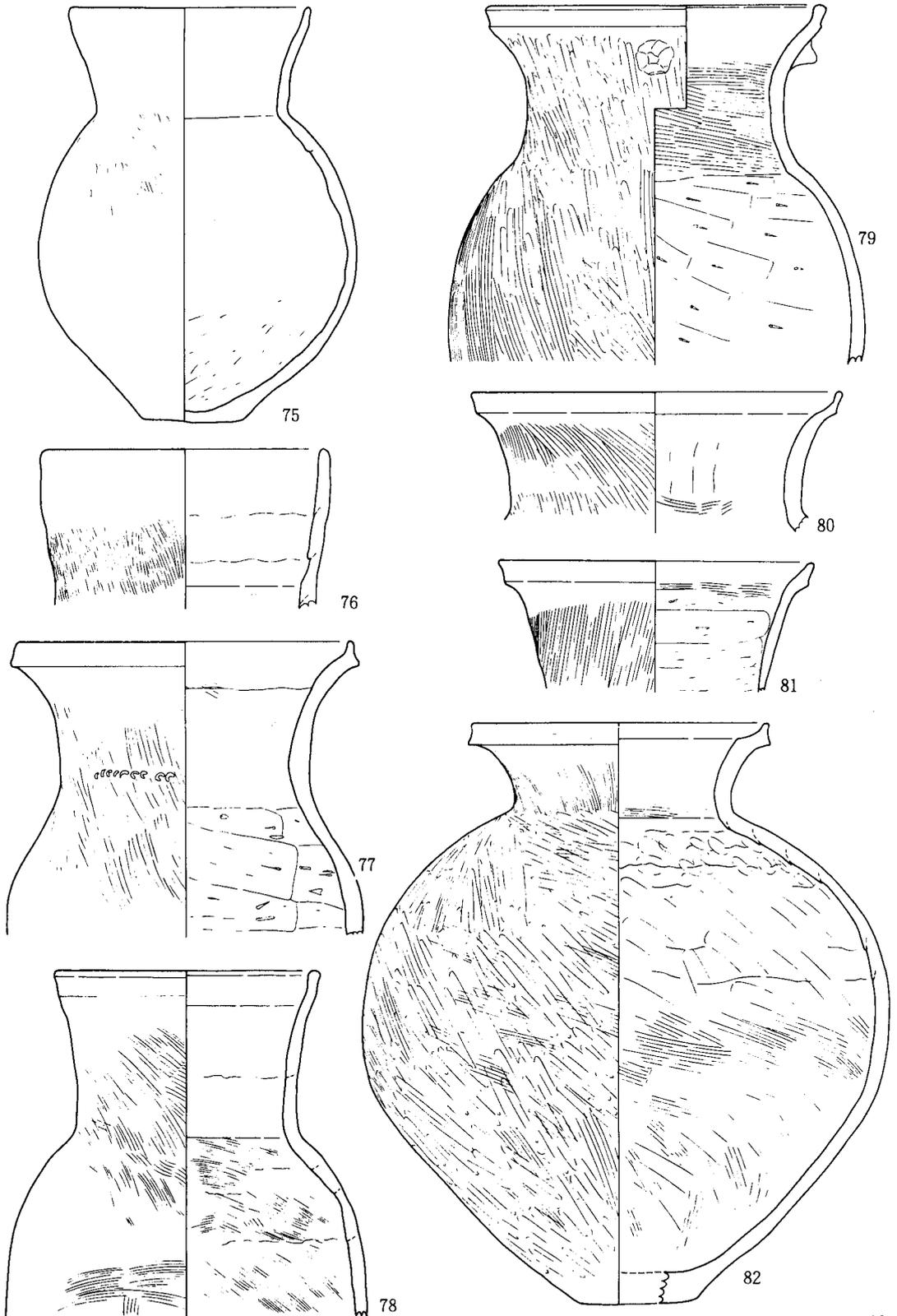
73



74

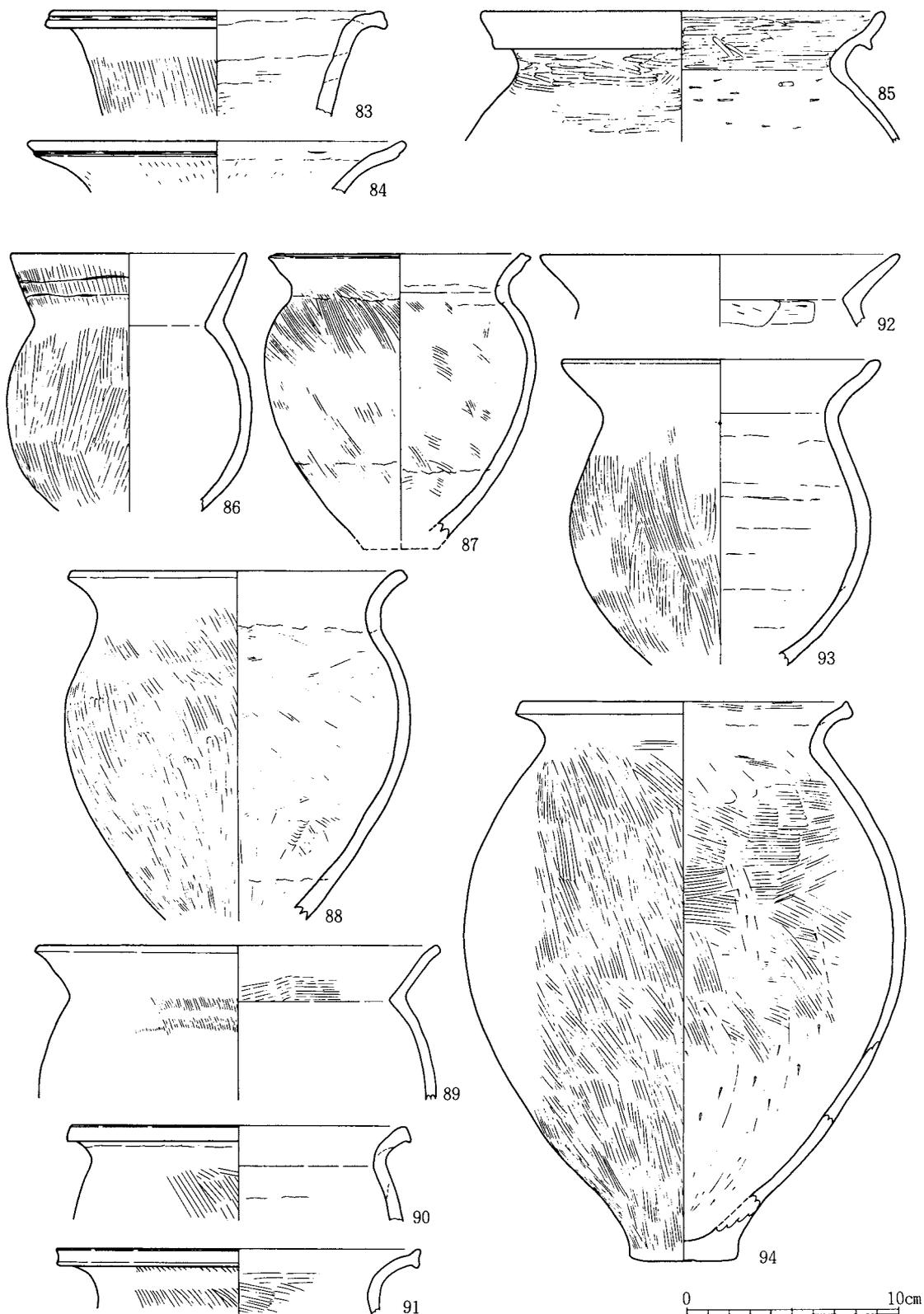
第30図 出土遺物実測図 大溝

0 10cm

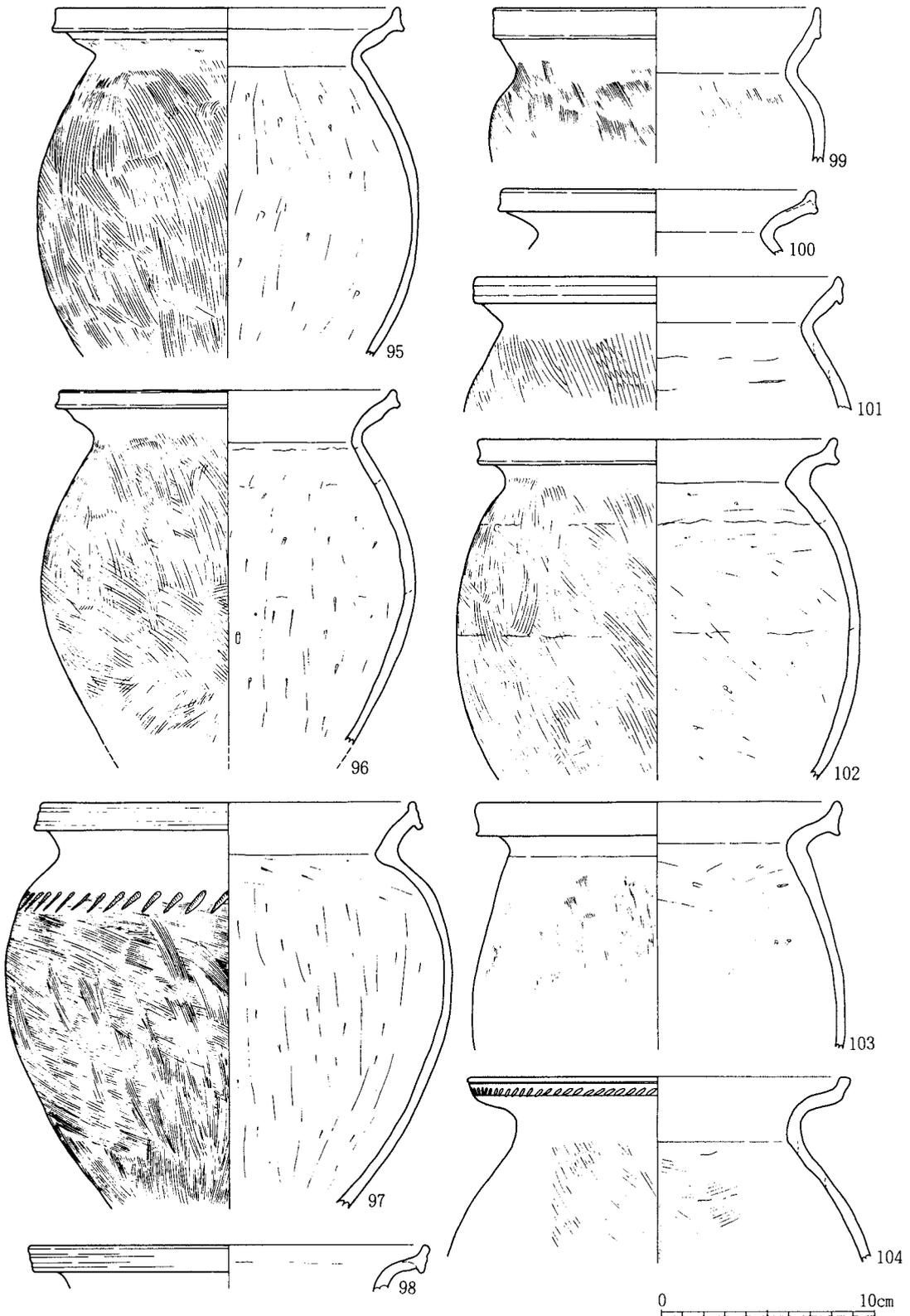


第31図 出土遺物実測図 大溝

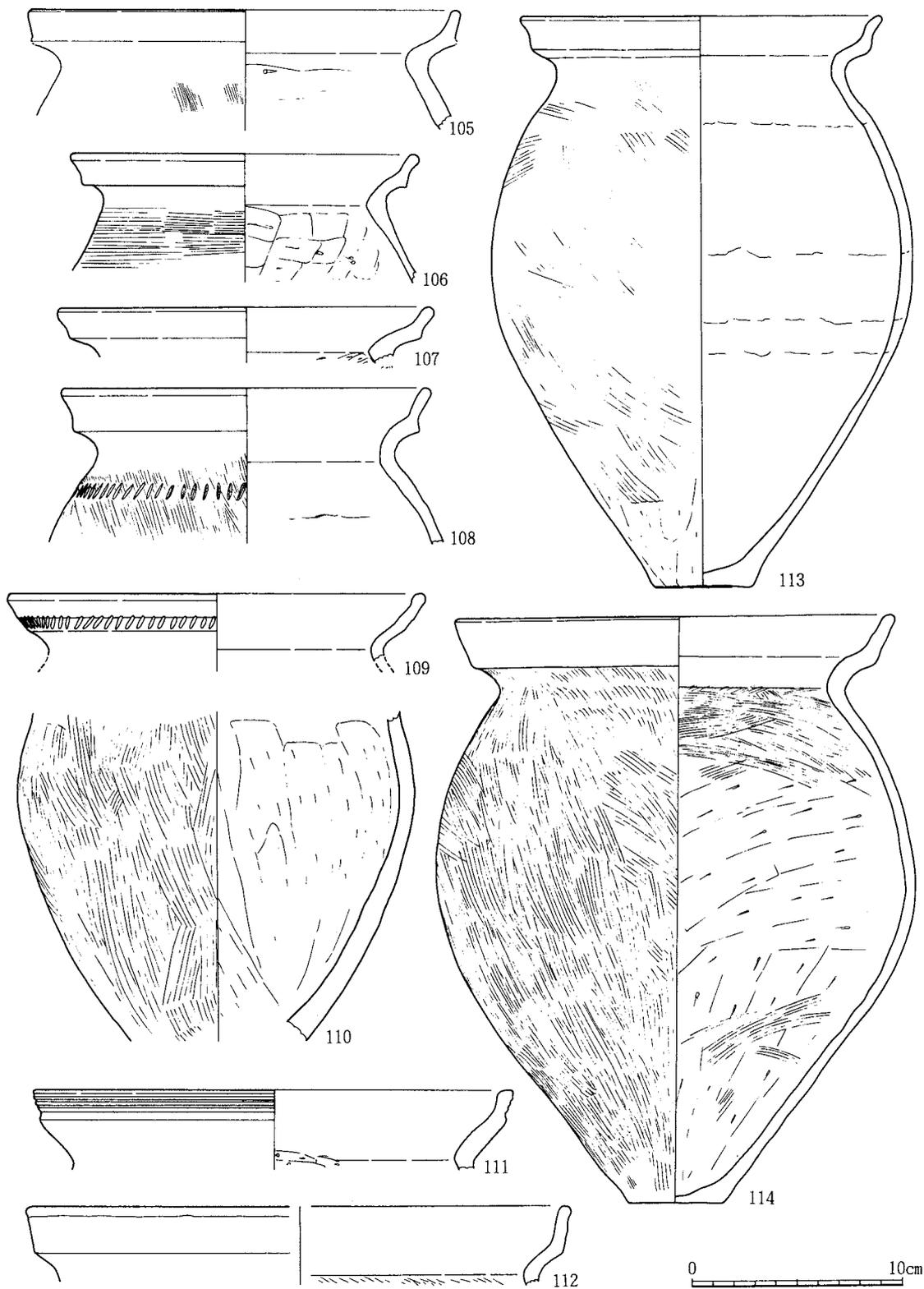
0 10cm



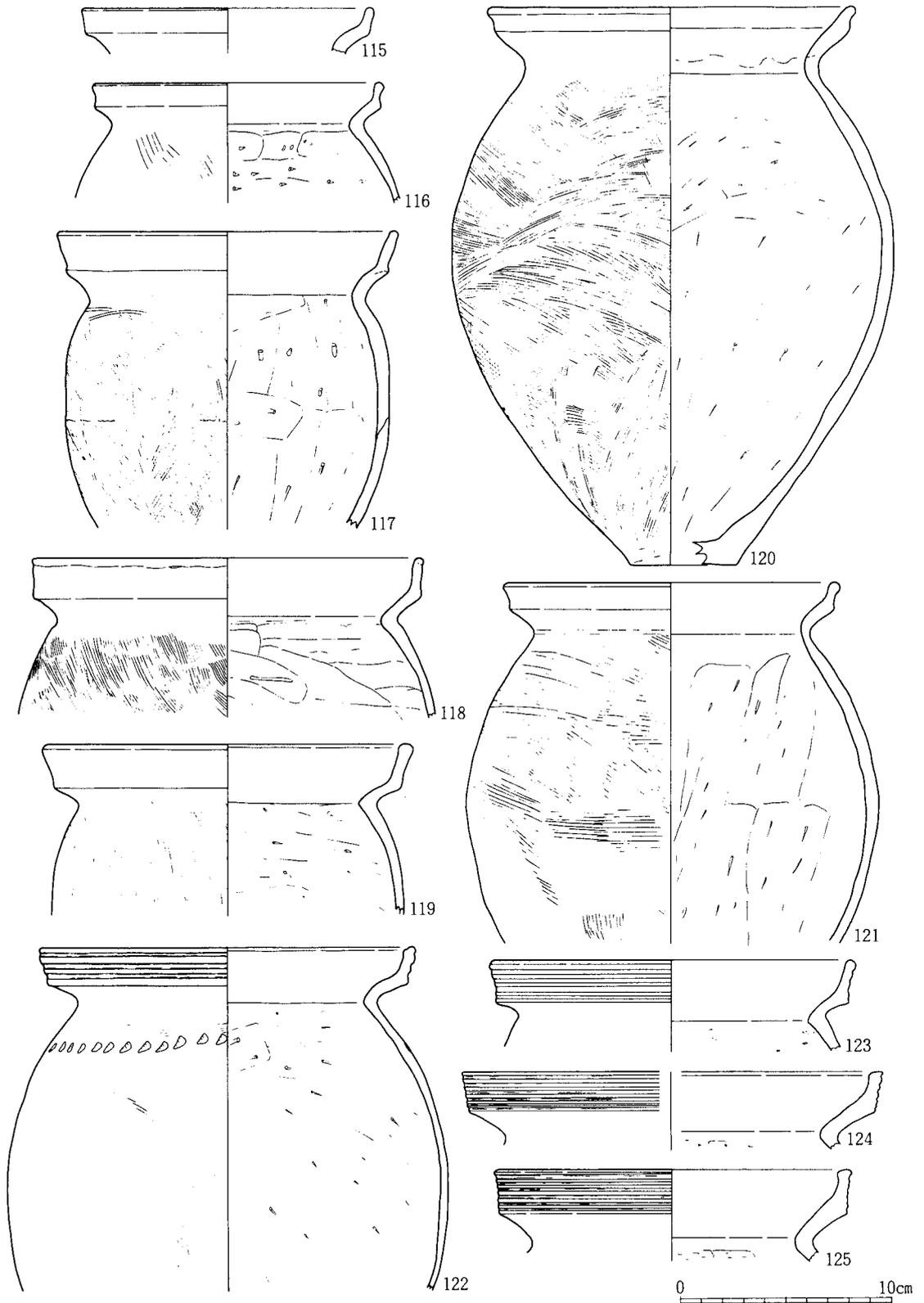
第32図 出土遺物実測図 大溝



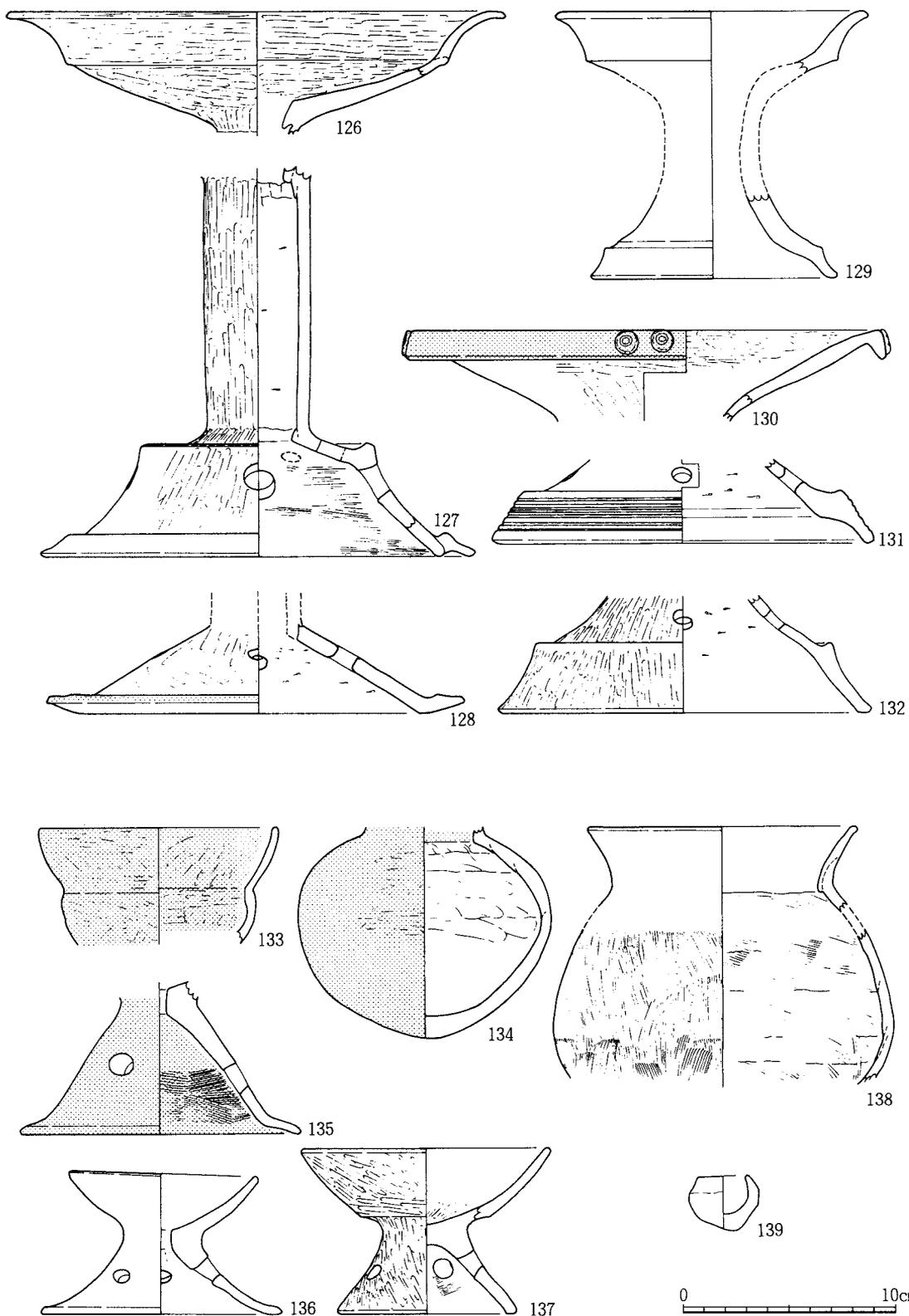
第33图 出土遺物実測図 大溝



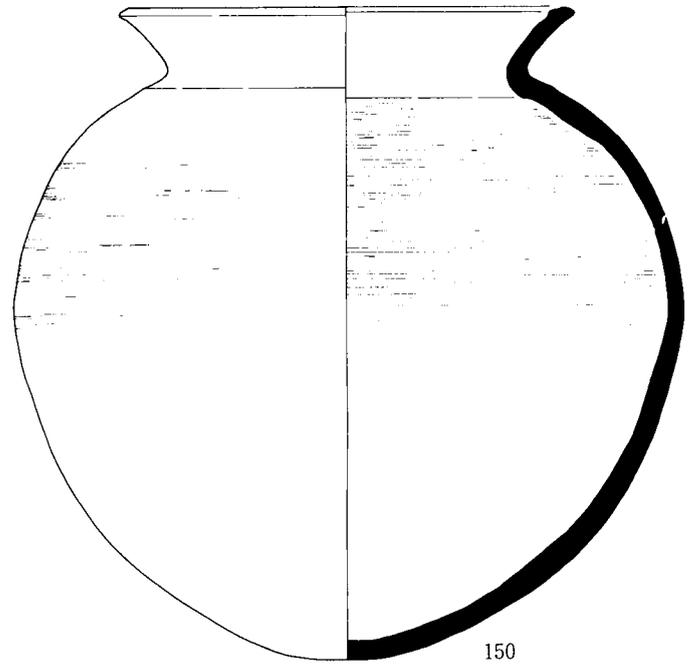
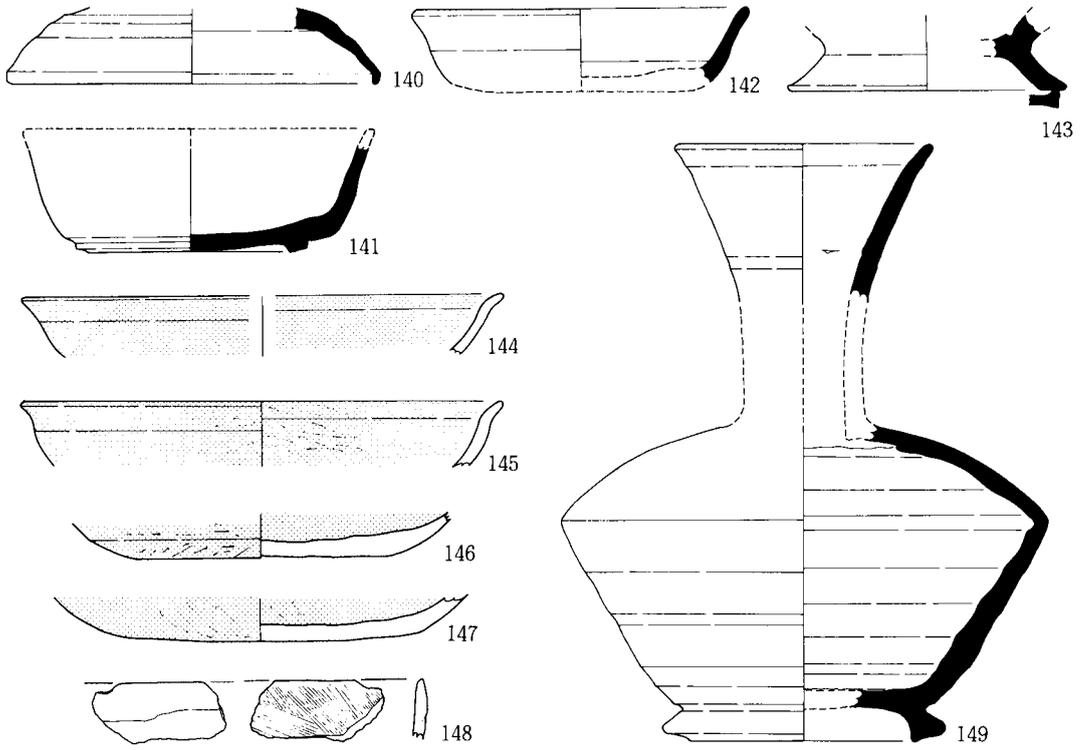
第34図 出土遺物実測図 大溝



第35図 出土遺物実測図 大溝



第36图 出土遺物実測図 包含層



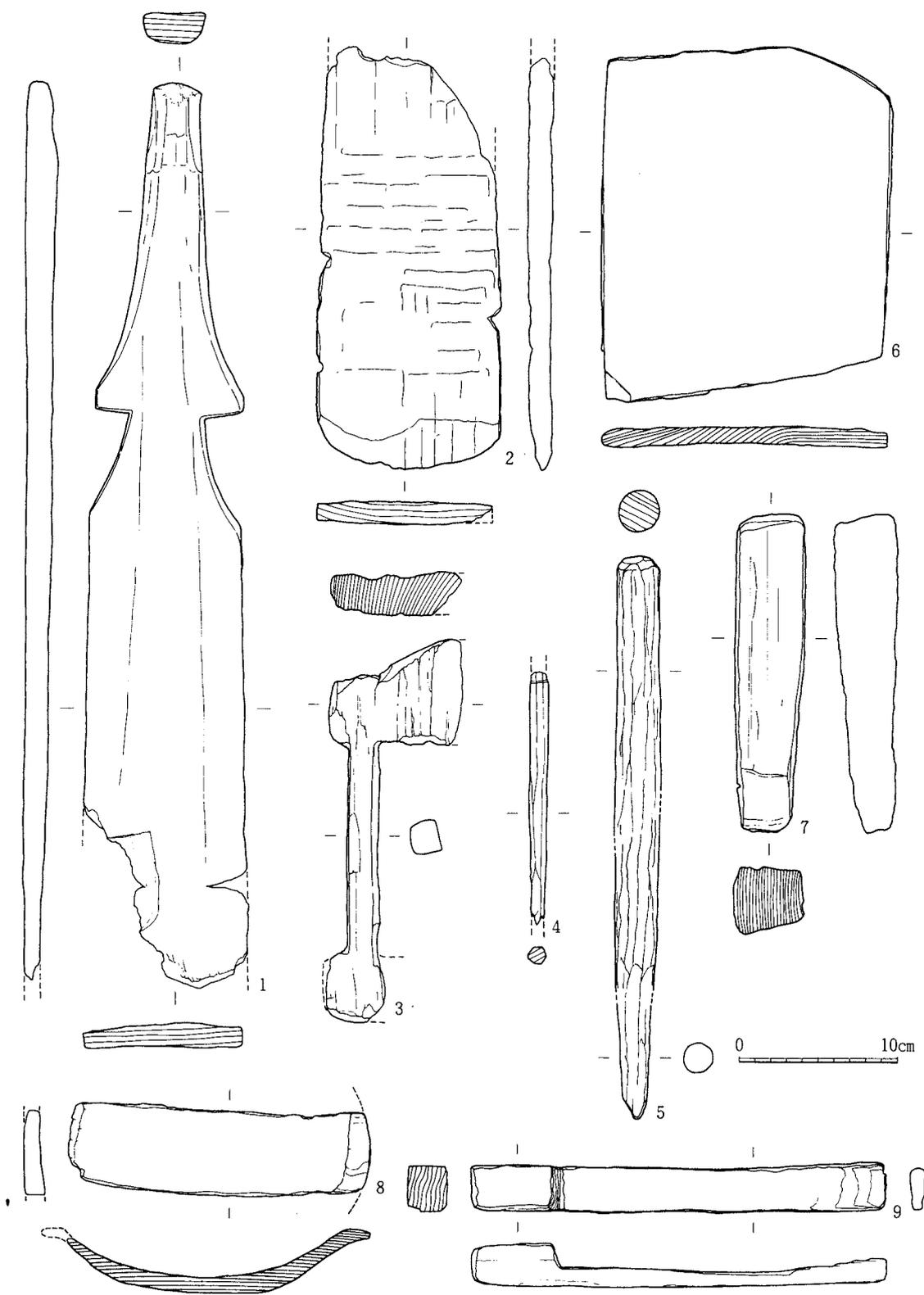
150の胴部拓本

0 10cm

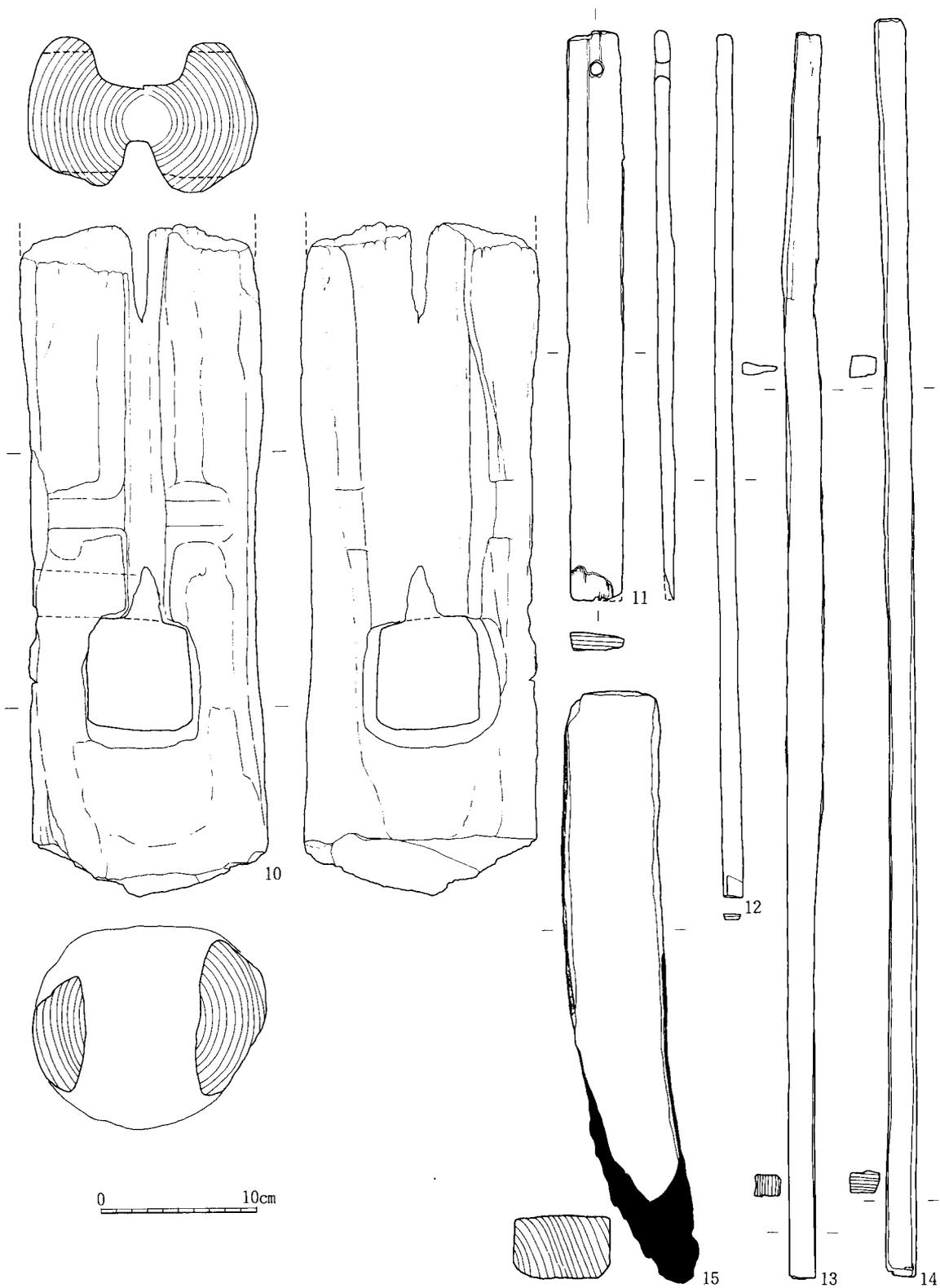
第37図 出土遺物実測図 奈良・平安時代



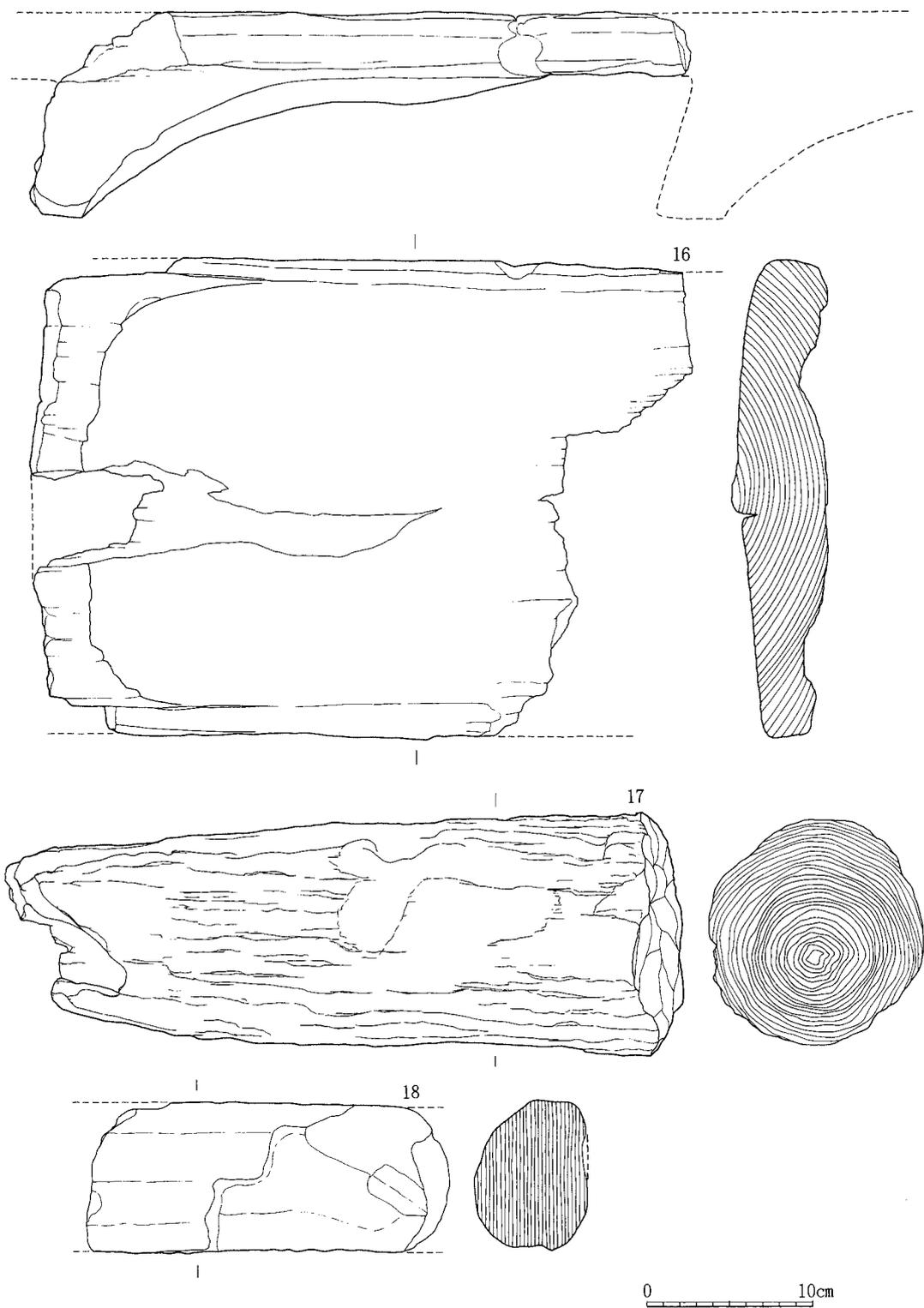
第38図



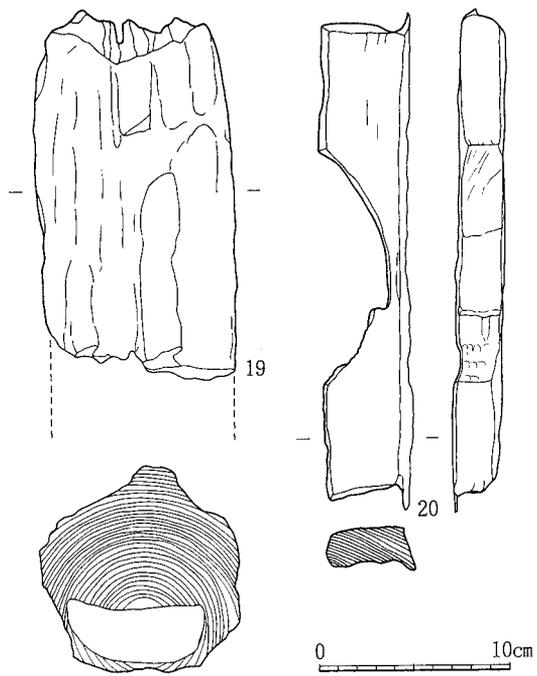
第39図 出土遺物実測図 大溝



第40図 出土遺物実測図 大溝



第41図 出土遺物実測図 大溝、SB03



第42図 出土遺物実測図 SK01

出土遺物属性表

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	その他	実測番号
1	C-4区 SK-01①	鉢	A:14.4 H:7.0 B:2.3 C:538		C70
2	C-4区 SK-01①の下	甕	A:17.2		C72
3	D-6区 SD-15東壁際	甕	A:17.8	D-6区包含層 SK-04	C100
4	D-6区 SD-15東壁際	甕	A:16.0		C95
5	C-6区 SD-09	壺	A:11.6	沈線 5本 内外面赤彩	C76
6	D-5区 SK-05	器台	A:22.0	D-6区包含層 SB03貯蔵穴か	C96
7	C-6区 SK-07東壁	壺	A:15.8 B:3.6 M:14.3 C:1461	SK04	C97
8	B-2区 SD-01	甕	A:19.0 M:29.4 C:11033		C75
9	C-4区 SK-01⑧	甕	A:13.8		C71
10	B-3区 SD-01 砂層	器台			C74
11	C-6区 SD-08	壺	A:10.2		C77
12	C-6区 SD-08	甕	A:17.8		C78
13	C-6区 SD-08	甕	B:3.4		C80
14	C-6区 SD-08	甕	B:2.8		C79
15	C-6区 SD-08	甕	A:18.0 M:22.1 C:5505		C133
16	B-5区 P-105	甕	A:15.2 B:3.8 H:22.1 M:17.5 C:2918	B-5区 P-124 SB-01	C98
17	D-5区 包含層	壺	A:16.0 C:3919		C102
18	C-5区 SD-12①	甕	A:19.4	②、⑤	C114
19	C-4区 SD-12③	鉢	A:9.4 B:4.7 H:7.7 C:357		C137
20	C-5区 SD-12②	鉢	A:20.0	B-6区 SD-09 あぜ	C127
21	C-5区 SD-12①	鉢	A:24.0 B:5.2 H:10.3 C:2234	⑤、⑥	C115
22	C-4区 SD-12⑤北	器台	A:26.1	B-4区 包含層	C85
23	B-4区 SD-12	高杯		B-4区 包含層	C93
24	C-4区 SD-12④	大型鉢	A:29.2	⑤、⑦	C121
25	C-5区 SD-12④	壺	A:30.2	SD-21⑬⑭、S D-22⑬⑭⑯⑰ 他多数	C124
26	C-5区 SD-12⑯～⑳	壺	A:15.0 B:4.3 H:27.2 M:21.7 C:4280		C125
27	C-5区 SD-12④	壺	A:14.1 B:6.3 H:31.1 M:20.3 C:4958		C120
28	D-5区 SD-12④	壺	A:14.1 B:3.7 H:27.1 M:16.6 C:2896		C119
29	C-4区 SD-12②	壺	B:3.9	③～⑤、⑭、 ⑳	C113

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	その他	実測番号
30	C-5区 SD-12⑳	壺	A:15.2		C94
31	B-4区 SD-12	壺	A:17.7	32と同一個 体	C83
32	C-4区 SD-12③	壺	B:5.0 M:24.6 C:5141	31と同一個 体	C116
33	C-1区 SD-12⑤	甕	A:17.7 B:3.5 H:24.5 M:18.0 C:3701		C123
34	C-4区 SD-12⑨	甕	A:19.0 B:5.7 H:25.5 M:22.6 C:5320	C-4区 SD-5	C122
35	C-4区 SD-12②、③	甕	A:14.1 B:4.3 H:19.1 M:16.6 C:2290		C134
36	C-5区 SD-12②、③	甕	A:18.0 B:4.5 H:20.2 M:17.5 C:2878		C86
37	C-4区 SD-12④	甕	A:16.5 B:4.3 H:26.9 M:22.5 C:5841	②、⑳	C81
38	C-5区 SD-22⑧	高杯	B:15.6	⑯	C88
39	D-5区 SD-22⑯	高杯			C117
40	C-5区 SD-21	高杯	B:18.4	13と周辺	C128
41	D-5区 SD-21	脚台	B:7.0	12とその西 北	C89
42	D-5区 SD-21	甕	A:16.8	13と周辺	C131
43	D-5区 SD-21	甕	A:16.3	13と周辺	C129
44	D-5区 SD-21	甕	A:19.6	12とその西 北 C-6区 P- 67 SD08	C130
45	C-5区 SD-21	甕		12とその西 北	C126
46	D-5区 SD-21	壺		12とその西 北	C90
47	D-5区 SD-22⑦	壺	A:12.2		C87
48	D-5区 SD-22⑯	器台	A:22.8	SD-12	C91
49	D-5区 SD-22⑩	甕	A:18.0		C132
50	D-5区 SD-22⑧	甕	A:24.0	⑩、SD-12⑳	C92
51	SD-22⑦	鉢			C118
52	C-2区 NR-02 粗砂層	小型土器	B:6.2		C28
53	C-2区 NR-02 砂利層	小型土器	A:8.0 B:2.8 H:4.9 C:61.3		C8
54	B-2区 NR-01 砂利層	鉢(高杯)		B-C-4区 SD- 12	C82
55	C-2区 NR-02 粗砂	鉢	B:3.2		C36
56	B-C-2区 NR-02西あぜ	鉢	A:24.0		C67
57	C-2区 NR-02 ビート層	蓋	A:14.2 B:4.3 H:5.2		C64
58	C-2区 NR-02 砂利層	有孔鉢	A:13.9 B:4.2 H:12.0 M:13.3 C:763		C63

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	その他	実測番号
59	B-2区 NR-01 砂利層	小型壺	A:9.9 H:10.1 M:11.6 C:488		C62
60	B-3区 NR-01	細頸壺		ビート層、 砂利層	C140
61	B-C-2区 NR ビート層	高杯	A:30.4		C68
62	C-2区 NR-02 ビート層	高杯	A:28.0	細砂	C65
63	C-2区 NR-02 ビート層	高杯			C138
64	B-3区 北壁 NR-01	高杯		上面黒褐色 土	C66
65	B-3区 NR-01 ビート層	高杯			C69
66	C-2区 NR-02 粗砂層	器台	A:23.0 B:19.8	ビート層	C139
67	C-2区 NR-02 粗砂層	壺	A:13.0 C:2034		C30
68	C-2区 NR-02 粗砂層	壺	A:15.6		C29
69	C-2区 NR-02	壺	A:15.8		C44
70	C-2区 NR-02 粗砂層	壺	A:13.5 B:5.8 H:27.3 M:18.8 C:3686		C23
71	C-2区 NR-02 砂利上層	壺	A:14.2 B:5.4	粗砂層、コ ブ付	C19
72	C-2区 NR-02 砂利層	壺	B:6.0 M:18.0 C:2176	肩部に絵画 線刻	C14
73	C-2区 NR-02 あぜ	壺	B:5.6 M:17.6 C:1879		C42
74	C-2区 NR-02 砂利層	壺	A:12.8 B:5.4 H:19.6 M:17.8 C:2520	粗砂層、 ビート層	C4
75	B-3区 NR-01 ビート層	壺	A:11.5 B:4.7 H:20.4 M:15.1 C:1830		C52
76	C-2区 NR-02 ビート層	壺	A:13.8		C58
77	C-2区 NR-02 粗砂層	壺	A:14.6		C32
78	C-2区 NR-02 粗砂層	壺	A:12.7 C:2054	ビート最下 層	C35
79	C-2区 NR-02 ビート最下層	壺	A:16.2 C:3096	粗砂層	C3
80	B-2区 NR-01 砂利層	壺	A:17.5		C56
81	B-2区 NR 砂利層	壺	A:15.0		C57
82	C-2区 NR-02 ビート最下層	壺	A:14.1 B:5.6 H:28.2 M:25.0 C:6713		C1
83	B-2区 NR 砂利層	壺	A:16.0		C55
84	B-2区 NR ビート層	壺	A:17.0		C60
85	B-3区 NR-01 黒褐色	壺	A:19.2		C34
86	C-2区 NR-02 粗砂層	壺	A:11.1 M:11.6 C:820		C22
87	C-2区 NR-02 砂利層	壺	A:12.5 M:13.0 C:1020		C16
88	C-2区 NR-02 砂利層	壺	A:16.2 M:16.4 C:2121		C15

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	その他	実測番号
89	C-2区 NR-02	甕	A:19.3		C73
90	B-3区北壁 NR-01 上面	甕	A:16.0		C48
91	C-2区 NR-02 粗砂層	甕	A:17.3		C24
92	C-2区 NR-02 黒粘土層	甕	A:17.0	混入か	C49
93	C-2区 NR-02 砂利層	甕	A:15.0 M:14.2 C:1418	粗砂層 B-3 区 NR-01 砂 利混ビート	C20
94	C-2区 NR-02 砂利層	甕	A:15.4 B:5.1 M:20.9 C:4878		C5
95	C-2区 NR-02 ビート最下層	甕	A:16.3 M:18.1 C:3060	粗砂層	C37
96	C-2区 NR-02 粗砂層	甕	A:16.0 M:17.7 C:2766		C25
97	B-3区 NR-01 ビート層上層	甕	A:17.7 M:21.2 C:4585	C-2区 NR-02 砂利層	C53
98	B-2区 NR ビート層	甕	A:18.9		C18
99	C-2区 NR-02	甕	A:15.4	黒灰褐色粘 土層	C45
100	C-2区 NR-02 砂利層	甕	A:14.8		C9
101	B-3区 NR-01 上面	甕	A:17.2	C-2区 NR-02 粗砂層	C47
102	C-2区 NR-02	甕	A:16.9 M:19.0 C:3314	黒灰砂粘 土層	C43
103	C-2区 NR-02 ビート層	甕	A:16.9 C:2112		C6
104	C-2区 NR-02 粗砂層	甕	A:18.0		C38
105	C-2区 NR-02 北壁	甕	A:20.7		C41
106	C-2区 NR-02 粗砂層	甕	A:16.6		C21
107	C-2区 NR-02	甕	A:18.0		C11
108	B-2区、C-2区 NR 砂利層	甕	A:17.6		C10
109	C-2区 NR-02 砂利層	甕	A:20.0		C27
110	B-2・3区 NR-01 砂利層	甕	C:2504	ビート層	C33
111	C-2区 NR-02 砂利層	甕	A:23.0	粗砂層	C17
112	B-2区 NR 砂利層	甕	A:26.0		C61
113	C-2区 NR-02 砂利層	甕	A:17.1 B:4.7 H:27.6 M:19.9 C:4633	粗砂層	C26
114	C-2区 NR-02 ビート最下層	甕	A:20.9 B:4.6 H:28.4 M:22.7 C:6386		C2
115	B-3区 NR-01 砂利層	甕	A:14.0		C51
116	B-2区 NR 砂利層	甕	A:13.9		C54
117	C-2区 NR-02 砂利層	甕	A:16.3 M:15.5 C:2081		C13
118	C-2区 NR-02 南壁	甕	A:18.6	黒色ビート 層、赤灰粗 砂層	C40

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	その他	実測番号
119	C-2区 NR-02 北壁	甕	A:17.8	黒粘土層	C136
120	C-2区 NR-02ピート最下層	甕	A:17.6 B:5.1 H:27.0 M:21.1 C:5058	粗砂層、砂利層	C39
121	C-2区 NR-02 砂利層	甕	A:16.0 M:19.0 C:3285	粗砂層、ピート最下層	C31
122	B-3区 北壁 NR-01上面 黒褐色	甕	A:18.1 M:21.2 C:4439	B-3区、SK-04	C46
123	C-2区 NR-02 砂利層	甕	A:17.4		C7
124	B-2区 NR ピート層	甕	A:20.1		C59
125	B-3区 NR-01 砂利層	甕	A:17.0		C50
126	D-6層 包含層	高杯	A:23.6		C101
127	B-4区 北壁 包含層	高杯	B:20.5	C-5区北包含層	C111
128	D-5区 包含層	高杯	B:19.7		C103
129	B-4区 北壁 包含層	器台	A:14.7 B:11.6		C112
130	B-4・5区 包含層	器台	A:23.0		C109
131	D-5区 西壁の溝	器台	B:17.9		C84
132	B-4・5区 包含層	器台	B:17.6		C110
133	D-6区 拡 包含層	小型鉢	A:11.3 C:325		C12
134	C-6区 包含層	小型壺	M:12.1 C:530		C104
135	C-6区 包含層	小型器台	B:13.2		C135
136	C-5区 包含層	小型器台	A:8.9 B:11.4 H:6.8		C107
137	C-6区 包含層	高杯	A:11.9 B:8.6 H:8.0		C105
138	C-6区 北 包含層	壺	A:12.6 M:16.0 C:1555		C106
139	C-5区 包含層	手づくね	A:2.4 C:7.3		C108
140	東南半調査区排土	蓋	A:14.6		D10
141	C-1,2,3区 客土	有台杯	B:9.0 C:415		D8
142	B-2区 客土	杯			D11
143	C-2区 客土	長頸瓶	B:10.8		D9
144	B-4区 SD-01	盤			D7
145	B-3区 SD-01	盤		弥生土器 か?	D6
146	C-3区 包含層	盤	B:9.8		D4
147	B-3区 包含層	盤		C-1,2区 包含層	D5
148	D-6区 包含層	甕		土器器か製 塩土器	D6

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	その他	実測番号
149	D-6区 包含層	長頸瓶	B:11.0 C:1599	150・151と一括出土	D1
150	D-5・6区 包含層	小甕	A:17.7 M:26.1 H:25.9 C:7572		D3
151	D-6区 包含層	大甕	A:39.1 M:68.2 C:124859		D2

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	樹種	その他	標本番号
1	B-2区 NR-01	鎌	L:58.3 W:10.2 H:2.2	コナラ節	砂利層	1004
2	B-2区北壁 NR-01	鋤	L:27.3 W:11.8 H:1.5	クスギ節	砂利層	1005
3	C-2区 NR-02	把手	L:24.8 W:8.6 H:2.8	スギ	黒灰砂混粘土層	1024
4	C-2区 NR-02壁	棒	L:16.3 W:1.2 H:1.3	スギ	黒色粘土層	1029
5	C-2区 NR-02	尖り棒	L:36.3 W:2.9 H:2.7	ケヤキ	砂利層、C3杭より北へ3m西へ1.5m	1023
6	B-2区 NR-01	板	L:23.0 W:18.3 H:1.3	スギ	白粗砂	1018
7	C-2区 NR-02	四角細棒	L:20.6 W:4.6 H:4.4	クリ	砂利層	1034
8	C-2区 NR-02	槽	L:19.3 W:5.7 H:1.4	スギ	D-3杭より西4.3m北3.3mピート混粗砂層	1008
9	B-2区 NR-01	槽	L:26.4 W:3.1 H:2.8	スギ	砂利層	1010
10	C-2区 NR-02	柱	L:43.5 W:15.4 H:13.0	ヤナギ属	C-3杭から西3m、南1m、粗砂層	1007
11	C-2区 NR-02	穴あき板	L:36.9 W:3.7 H:1.2	スギ	粗砂層	1013
12	C-2区 NR-02	薄板	L:56.9 W:1.3 H:0.4	スギ	砂利層	1026
13	C-2区 NR-02	角棒	L:81.2 W:1.7 H:1.5	スギ	粗砂層	1027
14	C-2区 NR-02	角棒	L:80.5 W:1.5 H:1.2	スギ	粗砂層	1028
15	C-2区 NR-02	杭	L:38.3 W:6.3 H:4.1	ケヤキ	砂利層、先端炭化	1037
16	C-2区 NR-02 北壁	梯子	L:40.4 W:29.8 H:12.7	ヤマザクラ	粗砂層	1006
17	D-5区 SB-03北柱穴	丸太柱	L:41.5 W:15.0 H:13.9	カエデ属		1009
18	C-2区 NR-02	柱材	L:22.2 W:10.3 H:6.9	ケヤキ	ピート層	1043
19	C-3区 SK-01	丸太柱	L:19.7 W:10.5 H:11.0	コナラ節		1011
20	C-3区 SK-01	板	L:26.7 W:4.7 H:1.9	スギ	えぐりあり	1012































































# 第5章 考 察

## 住居周辺排水溝からの土器等の一括出土について

### 1. はじめに

本遺跡の弥生時代後期の竪穴建物跡SB03に付属する排水溝SD12等からは、その機能廃絶にともなって投棄されたと推定される多量の土器が出土した。

このように、決して広いとは言えない建物外郭の溝から、遺存度のよい土器が一括出土する例はいくつかの遺跡で認められる。ここでは、その具体例を検討し、出土類型を認定するとともに、集落動向の中でそれがどのような意味を持つのかについて考えてみたい。

### 2. 検出例

#### 津幡町谷内石山遺跡（津幡町教育委員会1980）

弥生時代後期末の集落跡で、丘陵平坦面で2棟の竪穴建物が調査された。第2号住は一辺約4.4m、隅円方形2本主柱の建物で、周囲にはほぼ全周するような溝が巡る。

溝は幅約35cm前後、深さ約30cm、底面は平らで、壁の立ち上がりは垂直に近いほど急である。多量の土器は、平野に面する建物の北西側に集中しており、溝底から若干浮いて検出面まで折り重なるような状態で出土した。遺存度は高いが、多くは破損品である。器種は豊富で組成に偏りは認めがたい。土器の他に多くの炭化材があり、溝を塞ぐような状態で大型礫が埋まっていた。

調査は小範囲のため集落の存続期間は不明であるが、少なくともこの竪穴はその最新段階の建物跡ではない。時期は後期末、月影式併行期でも古い段階とみられる。

#### 金沢市塚崎遺跡（石川県教育委員会1976）

丘陵平坦面に営まれた弥生時代後期後半古段階～終末期新段階までの集落跡で、26棟の竪穴建物跡と4棟の掘立柱建物跡が検出された。

これらの建物跡に排水溝を持つものはないが、「半環溝状遺構」とされるものは、内部に平地式建物を伴い、その排水溝になるとみられる。

溝は谷状凹地の谷頭部に作られており、名前の通り半環状を呈する。幅約45cm、深さ約30cm。底面は平坦で、壁は底から15cmまではほぼ垂直に立ち、その上方で開く断面形を持つ。埋土は2層からなり、下層は土器等を含まず、上層の暗（黒）褐色土には多量の土器・木炭が含まれていた。

土器は5群に分かれ多量の完形品が集中したとされるが、正確な器形遺存度は分からない。時期は弥生時代後期後半古段階で、集落最古段階の建物である。

#### 押水町宿東山遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1987）

丘陵平坦面に営まれた弥生時代後期後半新段階を中心とする集落跡で、各12棟の竪穴建物跡と掘立柱建物跡が検出された。排水溝は中規模クラスの竪穴建物に認められる。

1号住は5.2m×4.2mの隅円長方形2本支柱の竪穴建物で、溝SD01はその排水溝である。斜面上に向かって住居を取り巻くように逆U字形に掘削される。幅30～60cm、深さは検出面から10～20cmと浅いが、上面が流失しており本来はもっと深かったとみられる。底はほぼ平坦である。

土器は4群に分かれており床面から一定程度浮いて出土した。遺存状態は遺構上面が流失していたこともあり定かではないが、破片が不自然な重なり方をする部分もあり、完形品が据え置かれた状態であったものはほとんどないようだ。

竪穴は部分的に床や上面が火を受け炭化材が残っていた。埋土は自然堆積の様相を呈しており特に埋め戻された形跡はない。溝からは中型の甕形土器2個体が出土したが、竪穴床面付近と貯蔵穴テラスにも類似形態のものが2個体略完形で出土した。なお、このほか溝には小型甕形土器と鉢形土器も2個体ずつあり注目されたが、全体の器種構成に偏りは認めがたい。

時期は、集落の建物群の変遷を大きく2段階に分ければ、その新段階にあてられる。ただし最新段階の建物かは不明である。

これらの他に、野々市町御経塚ツカダ遺跡81-2 T（弥生時代後期終末、野々市町教委1984）や、七尾市万行赤岩山遺跡第2号住（弥生時代後期終末、七尾市教委1983）、建物との関係は不明ながら金沢市二口六丁遺跡小溝A（古墳時代前期初頭、金沢市教委1983）もこのような例に含められる可能性がある。

### 3. 出土類型の認定

以上僅か3例であるが過去の調査例を概観してみた。次に本遺跡例も加えてこれらに見られた共通性をひとつの出土類型として認定するために属性ごとに再整理していきたい。

まず、遺構は建物の周囲にある機能的には排水（湿気抜き）用と考えられる溝である。このような溝は丘陵地、平地の建物を問わず存在するが、確認できないものもあり、その有無にどのような差があるのかは分からない。平面形態は、様々あるがここでは問題にしない。居住用建物に付随するのが一般的で、いわゆる倉にはみとめられない。

溝は上面幅が40～60cm前後で底は平ら、壁の立ち上がりが急で幅に対して深さの深い断面形態をとる。この溝の形態上の特徴は、建物外郭の排水溝としては一般的なものであり、ここで問題にしている土器の出土類型に固有のものではない。

溝の埋土は、大まかには上下2層からなるのが一般的で、多量の土器等はその上層から出土する。下層は、本遺跡例で砂層が堆積していたように、溝掘削後開口して本来の機能で使用されていた段階の埋土であり、上層は、大形礫や炭化材等をまじえて上面まで遺物で埋まるようにその機能を放棄した後の埋土と考えられる。上層は通常黒色系の埋土となるが、自然堆積土から埋め土かについては確認された例はない。なお、この排水溝から土器が出土すること自体は一般的現象であり、土器の遺存度や出土状態が重要である。両者を厳密に識別するのは困難な場合もあるが、類型設定は十分可能と考える。出土地点は溝の一定領域に集中するが、その場所に特定の意味を見いだすことは難しい。

土器は器形遺存率の良い個体が多く出土する。ただし、重要な点は、復元可能な完形品が器形

を窺い知れるような状態で検出される例は意外と少ないことである。この点は、人為的廃棄を認めても完形品を溝内に意図的に据え置いたと解釈するにはやや無理があると思われる。遺物は土器のみならず木製品や大形の石を含むことがあるが、谷内石山遺跡例では土器に混じって炭化材が雑然と出土しており、それらに規則性を見いだすことは難しい。

出土土器の組成は、中型甕形土器を普遍的に含み、器種に特に偏りは認め難い。むしろそれが特徴といえるかも知れない。宿東山遺跡では、6号住廃棄土器群では鉢・高杯・小型高杯が顕著であるのに対して、SD01の器種組成は甕形土器を主体とし、遺跡全体のそれにより近いといえる。

時期は現状では弥生時代後期後半から古墳時代前期のうちに認められるが、一集落内でも各遺跡でも普遍的に認められるわけではない。時期幅については当該住居型式の消長に関連したものであり、今後の調査次第で再検討が必要である。また、弥生時代中期以降、本住居型式と共存する、幅広の周溝を伴う平地式建物での、溝への土器の廃棄形態も併せて比較検討する必要がある。類型設定にあたっては資料の増加を待って補足すべき点が多い。

#### 4. 土器一括出土の意義

さきに整理したように、多量の土器等は溝の機能廃絶にともなって、一定領域に人為的に集中して置かれた（廃棄された）と考えられる。ただしその置かれ方そのものに、方形周溝墓の土器配列（かたづけ）に見られるような特定の意義を見いだすことはできない。

多量の土器群が溝内へ入ることによって排水溝としての機能が喪失するならば、そのことは建物の居住環境とは無関係ではない。すなわち住居の廃絶によってはじめてその排水溝が不要になるのであり、この場合の土器廃棄の契機もそこに求めたい。

集落における土器の廃棄の研究は、縄文時代の竪穴住居跡の一括遺存土器群（吹上パターン）の解釈をめぐって活発化し、廃棄現象を総括的に捉えそこから当時の人々の行動様式を明らかにしていこうとする方向へ進展した（小林1974他）。一方、弥生時代以降においてもこれらの廃棄パターンの存在が古くから知られ、橋本正氏は富山県中山南遺跡を例にそれらの適用を示すとともに、「かたづけ」の概念を深化（〈占拠地廃絶時のかたづけ〉・〈占拠地再利用時のかたづけ〉）させた（橋本1971）。また、柱抜き穴から完形土器が出土する例を「中山南パターン」とし、住居廃絶時のかたづけ行為と関連付けている。

いま問題にしている排水溝への土器一括廃棄については、住居廃絶時の「かたづけ」によるものと考えられ、橋本氏のいう〈占拠地廃絶時のかたづけ〉に相当しよう。住居廃絶の要因には集落内での建て替えや集落の移動などいくつかの場合が想定できるが、少数の検討結果によれば集落内の最新段階の例はなく、後者の場合は少なかつたと考えられる。類例の普遍性が認めにくい点に関しては、竪穴の廃棄パターンと一体的に捉える中でその意味を検討していく必要がある。

完形に近い土器群の一括廃棄現象については、吹上パターンを土器作りのサイクルと関連づけた小林氏の論があるが、この類型では使用可能な完形品は少なく、多くは遺存率のよい破損品であり、単純に適用できるわけではない。住居内外に置かれた破損品や木材、石、その他の不用品を溝に廃棄することによって、それを埋め戻すことを目的にした行為と考える。

この廃棄類型と関連して、竪穴建物の床面近くから完形に近い土器が一定量出土することがある。器形の遺存状態を詳細に観察すると完形品ばかりとは限らず、意図的な「置き去り」の場合が多かったと考える。押水町冬野遺跡1号住（石川県立埋蔵文化財センター1991）の床面土器群はこの例とみられ、排水溝への廃棄と同様に〈占拠地廃絶時のかたづけ〉によるとする見方も可能である。宿東山遺跡SD01と1号住床面の土器廃棄はこのように住居廃絶時の「かたづけ」として統一的に把握することができるかも知れない。

また、「中山南パターン」とされた廃棄類型は、竪穴のみならず、掘立柱建物の柱穴でも普遍的に確認でき、その時期は幅広い（本田1986）。宿東山遺跡の掘立柱建物の柱穴は上面が埋め戻されたと見られる埋土のものが多かったが、SB04で遺存度の良い中型甕形土器が出土したほか、円礫を持つものも見られた。本遺跡SB01においても中型甕形土器16が出土している。建物取り壊しにかかる柱穴整地行為の一環として解釈することができ、これまで検討してきた住居廃絶にともなう「かたづけ」とほぼ同義の廃棄と考えることができよう。

日常生活での土器の破損に対する廃棄がどのような類型をとるのか分からないが、破片を主体とした谷部や集落縁辺、廃絶竪穴・廃絶溝などの窪地での土器の出土はその可能性が高い。排水溝廃棄の類型においては住居廃絶にともなう「かたづけ」とともに住居域の整地の意味も込められていたと考える。ただ、溝や柱穴の埋め戻しに際して、土だけでなくあえて土器を投入することの意味は当然問われなければならない。

最後に、この廃棄土器群の祭祀性の問題について触れておきたい。

本論で推定してきた土器廃棄の事情は、非日常的な廃棄行為であると言えたとしても、その契機自体には祭祀的意味合いを強調する理由はない。行為に付与された宗教的意義は別の問題として考える必要がある。

弥生・古墳時代の廃棄土器の祭祀性は、従来から遺存度の高い土器群の特定の「場」からの一括出土をもって認定されてきた。このような視点で当該期の土器祭祀について総括的な検討を行ったものとしては、吉岡康暢氏の論考（吉岡1991）がある。これは集落祭祀と墳墓祭祀の統一的把握により土器祭祀の諸段階に、時代的画期を読み取ろうとしたものであり、個々の種類の土器の出土状況や器種構成についても詳しく注意が払われている。しかし、発掘調査そのものや報告書の記載が不十分であったりして、正確な土器の出土状態や遺存度、器種構成の把握は決して十分とはいえない。遺存度の高い土器群の特定の「場」からの一括出土＝祭祀行為に付随した土器群の廃棄〔かたづけ〕とするには、現状の考古資料のみの解釈では難しい面がある。祭祀性の認定の問題は保留するとして、当面は吉岡氏が設定した諸類型を廃棄土器のそれとしてさらに検証作業を進め、集落における廃棄行為総体の中でのそれぞれの背後にある行動様式の特質を明らかにしていくことが必要と考える。

縄文時代の住居跡に見られた吹上パターンの解釈を巡っては、土器作りや集団移動にともなう単なる「廃棄」とはせずに、その背後にある宗教的意味合いを重視すべきという立場がある。ここでは民族学的成果などを援用しながらその解釈がなされているが、弥生時代等の廃棄現象に関しても各類型の特質を祭祀性として認定するには別角度からの視点が必要となろう。

## 5. まとめ

本論では今回の調査で確認した住居排水溝からの土器等の一括出土について、類例を検討し、その類型設定を行った。そして、その意義を住居廃絶を契機とする土器等の「かたづけ」、住居域の整地的行為に求め、柱穴への土器埋納、竪穴床面付近への略完形土器の遺棄も同様の視点で捉えられるとした。なお、それら廃棄行為の宗教的意義についての検討は今後の課題である。

### 〈引用・参考文献〉

- 石川県教育委員会1976『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ  
石川県立埋蔵文化財センター1987『宿東山遺跡』  
石川県立埋蔵文化財センター1988『津幡町刈安野々宮遺跡』  
石川県立埋蔵文化財センター1991『押水町冬野遺跡群』  
金沢市教育委員会1983『金沢市二口六丁遺跡』  
小林達雄1974「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』第93号  
津幡町教育委員会1980『津幡町谷内石山遺跡』  
七尾市教育委員会1983『万行赤岩山遺跡』  
野々市町教育委員会1984『御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』  
橋本 正1971「遺物の埋没について」『小杉町中山南遺跡調査報告書』富山県教育委員会  
本田秀生1986「掘立柱建物の柱穴内土器埋納について」『佐々木ノテウラ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター  
山本暉久1978「縄文中期における住居跡内一括遺存土器群の性格」『神奈川考古』第3号  
吉岡康暢1991「弥生—古墳転換期の土器祭祀」『日本海域の土器・陶磁』古代編 六興出版

## 第6章 まとめ

最後に、本調査で明らかとなった点を時代別に述べてまとめにかえたい。

**縄文時代** 晩期の土器片約300点が出土したが、明確な遺構は検出されず、集落の縁辺部にあたるものと推定される。この検出面の下にある黒色土（第8層）は過去の調査によれば、中期頃の地層の可能性があるが、今回の調査地までは当該期の遺跡は広がっていない。この間の扇状地堆積層の青灰色砂層から出土した自然木には、コナラ節、ハンノキ節があり、当時周辺は雑木林の景観を呈していたと見られる。

**弥生時代** 後期後半古段階の住居（SB03）と高床倉庫（SB01・02）、住居を取り巻く排水溝（SD12）とそれに連なる大溝（NR01・02—自然流路）などを検出した。小範囲ながら多様な遺構からなる弥生集落の一角を明らかにした。排水溝からは多量の土器が一括出土し、住居廃絶に伴う廃棄類型と認定すると共に、それを「かたづけ」行為と意義付けた。

大溝等から多くの木製品・自然木が出土し、樹種同定や花粉分析により当時の樹種利用形態や周辺の自然環境の復元に多くの資料が得られた。住居の支柱は径15cmのカエデ属の心材、高床倉庫の支柱は径15cmのヤナギ属の心材であった。梯子にはヤマザクラが使われた。容器など生活用具は遺跡外から持ち込まれたスギが用いられているのに対して、建築材や杭など加工度の低いものは、自然木としても多く周辺に自生していたとみられるカエデ属などが主に使われていた。加工度の低い部材及び自然木の樹種は非常に多様であり、集落周辺にそのような雑木林が形成されていた。集落廃絶後、この地は湿地となりハンノキ節などが繁茂していたと見られる。大溝からのサルノコシカケの出土は広葉樹の老木が付近にあったことを示している。

花粉分析によれば、調査地の極めて近い場所に耕作域（水田）があったと考えられた。周辺の低湿地は、スギ、ハンノキ、ヤナギを主とし、シデ、クルミ、ナラが散在するような植生が復元されたが、これに樹種同定で多かったカエデ属などを加えると、実に多様な樹林の様子が窺える。当時の気候は、暖温帯系の広葉樹がないことから、現在よりも若干冷涼と推定された。

住居、高床倉庫、排水溝、河川、水田、雑木林…、発掘調査で発見された集落を構成する遺構群と花粉分析・樹種同定で得られた樹種利用の植生復元等を通して、本遺跡が弥生集落の復元を行う上でのひとつのモデルを提供できたものと思う。

**古墳時代** 前期の土坑を若干検討した。明確な住居跡は検出されなかったが、調査地は集落内の縁辺にあたっていると考えられる。

**奈良時代** 直線溝SD01とそこから派生する小溝3本を検出した。その東側是水田域と考えられる。溝の西側では建物はなかったが、前期の貯蔵具類3個体が一括出土しており、極近くに住居域があると思われる。

**平安時代以降** 9世紀代の遺物が極少量あったのを最後に、これ以降のものは全く出土しなかった。平安時代以降、この地は集落が形成されることなく、黒色粘土～シルト層が堆積するような低湿地となり、荒蕪地ないしは水田域として現在に至ったようである。



遺跡周辺の航空写真（南東から）



同 上（北西から）



調査区の航空写真



調査区西半全景 手前が大溝



大溝全景 手前が支流NR-01



大溝 (NR-02) 調査風景



大溝 (NR-02) 土層断面



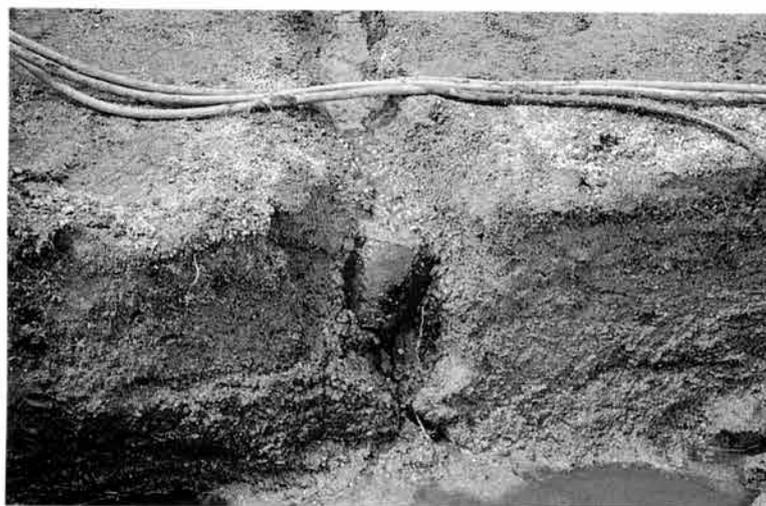
大溝 (NR-01) 土層断面 畦手前の中央最下層から鍬出土



大溝 (NR-02) 調査風景



大溝 (NR-02) 遺物出土状況



同上



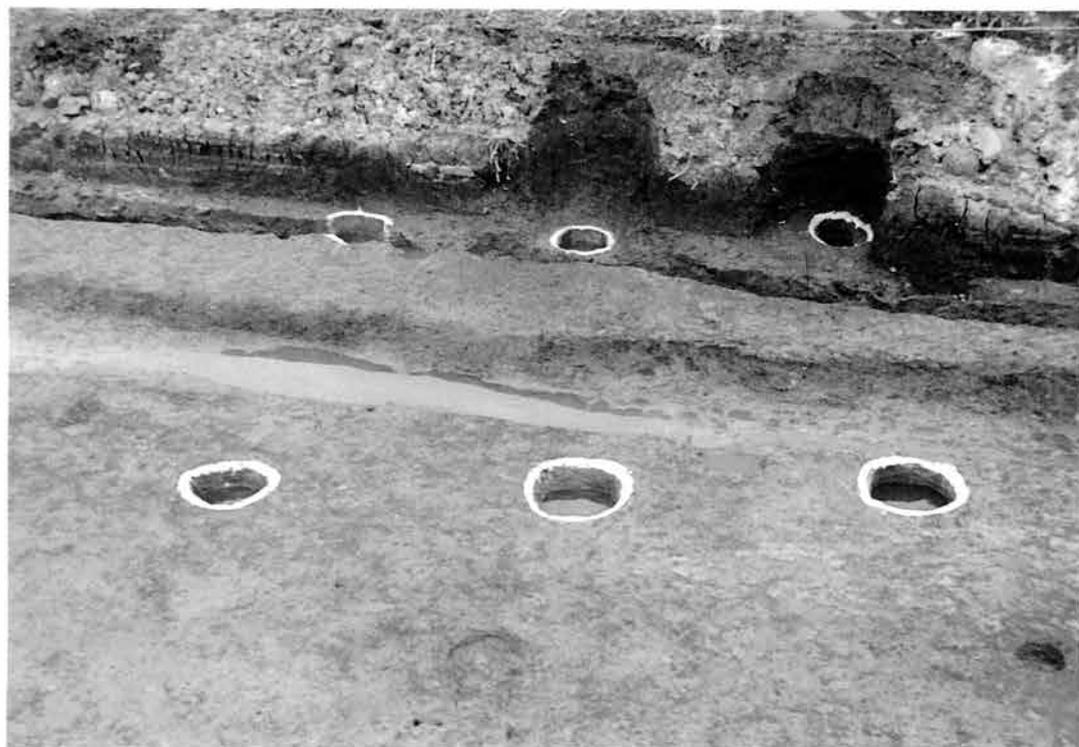
調査区東半全景（東から）



竪穴建物跡（SB-03）と排水溝（SD-12）



竖穴建物跡 (SB-03)



掘立柱建物跡 (SB-01)



竪穴建物跡（SB-03）柱根出土状態



SD-12調査風景



同上



SK01



SK08



ハンノキ樹根



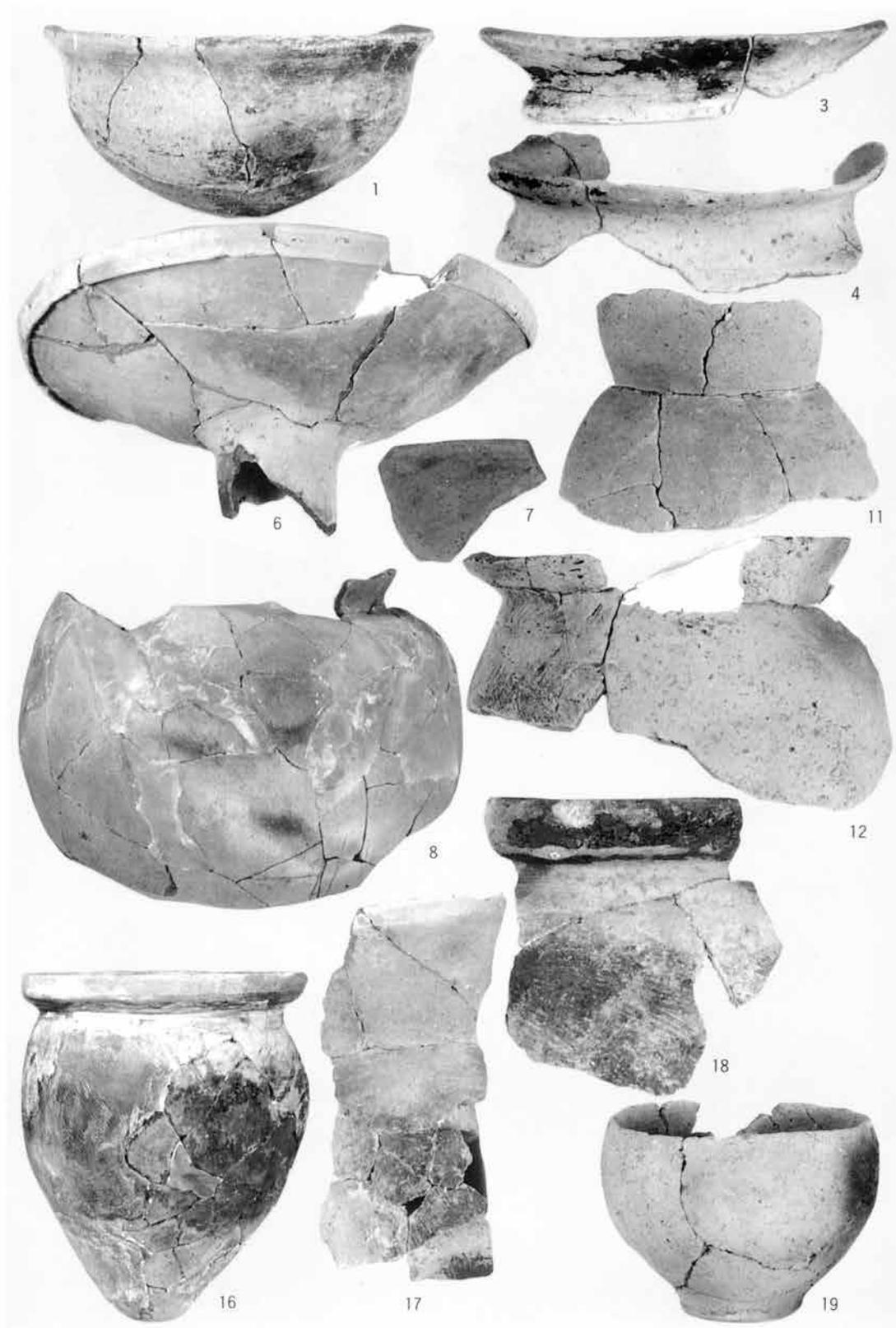
表土除去作業



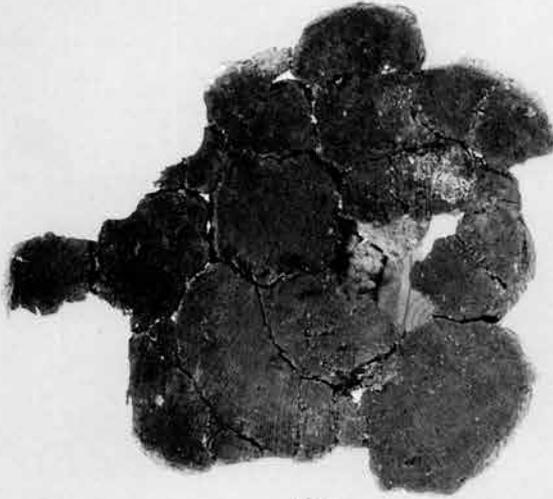
作業風景 地山掘り下げ



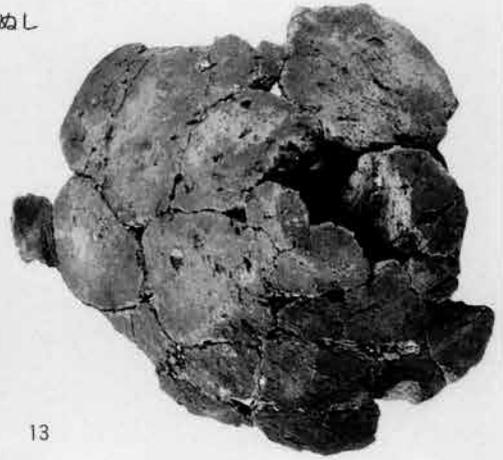
作業風景 SK01周辺



出土遺物



ぬし



13



14

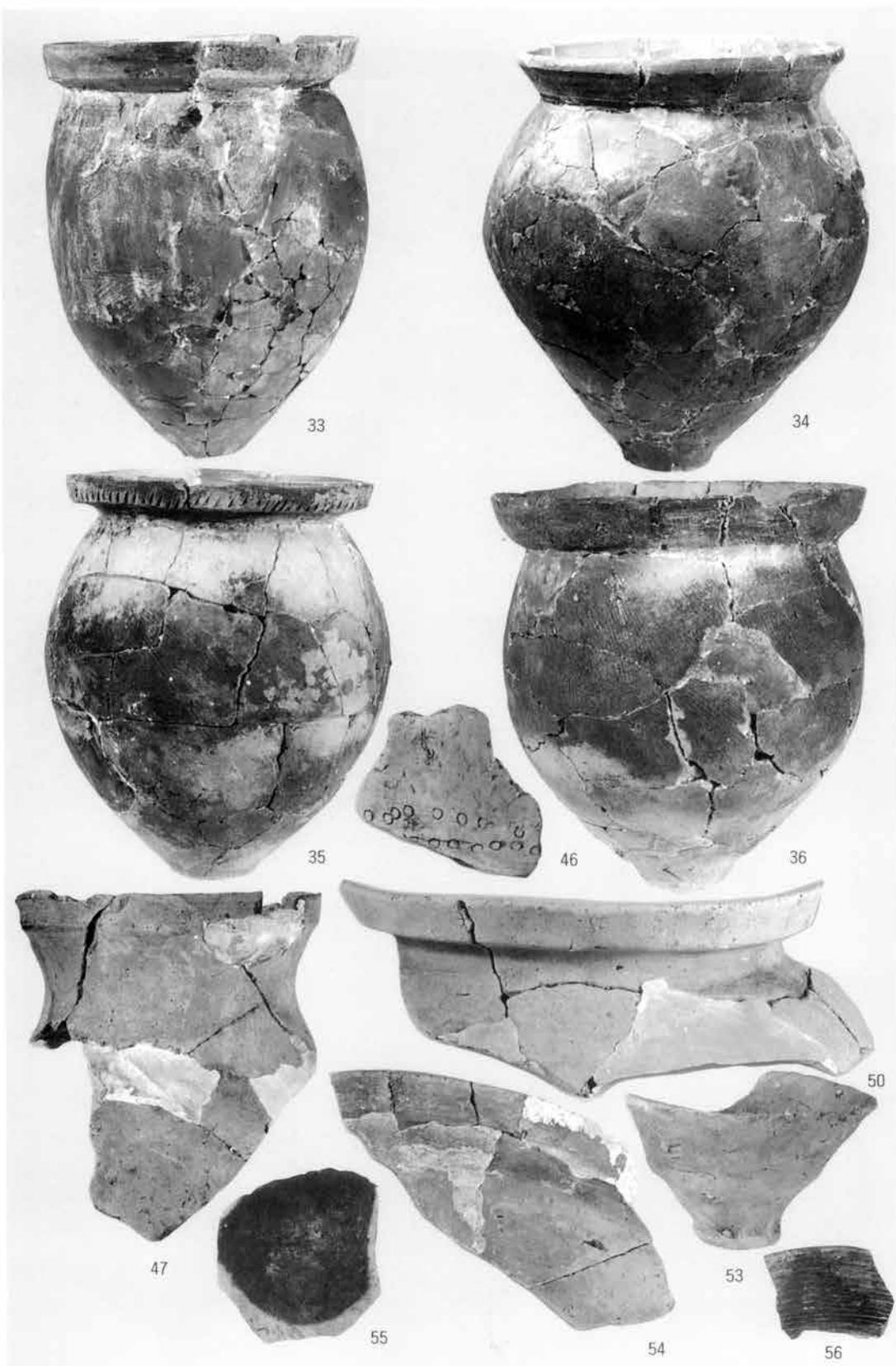


15





出土遺物



出土遺物



59



62



57



58



76



61



69



68



73



74



70





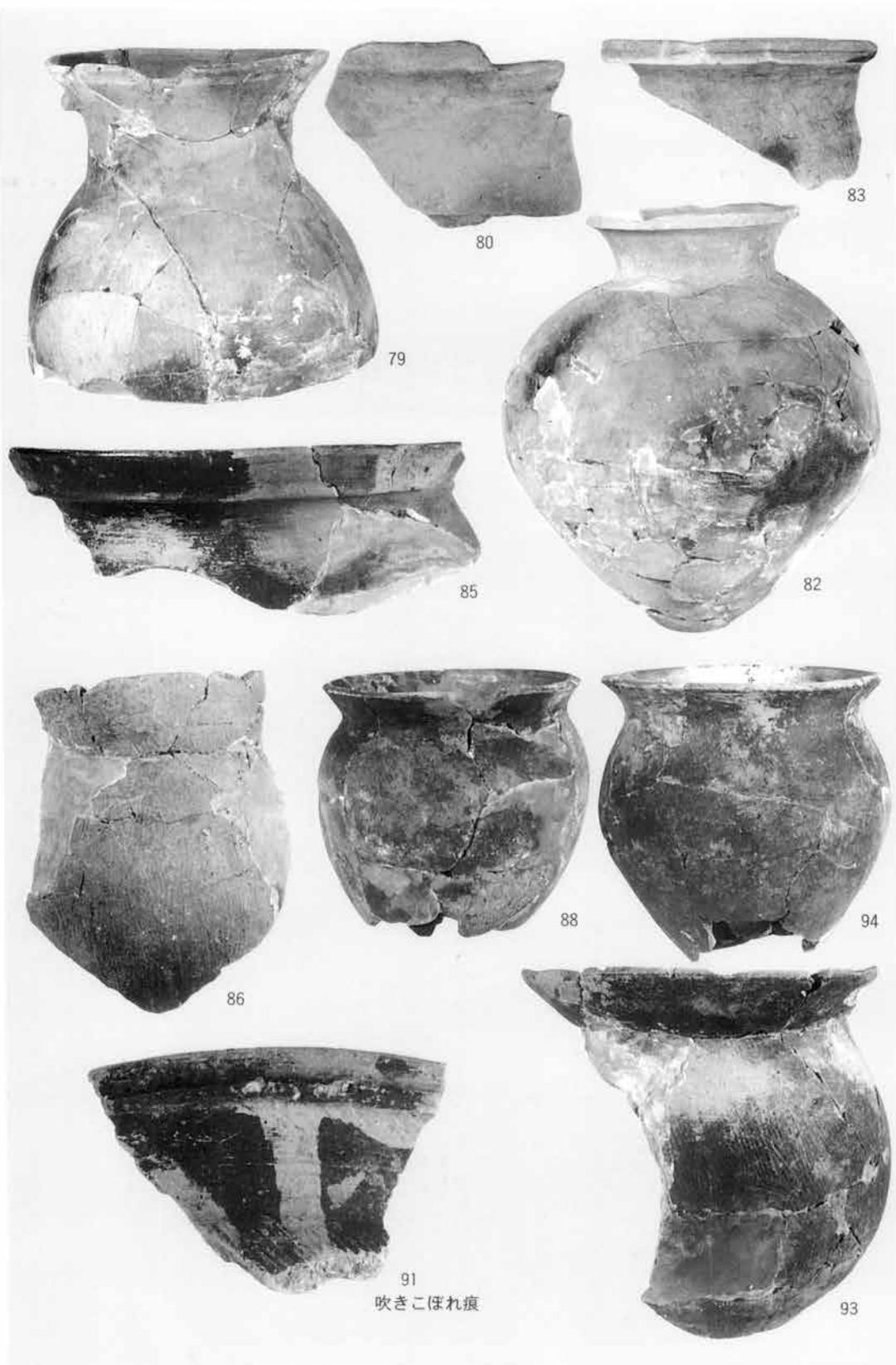
73内面の  
接合痕と調整



74内面の接合痕  
とおこげ



74外面の  
吹きこぼれ痕



出土遺物



95



96



97



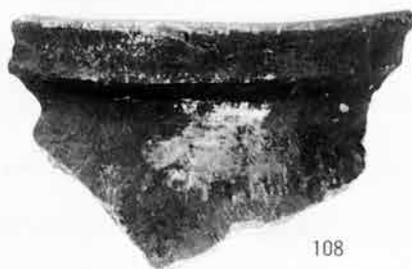
101



102



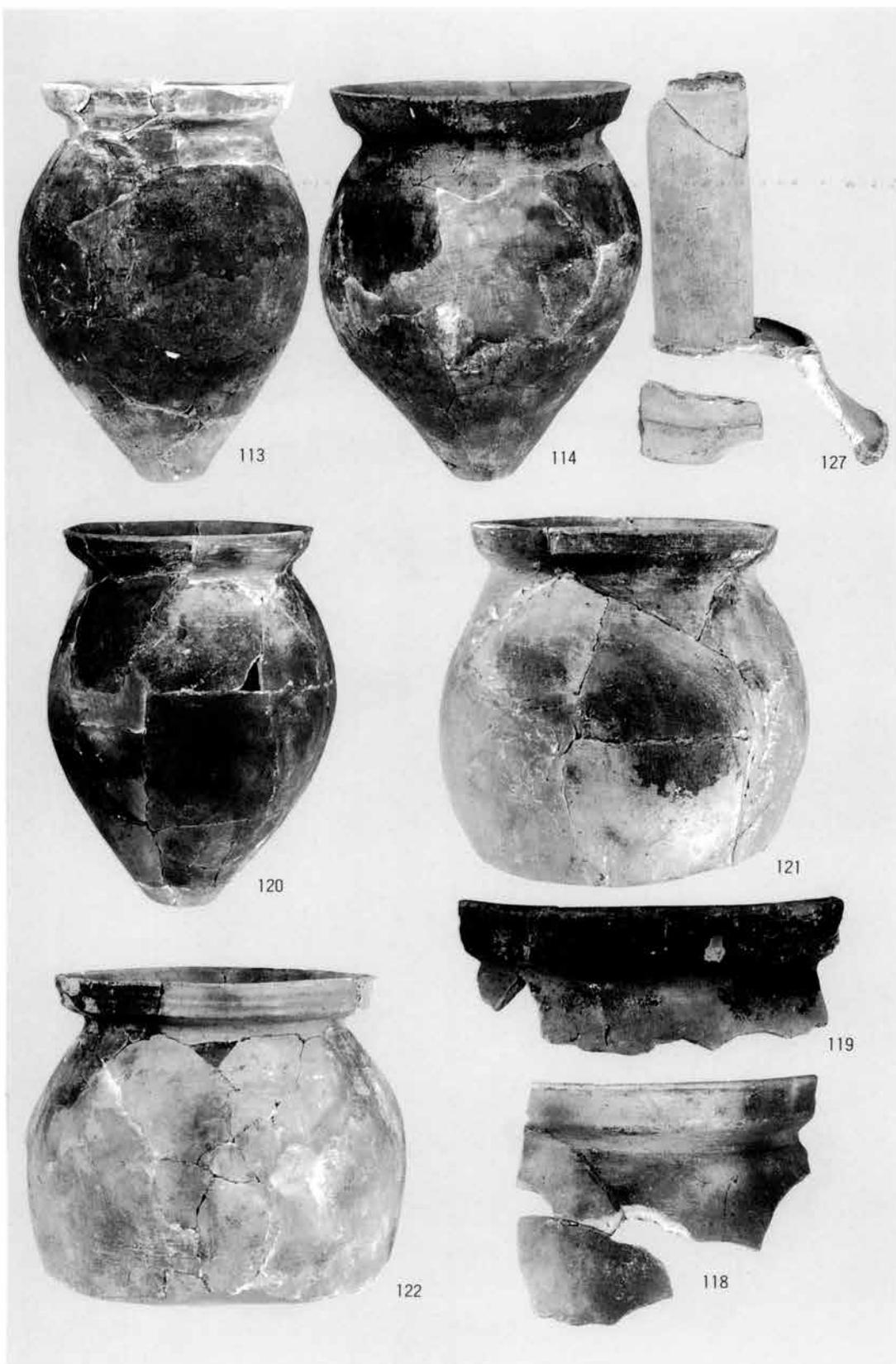
104



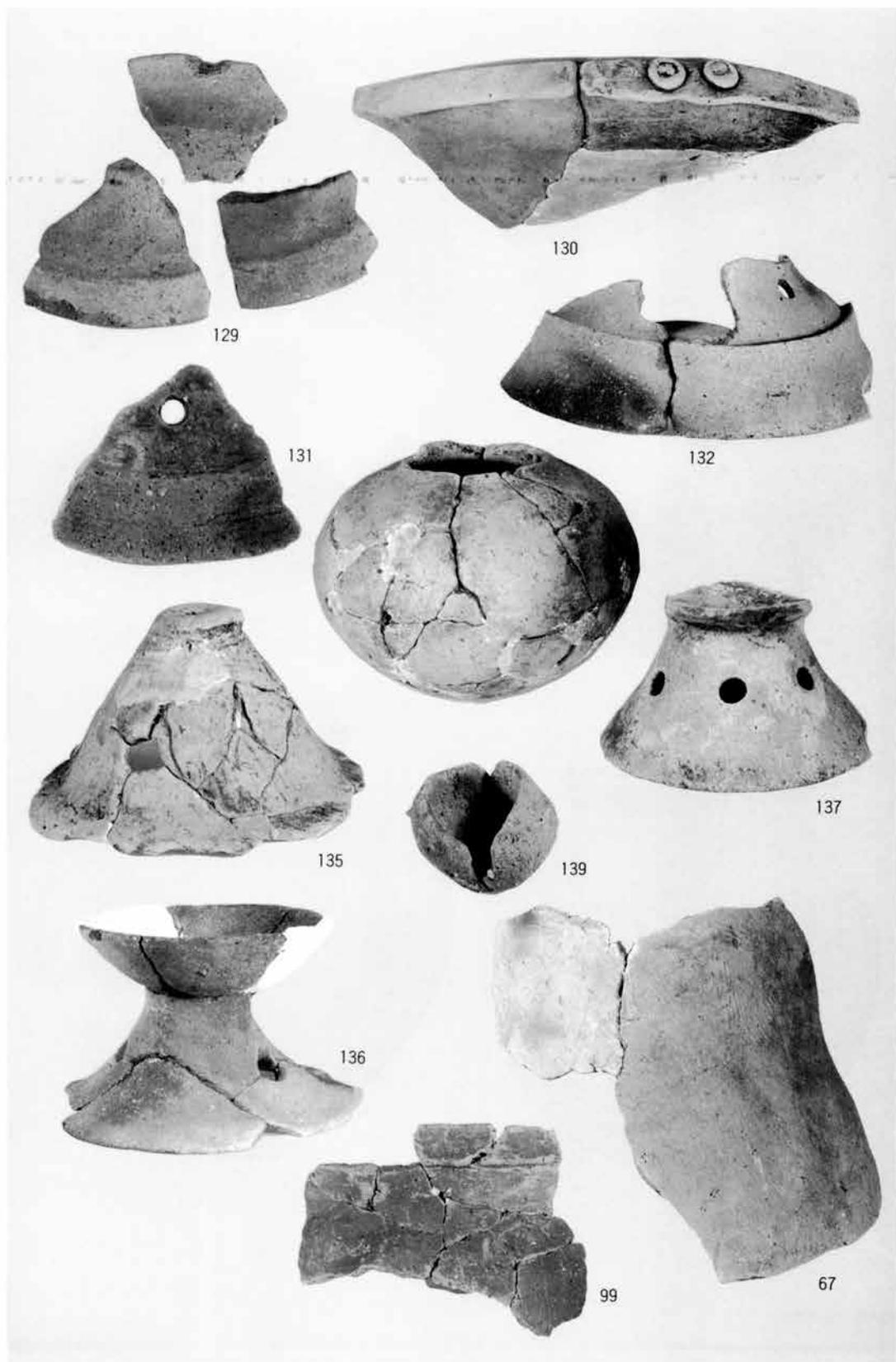
108



117



出土遺物



出土遺物



145



146



149



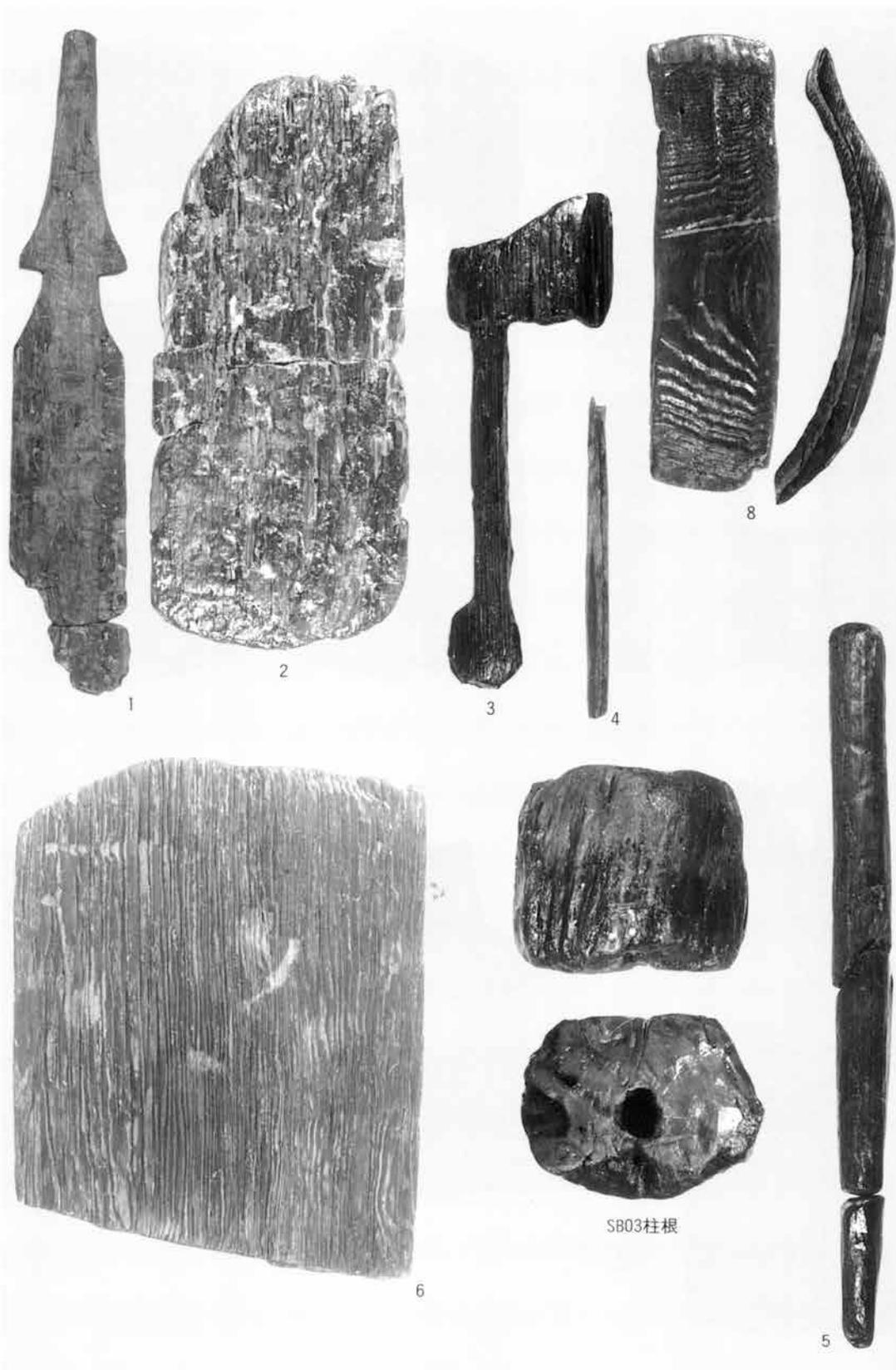
147



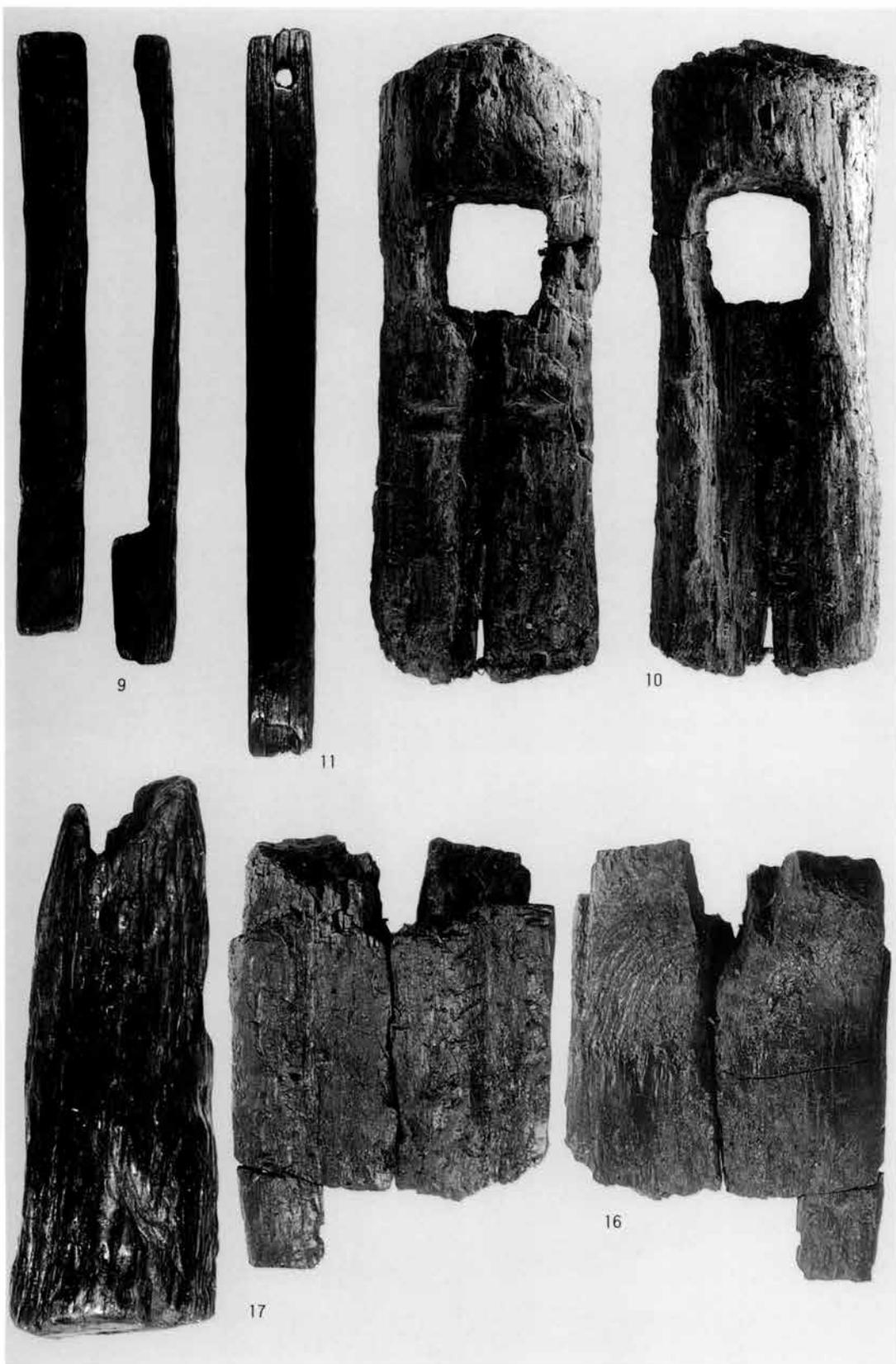
150



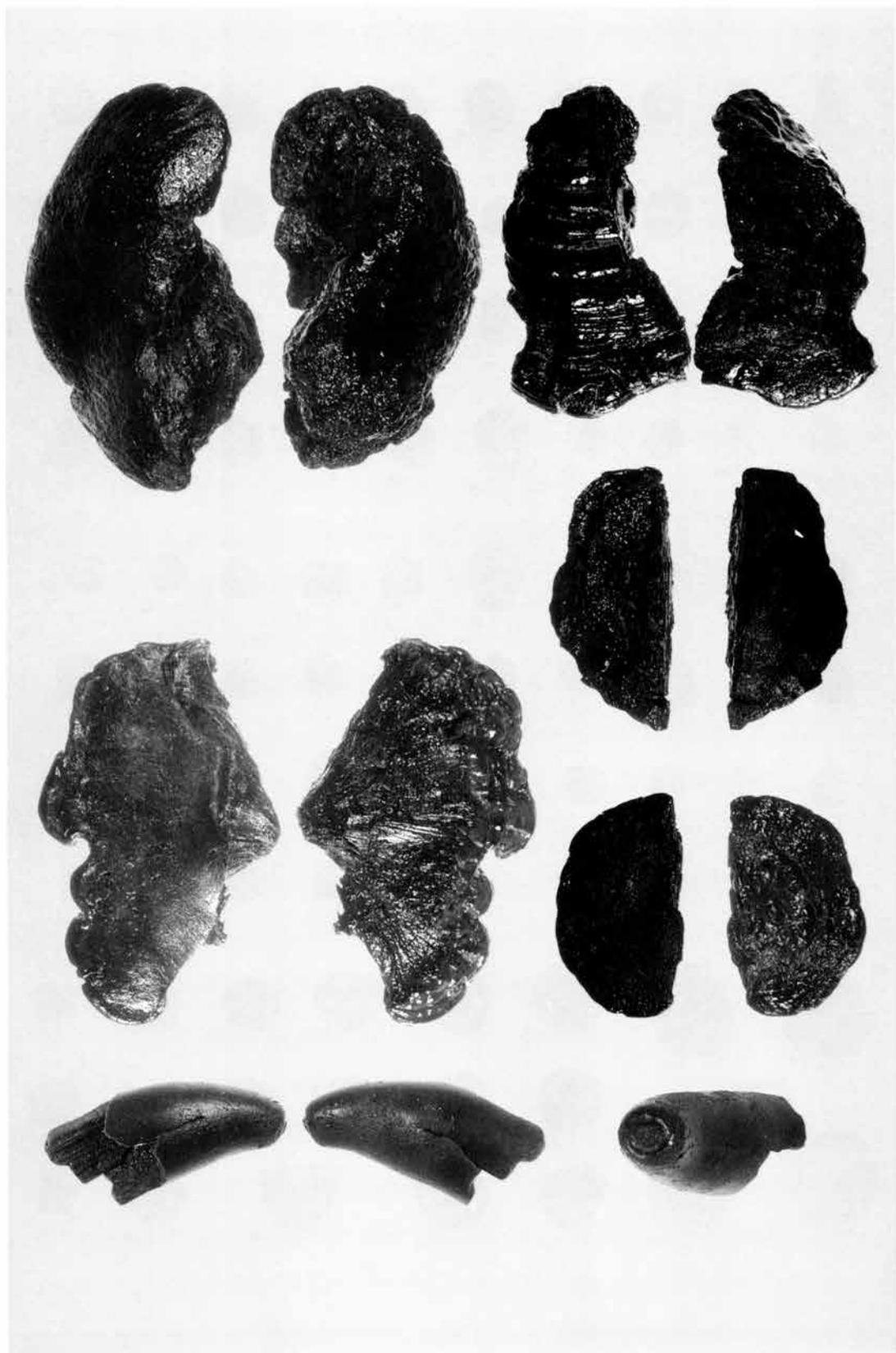
151



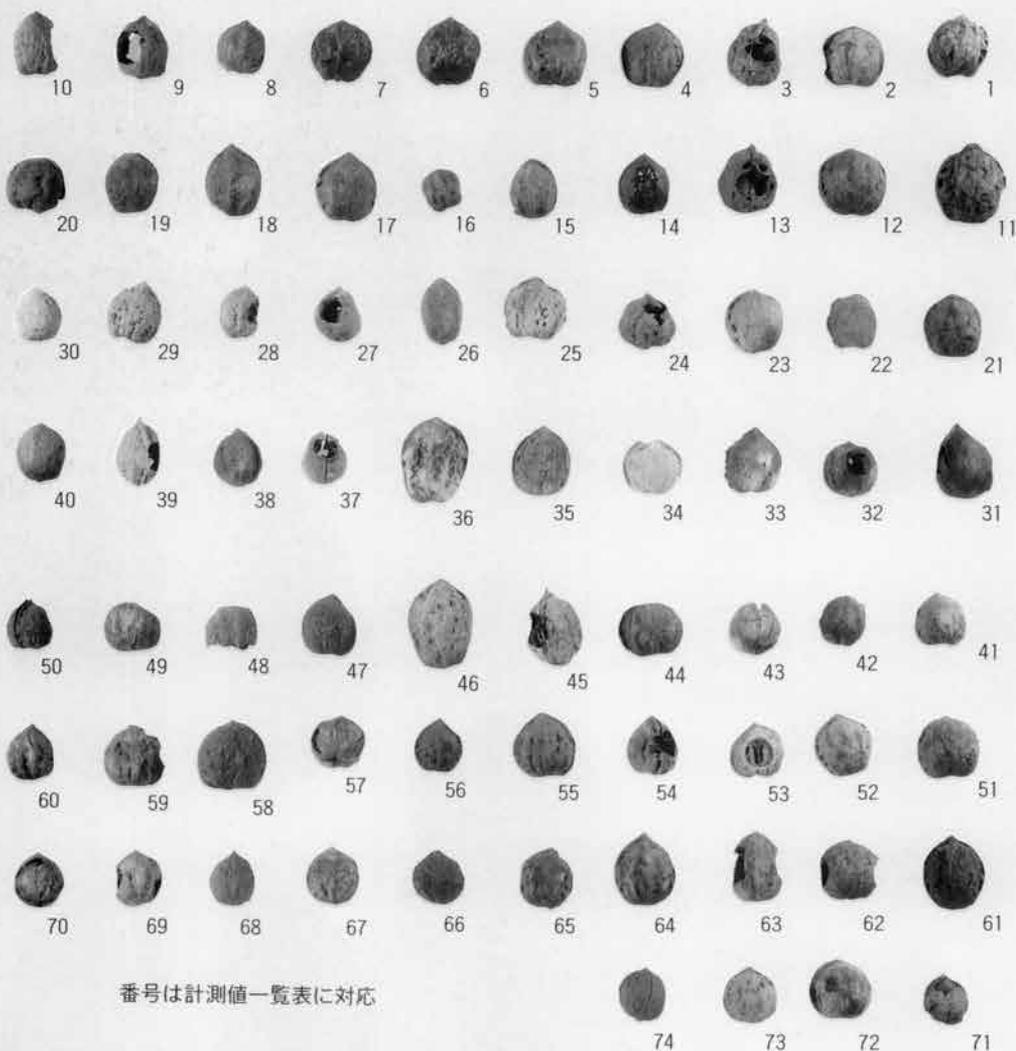
出土遺物・木器



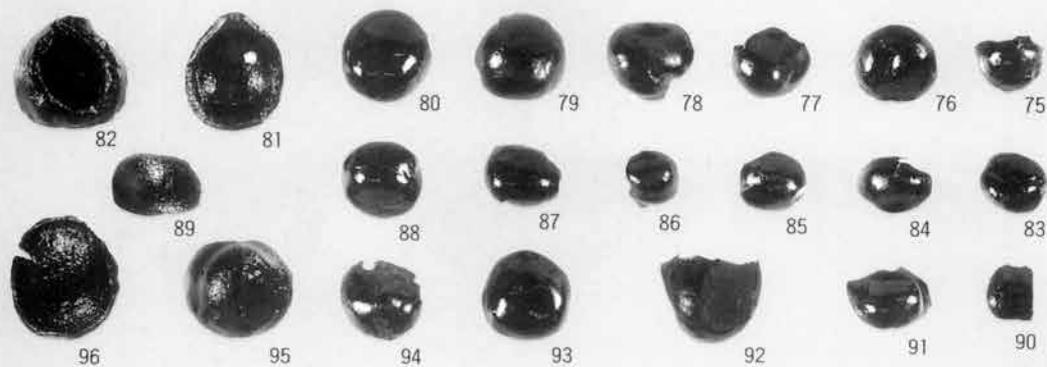
出土遺物・木器



出土遺物：サルノコシカケ、ヒョウタン



番号は計測値一覧表に対応



## 徳前 C 遺跡

主要地方道氷見・田鶴浜線道路改良  
工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成5年 3月 20日 印刷  
平成5年 3月 31日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター  
石川県金沢市米泉町4丁目133番地  
〒921 電話 (0762) 43-7692番代

印 刷 能登印刷株式会社

---